MAHA YANA SUTRA

# マハーヤーナ・スートラ

## PART2

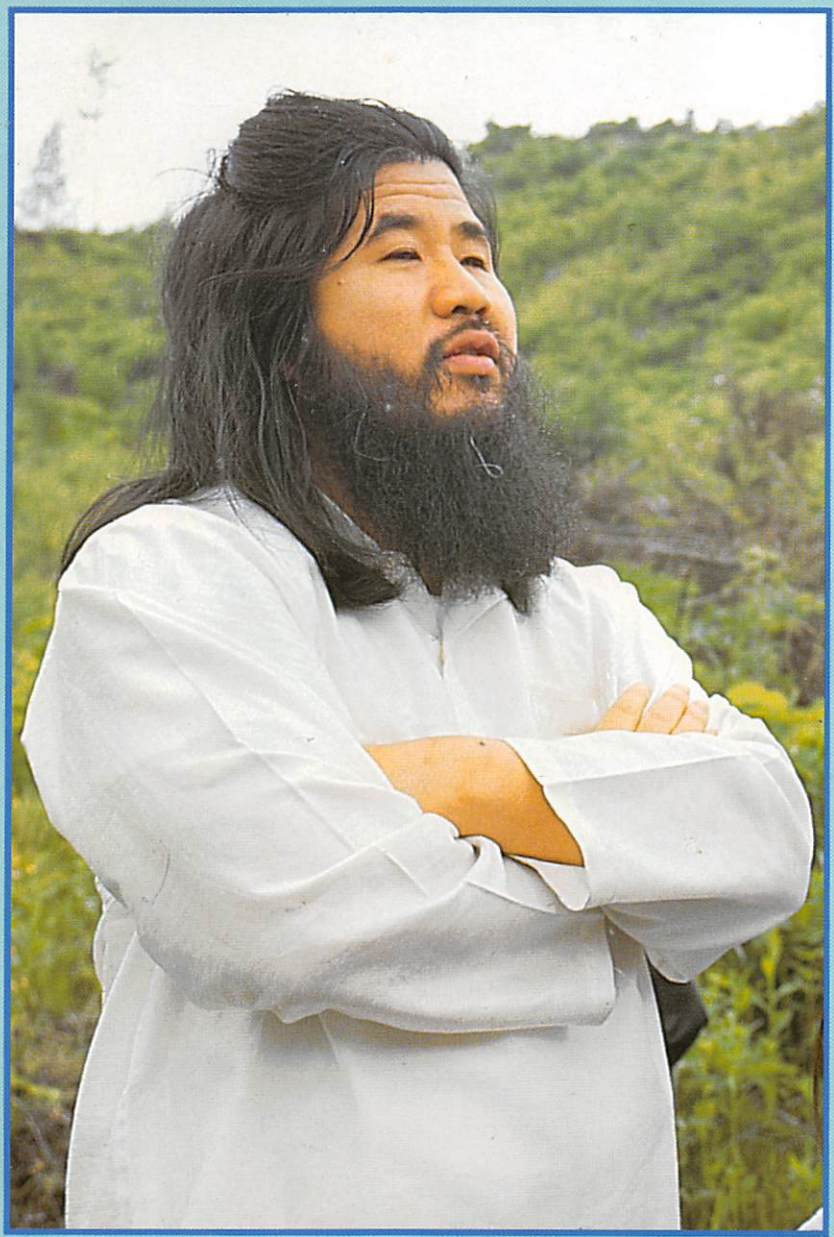
麻原彰晃 著

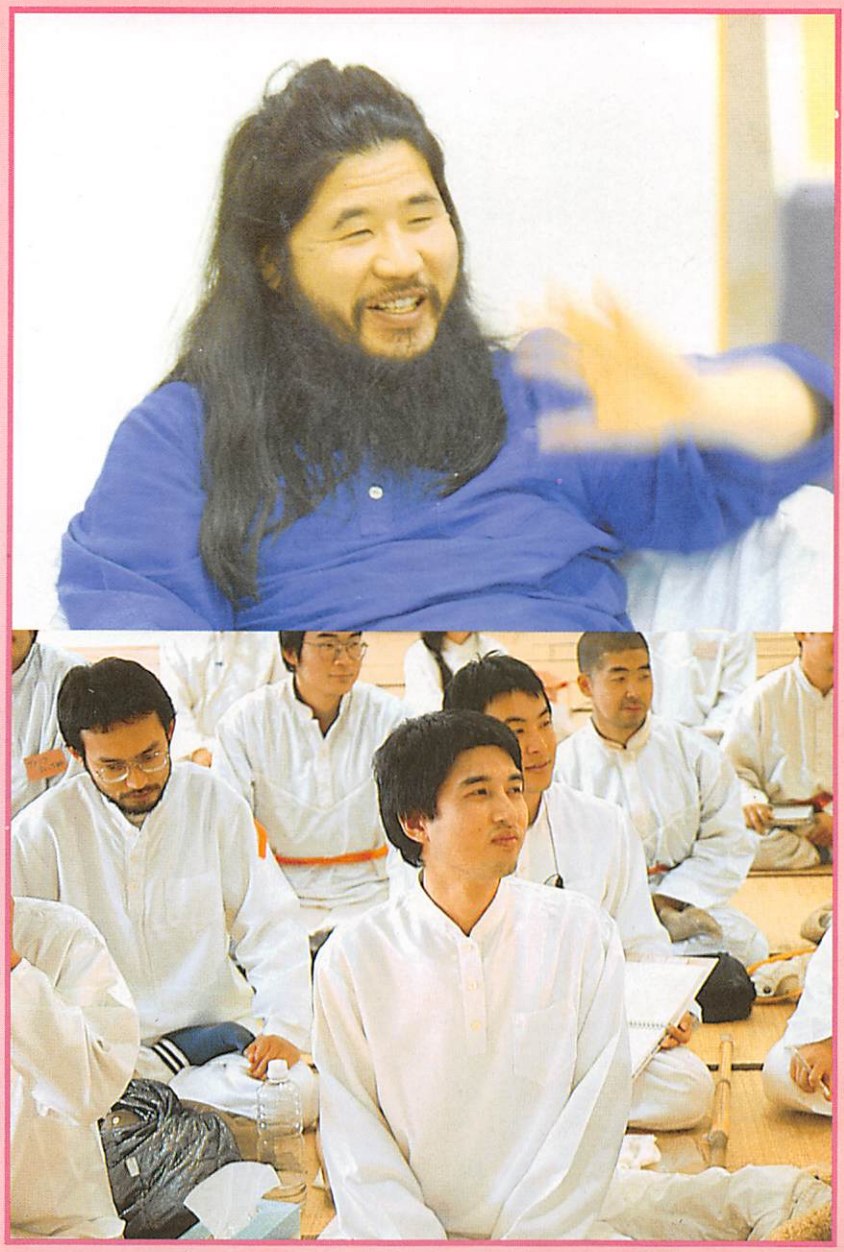
MAHA YANA SUTRA

# マハーヤーナ・スートラ

## PART2

麻原彰晃 著





# はじめに

日本では多くの仏典が出版されているが、そのほとんどは、インドの言葉であるサンスクリット語が中国語に訳された漢訳を基に、日本語に訳されたものである。つまりそこには二重の人的介入が加えられているのだ。したがって、その経典の内容については疑問視した方が妥当であろうと私は考えていた。この系統の仏教は北伝仏教と呼ばれている。

一方、最も古い仏典は、紀元前三世紀に当時のマウリヤ朝アショカ王の息子マヒンダによってスリランカに伝えられたといわれている。これを南伝仏教と呼ぶ。

現在仏教の原形が残っているタイやビルマ（ミャンマー）、ラオスなどの仏教も、このスリランカから伝えられたものである。

私は北伝の中心をなしている経典群『阿含経』と、南伝の『パーリ三蔵』との比較検討を試みてみた。すると、経典群の質、量ともに『パーリ三蔵』の方が優れているのである。もとより、それは当然のことと思われる。なぜなら、それが最も原始仏教の原形をとどめている経典群であることは、先程も述べた仏典の歴史的背景を見れば明らかであるからである。そして、今回その南伝仏教の精髄を皆さんに説き明かしたいと考えている。

本書は三つのパターンによって構成されている。第一部ではパーリ仏典のわかりやすい日本語訳。この訳のためには私の出家した内弟子十数名が日夜正確な訳語を選出するために尽力しているのであるが、最終的には私が自己の瞑想体験を絡めて慎重に決定している。しかも、直訳で平易な、わかりやすい日本語にするために注意を払っているから、読んでいただくだけで他の物語を読む感覚で理解していただけることだろう。

第二部は私の講話である。もともと仏典の妙味は対機説法である。したがって、時代の推移に伴って当然使われる比喩（方便）は移り変わるはずである。そのことに留意してこの講話を読んでいただけ

ると、第一部の経典の理解がスムーズになるはずである。

第三部は内弟子や帰依信男、帰依信女の体験談である。仏典というものは読むことに意義があるのではなく、その実践にこそ意義が見い出されるべきである。したがって、第三部に仏典に呼応する体験談を掲載させていただいた。

この私の活動が、シヴァ大神および諸々の覚者の意に少しでも反するならば、それについてザンゲさせていただく。

また、この大いなる功徳によって、すべての魂が迷妄、邪悪心、愛著から出離し、マハー・ニルヴァーナに入ることができますように。そして、すべての魂がマハー・ニルヴァーナに入るまで、シヴァ大神の僕として真理のお手伝いができますように。

一九九一年　春分　麻原彰晃

## 編集部注

「はじめに」の麻原尊師のお言葉にもあるように、オウム真理教における『南伝大蔵経』は、パーリ語原典を忠実に翻訳したもので、なおかつ、一般の方々が読んだだけで意味がわかるように工夫されております（例えば、「向煩悩滅尽多学男」という言葉は、「煩悩滅尽に向かう多学の男性」を意味する等）。

ここでなぜ、既製の仏教用語を用いていないかというと、経典の価値は、一つ一つの言葉の漢字の難しさにあるのではなく、その内容が理解でき、記憶し、実践できるかどうかにあるというのが、オウム真理教の見解だからです。

翻訳の際には最善の注意を払っておりますが、もし博識の方で、クレームその他がありましたら、「オウム出版編集部」までご意見をお寄せください。

### ◉主な訳語の対照表

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者
善逝→最上善逝
調御丈夫→丈夫調御者
仏陀→覚者
阿羅漢→供養値魂
沙門→出家修行者
婆羅門（バラモン）→祭司
刹帝利（クシャトリヤ）→武人
吠舎（ヴァイシャ）→庶民
首陀羅（シュードラ）→奴隷
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽（サンガ）→出家教団
阿修羅→不飲酒天

帝釈天（インドラ）→ 有能神（の王）
夜摩天 → 支配流転双生児天
兜率天 → 除冷淡天
化楽天、楽変化天 → 創造満足天
他化自在天 → 為他神以神通創造欲望満足従事天
梵天 → 神聖天
梵衆天 → 神聖衆天
涅槃（ニルヴァーナ）→ 煩悩破壊
五蘊
・色 → 形状・容姿
・受 → 感覚
・想 → 表象
・行 → 意志の遂行
・識 → 識別
四無量心
・慈 → 慈愛
・悲 → 聖哀れみ
・喜 → 称賛
・捨 → 聖無頓着
四聖諦 → 四つの絶対的真理
梵行 → 神聖行

八正道 → 聖なる八支の道
・正見 → 正見解
・正思惟 → （正思惟）
・正語 → （正語）
・正業 → 正行為
・正命 → 正生活
・正精進 → （正精進）
・正念 → 正記憶修習
・正定 → 正サマディ
四念処 → 四つの記憶修習 述
四正断 → 二正断二正勤
四神足 → 四つの如意の基礎
五根 → 五つの潜在性
五力 → 五つの能力
七覚支 → 七つの覚醒部分
四向四果 → 四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々
法施 → 真理施
綺語 → 軽薄語
貪・瞋・癡 → 愛著・邪悪心・迷妄
無明 → 非神秘力

CONTENTS

# 目次 マハーヤーナ・スートラ PART 2


はじめに
編集部注

◉八つの功徳

一、人生を物質的に豊かにする秘法公開――9
【『南伝大蔵経』増支部経典八集　第四「布施品」】

二、今生と来世の至福の泉――35
【麻原彰晃尊師説法】
- 第一話　望むものは思うがまま……
- 第二話　苦しみからの脱却――大いなる徳を持て
- 第三話　光に満ちた未来へのいざない

三、こんなにも変わった心と身体——69
【八つの功徳体験談集】

◉四預流支

一、あなたは未来の覚者——93
【『南伝大蔵経』相応部経典　大篇第十一「預流相応」】
二、いにしえの叡智をここに——123
【麻原彰晃尊師説法】
●第一話　真理——その素晴らしさ
●第二話　マハー・ニルヴァーナへ至る道
●第三話　天へ行く者、悪趣へ行く者
三、ついに手に入れた本当の幸福——163
【四預流支体験談集】

CONTENTS

CONTENTS


◉八正道

一、読むだけでわかる八正道の真実——187

【『南伝大蔵経』相応部経典　大篇第一「道相応」】

二、今甦った原始仏教の真髄——223

【麻原彰晃尊師説法】

●第一話　いつの日か覚醒するために

●第二話　修行——苦から楽への転化

●第三話　実践的八正道と四無量心

三、私は解脱し、人間を超えた——275

【八正道体験談集】



■経典翻訳…ヴァンギーサ師
南伝大蔵経翻訳チーム


CONTENTS

# 八つの功徳

サキャ神賢

人生を物質的に豊かにする秘法公開

増支部経典八集 第四

布施品

## Dāna-vagga 「布施品」（ダーナ・ヴァッガ）

### ◆三四　田圃

一　向煩悩滅尽多学男達よ、八つの要素を具足した田圃に種子をまくときには、大いなる果報がなく、大いなる味著がなく、優れた生長がないのだ。それは、どのような八つの要素を具足することであろうか。

二　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに田圃があって、凸凹があり、小石があり、塩分があり、地表が深くなく、流入を具足せず、流出を具足せず、水路を具足せず、畦を具足していない。

向煩悩滅尽多学男達よ、このような八つの要素を具足した田圃に種子をまくときには、大いなる果報がなく、大いなる味著がなく、優れた生長がないのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、八つの要素を具足した出家修行者や祭司に布施をするときには、大いなる果報がなく、大いなる功徳がなく、大いなる光がなく、大いなる拡大がないのだ。それは、どのような八つの要素を具足することであろうか。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに出家修行者や祭司がいて、邪見解・邪思惟・邪語・邪行為・

邪生活・邪精進・邪記憶修習・邪サマディがある。

向煩悩滅尽多学男達よ、このような八つの要素を具足した出家修行者や祭司に布施をするときには、大いなる果報がなく、大いなる功徳がなく、大いなる光がなく、大いなる拡大がないのだ。

**四** 向煩悩滅尽多学男達よ、しかし、八つの要素を具足した田圃に種子をまくときには、大いなる果報があり、大いなる味著があり、優れた生長があるのだ。それは、どのような八つの要素を具足することであろうか。

**五** 向煩悩滅尽多学男達よ、ここに田圃があって、凸凹がなく、小石がなく、塩分がなく、地表が深く、流入を具足し、流出を具足し、水路を具足し、畦を具足している。

向煩悩滅尽多学男達よ、このような八つの要素を具足した田圃に種子をまくときには、大いなる果報があり、大いなる味著があり、優れた生長があるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、八つの要素を具足した出家修行者や祭司に布施をするときには、大いなる果報があり、大いなる功徳があり、大いなる光があり、大いなる拡大があるのだ。それは、どのような八つの要素を具足することであろうか。

**六** 向煩悩滅尽多学男達よ、ここに出家修行者や祭司がいて、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正精進・正記憶修習・正サマディがある。

向煩悩滅尽多学男達よ、このような八つの要素を具足した出家修行者や祭司に布施をするとき

には、大いなる果報があり、大いなる功徳があり、大いなる光があり、大いなる拡大があるのだ。12

具足した田圃に具足した種子をまき、
天において具足するならば、穀物を具足する。
息災を具足し、生長があることを具足し、
広大を具足し、実に果報を具足する。
このように、戒を具足する方に対して食施(じきせ)を具足し、
その具足がなされたならば、具足に導かれる。
したがって、具足を願い、ここに具足した人は、
智慧(ちえ)を具足する方に親しむがよい。こうして具足は成就される。
智徳成就者(ちとくじょうじゅしゃ)は心の具足を得て、
カルマの具足をなし、そして福利の具足を得る。
世界を如実に知り、見解の具足を得て、
道の具足に達して、意識を具足して進む。
すべての垢(あか)を振り払い、煩悩破壊(ぼんのうはかい)の具足を得て、
すべての苦から解脱し、そのすべてを具足するのである。

## ◆三五　布施者の転生

一　向煩悩滅尽多学男達よ、八つの布施者の転生がある。それでは、八つとは何であろうか。

二　向煩悩滅尽多学男達よ、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は裕福な武人や裕福な祭司や裕福な長者が、五妙欲（ごみょうよく）を授けられ、具足し、楽しんでいるのを見る。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、裕福な武人や裕福な祭司や裕福な長者の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、裕福な武人や裕福な祭司や裕福な長者の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が清浄であるがゆえに成就するのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施

すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は「四大王天（しだいおうてん）は長寿で美しく、安楽に満ちている」と聞く。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、四大王天の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、四大王天の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が清浄であるがゆえに成就するのである。

**四**　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は「三十三天は長寿で美しく、安楽に満ちている」と聞く。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、三十三天の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を

下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、三十三天の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が清浄であるがゆえに成就するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は「支配流転双生児天（しはいるてんそうせいじてん）は長寿で美しく、安楽に満ちている」と聞く。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、支配流転双生児天の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、支配流転双生児天の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が清浄であるがゆえに成就するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲

み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は「除冷淡天（じょれいたんてん）は長寿で美しく、安楽に満ちている」と聞く。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、除冷淡天の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、除冷淡天の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が清浄であるがゆえに成就するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は「創造満足天（そうぞうまんぞくてん）は長寿で美しく、安楽に満ちている」と聞く。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、創造満足天の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、創造満足天の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が清浄であるがゆえに成就するのである。

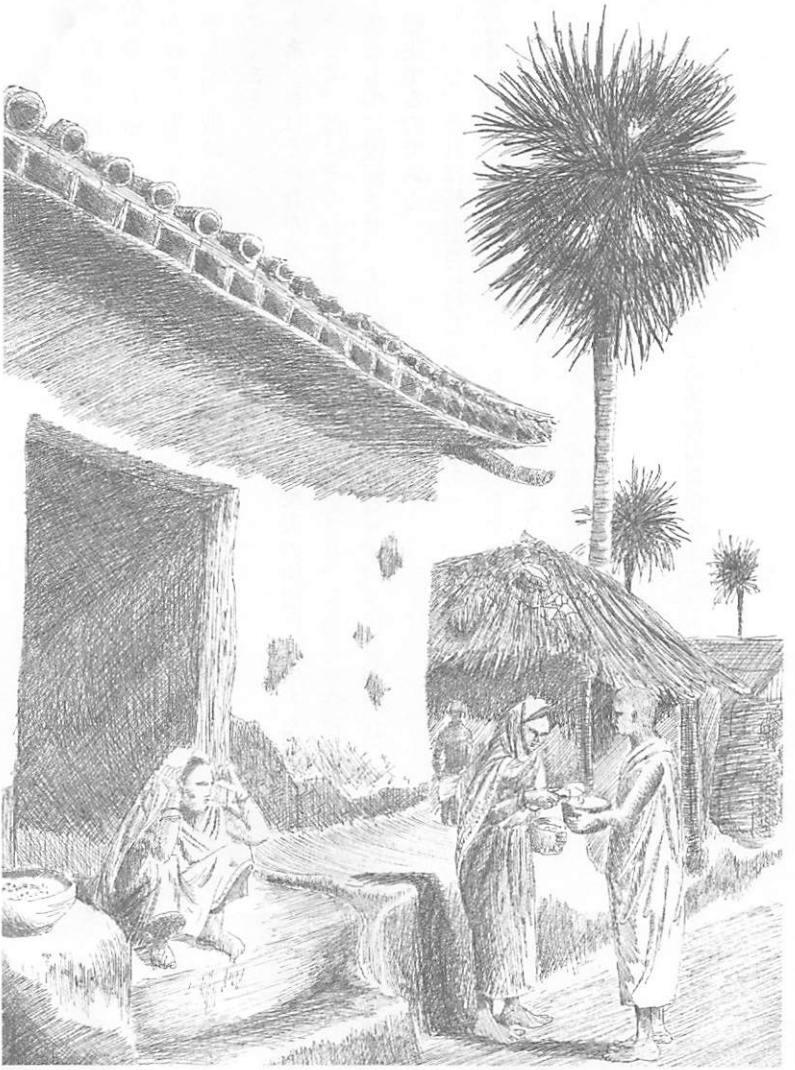
向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は「為他神以神通創造欲望満足従事天は長寿で美しく、安楽に満ちている」と聞く。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、為他神以神通創造欲望満足従事天の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、為他神以神通創造欲望満足従事天の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が清浄であるがゆえに成就するのである。



五　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、出家修行者や祭司に対して、食べ物・飲み物・衣服・乗り物・花飾り・香料・化粧品・寝具・住居・灯明といった布施をする。彼は施すがゆえに期待するのだ。

そして、彼は「神聖衆天（しんせいしゅうてん）は長寿で美しく、安楽に満ちている」と聞く。そこで、彼はこう考えるのである。

「ああ、私はその身が壊れ、死んだ後、神聖衆天の仲間に転生したい。」

そして、彼はその心を集中し、その心を確定させ、その心を修習する。したがって、その心を下劣なものに没頭させ、より優れたものを修習せず、その身が壊れ、死んだ後、神聖衆天の仲間に転生するのである。

しかし、それは持戒者に対して説くのであって、破戒者に対してではないのだ。また、それは離貪者（りとんしゃ）に対して説くのであって、有貪者（うとんしゃ）に対してではないのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、持戒者の決心が離貪しているがゆえに成就するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これらが八つの布施者の転生なのである。

## ◆三六　徳行

一　向煩悩滅尽多学男達よ、三つの徳行の要素がある。それでは、三つとは何であろうか。

二　すなわちそれは、布施に関する徳行の要素、戒に関する徳行の要素、修習に関する徳行の要素のことである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは少なく、戒に関する徳行の要素をなすことは少なく、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、不運な人間に転生するのである。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは適度であり、戒に関する徳行の要素をなすことは適度であり、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、幸運な人間に転生するのである。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、戒に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、四大王天の仲間に転生するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そこでは、四大王は布施に関する徳行の要素をなすことが大変多く、戒に関する徳行の要素をなすことが大変多いので、四大王天の神々を十の点によってしのいでいるのだ。すなわちそれは、天の寿命・天の容色・天の安楽・天の名声・天の権力・天の容姿・天の声・天の香・天の味・天の触のことである。

六　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは

非凡であり、戒に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、三十三天の仲間に転生するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そこでは、有能神（ゆうのうしん）の王は布施に関する徳行の要素をなすことが大変多く、戒に関する徳行の要素をなすことが大変多いので、三十三天の神々を十の点によってしのいでいるのだ。すなわちそれは、天の寿命・天の容色・天の安楽・天の名声・天の権力・天の容姿・天の声・天の香・天の味・天の触のことである。

七　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、戒に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、支配流転双生児天の仲間に転生するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そこでは、優れた支配流転双生児天子は布施に関する徳行の要素をなすことが大変多く、戒に関する徳行の要素をなすことが大変多いので、支配流転双生児天の神々を十の点によってしのいでいるのだ。すなわちそれは、天の寿命・天の容色・天の安楽・天の名声・天の権力・天の容姿・天の声・天の香・天の味・天の触のことである。

八　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、戒に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、除冷淡天の仲間に転生するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そこでは、正除冷淡天子（せいじょれいたんてんし）は布施に関する徳行の要素をなすことが大変多く、戒に関する徳行の要素をなすことが大変多いので、除冷淡天の神々を十の点によってしのいでいるのだ。すなわちそれは、天の寿命・天の容色・天の安楽・天の名声・天の権力・天の容姿・天の声・天の香・天の味・天の触のことである。

九　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、戒に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、創造満足天の仲間に転生するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そこでは、優れた神通創造天子（じんつうそうぞうてんし）は布施に関する徳行の要素をなすことが大変多く、戒に関する徳行の要素をなすことが大変多いので、創造満足天の神々を十の点によってしのいでいるのだ。すなわちそれは、天の寿命・天の容色・天の安楽・天の名声・天の権力・天の容姿・天の声・天の香・天の味・天の触のことである。

一〇　向煩悩滅尽多学男達よ、また、ここにある人がいて、布施に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、戒に関する徳行の要素をなすことは非凡であり、修習に関する徳行の要素に至ってはいない。そして、彼はその身が壊れ、死んだ後、為他神以神通創造欲望満足従事天の仲間に転生するのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そこでは、欲望満足天子（よくぼうまんぞくてんし）は布施に関する徳行の要素をなすことが大変

多く、戒に関する徳行の要素をなすことが大変多いので、為他神以神通創造欲望満足従事天の神々を十の点によってしのいでいるのだ。すなわちそれは、天の寿命・天の容色・天の安楽・天の名声・天の権力・天の容姿・天の声・天の香・天の味・天の触のことである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これらが三つの徳行の要素なのである。

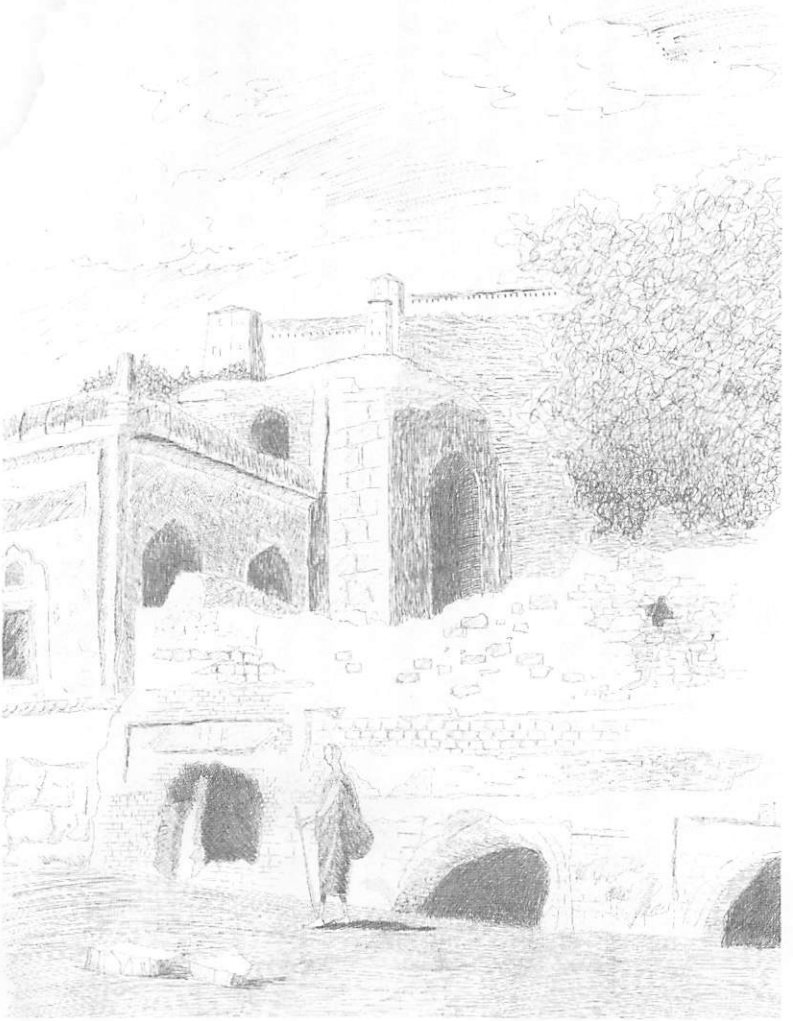
## ◆三九　あふれ出たもの

一　向煩悩滅尽多学男達よ、功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることには、八つのものがあり、それらは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

それでは、八つとは何であろうか。

二　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに聖なる多学の弟子がいて、覚者に帰依をする。向煩悩滅尽多学男達よ、これが、第一の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、次にまた、聖なる多学の弟子がいて、法に帰依をする。向煩悩滅尽



多学男達よ、これが、第二の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、次にまた、聖なる多学の弟子がいて、出家教団に帰依をする。向煩悩滅尽多学男達よ、これが、第三の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、五つの布施がある。それは、大いなる布施であり、最初に知られ、長い間知られ、伝統的に知られ、古くからあり、かつて混濁せず、かつてまだ混濁せず、今も混濁せず、後にも混濁せず、知的な出家修行者や祭司によって非難されることのないものである。

それでは、五つとは何であろうか。

六　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに聖なる多学の弟子がいて、殺生を捨断（しゃだん）して、殺生を離れた。向煩悩滅尽多学男達よ、そして、殺生を離れた聖なる多学の弟子は、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施す。そこで、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施して、無数の安心と好意と苦悩からの自由を授かるのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これが第一の布施なのだ。すなわちそれは、大いなる布施であり、最初に知られ、長い間知られ、伝統的に知られ、古くからあり、かつて混濁せず、かつてまだ混濁せず、今も混濁せず、後にも混濁せず、知的な出家修行者や祭司によって非難されることのないものである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そしてこれが、第四の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

七　向煩悩滅尽多学男達よ、次にまた、聖なる多学の弟子がいて、偸盗（ちゅうとう）を捨断して、偸盗を離れた。向煩悩滅尽多学男達よ、そして、偸盗を離れた聖なる多学の弟子は、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施す。そこで、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施して、無数の安心と好意と苦悩からの自由を授かるのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これが第二の布施なのだ。すなわちそれは、大いなる布施であり、最初に知られ、長い間知られ、伝統的に知られ、古くからあり、かつて混濁せず、かつてまだ混濁せず、今も混濁せず、後にも混濁せず、知的な出家修行者や祭司によって非難されることのないものである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そしてこれが、第五の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、次にまた、聖なる多学の弟子がいて、愛欲における邪行を離れた。向煩悩滅尽多学男達よ、そして、愛欲における邪行を離れた聖なる多学の弟子は、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施す。そこで、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施して、無数の安心と好意と苦悩からの自由を授かるのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これが第三の布施なのだ。すなわちそれは、大いなる布施であり、最初に知られ、長い間知られ、伝統的に知られ、古くからあり、かつて混濁せず、かつてまだ混濁せず、今も混濁せず、後にも混濁せず、知的な出家修行者や祭司によって非難されることのないものである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そしてこれが、第六の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導

くのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、次にまた、聖なる多学の弟子がいて、妄語を捨断して、妄語を離れた。向煩悩滅尽多学男達よ、そして、妄語を離れた聖なる多学の弟子は、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施す。そこで、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施して、無数の安心と好意と苦悩からの自由を授かるのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これが第四の布施なのだ。すなわちそれは、大いなる布施であり、最初に知られ、長い間知られ、伝統的に知られ、古くからあり、かつて混濁せず、かつてまだ混濁せず、今も混濁せず、後にも混濁せず、知的な出家修行者や祭司によって非難されることのないものである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そしてこれが、第七の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

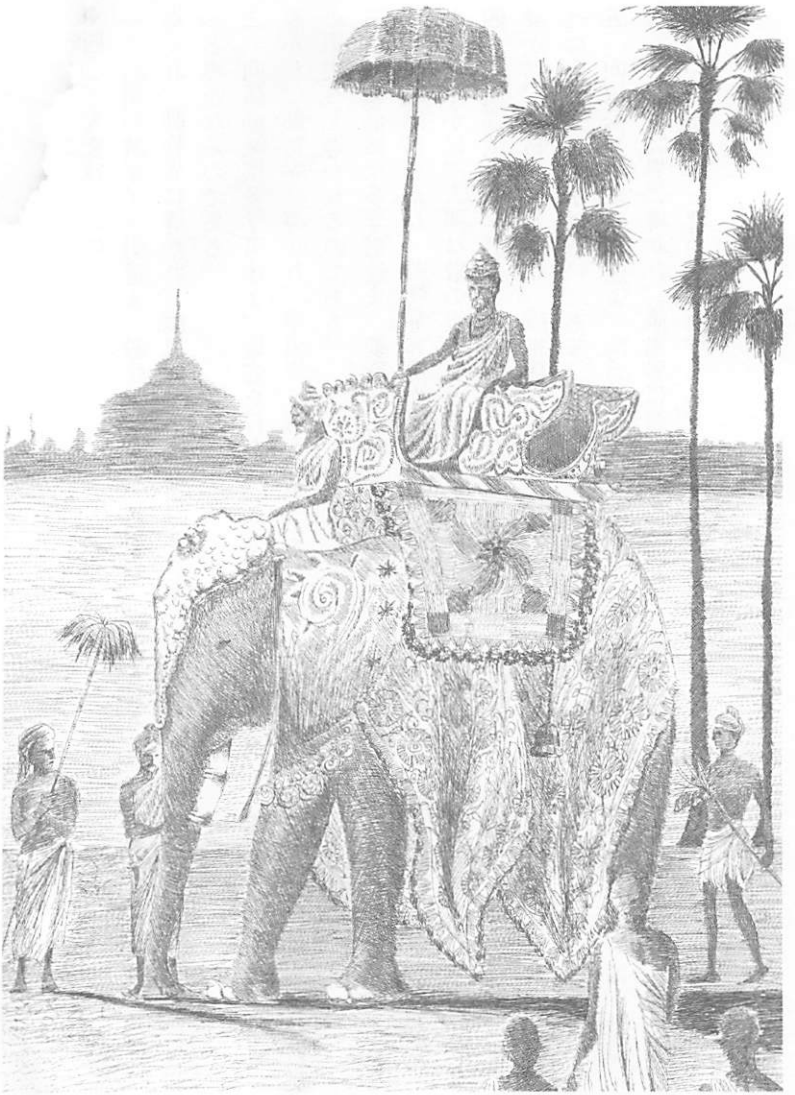
向煩悩滅尽多学男達よ、次にまた、聖なる多学の弟子がいて、放逸さの原因である穀物酒や果実酒などの酒を捨断して、放逸さの原因である穀物酒や果実酒などの酒を離れた。向煩悩滅尽多学男達よ、そして、放逸さの原因である穀物酒や果実酒などの酒を離れた聖なる多学の弟子は、

無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施す。そこで、無数の衆生に安心を施し、好意を施し、苦悩からの自由を施して、無数の安心と好意と苦悩からの自由を授かるのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これが第五の布施なのだ。すなわちそれは、大いなる布施であり、最初に知られ、長い間知られ、伝統的に知られ、古くからあり、かつて混濁せず、かつてまだ混濁せず、今も混濁せず、後にも混濁せず、知的な出家修行者や祭司によって非難されることのないものである。

向煩悩滅尽多学男達よ、そしてこれが、第八の功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、これらが、八つの功徳の器からあふれ出たもので生きること・正しさの器からあふれ出たもので生きること・神聖食・天に生まれること・安楽の結果が生じること・天に導かれることなのであり、それらは、好むこと・楽しむこと・喜ぶこと・利益・安楽に導くのである。



◆四〇　大変速やかに

一　向煩悩滅尽多学男達よ、殺生を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、殺生の結果、大変速やかに、人間は短命へと導かれるのである。

二　向煩悩滅尽多学男達よ、偸盗を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、偸盗の結果、大変速やかに、人間は財産の損失へと導かれるのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、愛欲における邪行を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、愛欲における邪行の結果、大変速やかに、人間は敵の恨みへと導かれるのである。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、妄語を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、妄語の結果、大変速やかに、人間は偽りへの中傷へと導かれるのである。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、両舌を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、両舌の結果、大変速やかに、人間は友人との仲たがいへと導かれるのである。

六　向煩悩滅尽多学男達よ、悪口を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、悪口の結果、大変速やかに、人間は快くない声へと導かれるのである。

七　向煩悩滅尽多学男達よ、軽薄語を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、軽薄語の結果、大変速やかに、人間は喜ばしくない言葉へと導かれるのである。

八　向煩悩滅尽多学男達よ、飲酒を行ない、修習し、何度も繰り返して実践するならば、地獄に導かれ、動物界に導かれ、餓鬼界に導かれる。そして、飲酒の結果、大変速やかに、人間は発狂へと導かれるのである。

# 八つの功徳

## 今生と来世の至福の泉

麻原彰晃尊師

第一話　望むものは思うがまま
第二話　苦しみからの脱却
第三話　光に満ちた未来への

# 第一話　望むものは思うがまま……

九一年一月二十二日　於・広島支部

## ◉不動心の大切さ

皆さんもご存じのとおり、イラク対多国籍軍の戦争が始まりました。この広島は一九四五年、つまり昭和二十年に原爆という大変つらい洗礼を受けた土地です。今、正義という名のもとに、多国籍軍はイラクに対して七千回とも八千回ともいわれる空爆を繰り返しています。そして、この行為は、いずれ第三次世界大戦へと引き金を引く結果となることでしょう。

いかなる状況にあろうとも決して心を乱さないこと。それを不動心といいます。そして、この不動心はその心を培い、得ている者とそうでない者とでは、生まれ変わり、つまり輪廻転生の行き先が違うといわれています。もちろん不動心だけが、来世を決定するわけではありません。その前に多くの要素があります。それは例えば、大いに功徳を積む。あるいは禁欲的な生活、つまり持戒を守って生活する、あるいは瞑想を行なう等です。そして、その生で培ったそういうものを生かせるか生かせないかが、不動心にかかっているわけです。

一九九〇年代は大いに揺れ動くはずです。そして、その手始めとしてイラク、多国籍軍の戦争

が始まりました。そして、ソビエトでも内政における弾圧が強化されています。私達の寿命というものは、こういう外的条件により、いつなくなるかわかりません。

人は必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。これが私の最も日々考えている言葉です。そして、いかなる条件であろうともきちんと素晴らしい世界へ、高い世界へ転生していただくこと、これが、私とそしてオウム真理教の役割だと考えています。

### ◉平安な心の獲得

では一体、何をどのようにすれば効果的な人生を送ることができ、そして次の生、平安で幸福な世界へと転生することができるのでしょうか。

これは先程も述べた、まず功徳を積むこと。この功徳にはいろいろな功徳があります。例えば、財施を行なうこと。例えば、法施を行ない、多くの人に真理を知っていただくこと。そして、入信に導き、縁のある人と共に来世高い世界へ生まれ変わるように努力すること。あるいは、心の苦しみを持っている人のそばに行き、その苦しみを軽減するように努めること等が挙げられると思います。

そして、この教えは三宝によって説かれたものであると。ここでいう三宝とは、仏陀、仏陀の化身としてのグル、あるいはその根本神であるシヴァ大神と。この三位に帰依をすること。そし

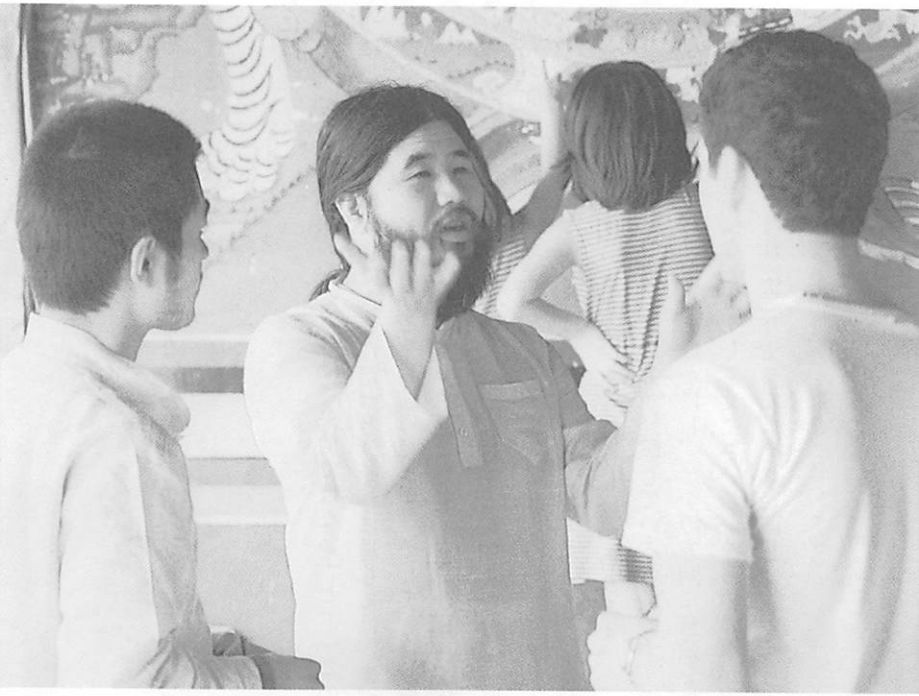
て、その法、グルの説く真理に対して帰依をするということ。そして、真理を実践している集いに対して帰依をするということ。これが三宝に対する帰依です。では帰依とは一体何かというと、この三宝に対して奉仕をしたり、あるいは布施をしたり、あるいは教えを広めたりすること。ここで私が、法施と教えを広めるという二つのカテゴリーをお話しした理由は、法施とはその教義の載っている書籍等を多くの人に読んでいただくということ、教えを広めるとは自分で理解した教えを周りに広めること、という意味です。

そしてこれら三つの、三身に対する帰依ができ上がったならば、次は生き物を慈しむ、生き物を殺さないで慈しむという実践に入ります。この生き物を慈しむ延長上に戦争放棄があります。そして、この生き物を慈しみ、生き物を殺さないという第四の実践をなした後、第五の実践である、人に物を施し盗まないという実践を行ないます。そして第六の実践として、愛のない性的交わりをやめ、いかなる人とも心から和合するという実践に入ります。この三つの身体の正しい行ないができるようになった段階で、次は言葉の統御へと入っていきます。それは嘘、必要のない言葉、仲たがいさせる言葉、悪口といったようなものをやめ、愛をもってすべての人に優しく語るという実践に入ります。そしてここまで達成した者は、次は心を乱すお酒をやめ、あるいはタバコをやめ、絶えず安定した、平安な心地を経験するということになります。

## ◉魂は輪廻する

輪廻転生はどのようにしたら証明できるのかという話に対して、私は次のように説明をします。それは、死ぬ前に来世の条件はでき上がっているんだよって。では来世の条件とは何かというと、例えば、体全体が痛い痛い痛いと言いながら死んでいく人、この死んでいく人に対して、例えば霊能者が、「あの人は来世は天界へ生まれ変わります」と言ってもそれは大嘘であると。

なぜならば、その人には痛みしか存在しない。ということは、来世は地獄であると言えます。例えば、死ぬ間際になり、ものを考えることができず、記憶力がなくなり、ボケてしまうと。このような魂は次の生は動物へと生まれ変わります。では、ものが食べたいのに食べられなくて死んでいくと。あるいは、ものを口の中に入れると、胃酸が強く出て焼けるようになると。このような魂はどこへ転生するのかと。これは当然、餓鬼の世界へ転生することになります。では、妻に愛着し、子供に愛着し、そして自分自身の人生に愛着し、心を残し死んでいく者、これはどこへ転生するのかと。これは人間の世界へ転生するようになります。では、先程述べた四つの条件、つまり肉体的、精神的苦痛がなく、そして意識がはっきりとしていると。そして普通に食べ、飲み、この世に対して執着もないと。しかし、権力に対する執着だけが残っていると。このような魂は、次の生では憤怒天、阿修羅の世界へと転生します。そしてその権力もなく、歓喜の状態で輪廻転生する魂は、次の生、戯忘天界へと転生します。そして、これらの六つの条件を超え、貪



りを離れ、出家し、そして真理の実践だけを行なった者は、色界へ転生し、梵天界以上の永遠に近い、長い生を経験することになります。

### ◉願望を成就するには

「でも、麻原」と。「私達が必要としているのは、来世ではない」と。「この世だ」と。「この世を一体どのようにしたら幸福に経験できるんだ」と。それに対しては、まずひたすら教学をし、そして布施の功徳の実践、持戒を守ることをお勧めします。そして、自分自身の目的、例えば素晴らしい恋人と出会い結婚したい、例えば今生平安に生きたい、あるいはお金持ちになりたいといったようないろいろな願望に対する集中、一点に対する集中をなせば、必ずやその功徳のエネルギーは願望した方向へと流れ、結果を招くこととなるでしょう。徳の流れを制御し、そして一つの方向に向け、結果を出すこと。これは来月号の『マハーヤーナ』にもね、おそらく「南伝大蔵経」の翻訳として載ってると思いますが、そういうお経があります。

そして、これは私自身、あるいは私の弟子達自身が経験している体験です。ですから皆さんも大いに徳をお積みになり、持戒を守られ、心を豊かにし、一つの方向に意識を集中し、結果を出し、この世を満喫し、そして来世幸福な転生をしてください。いくらいい車が用意されていたとしても、その中にガソリンを入れなければ走りません。それと同じで、いくらいい環境にあった

としても、功徳を積まなければそれから発展することはありません。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。しかし、死は来てもいいんだと。なぜならばそれまでに十分に準備していれば、逆に、死というものは大変「楽しみの瞬間」ということになります。そして、その死の内容については、深い深い瞑想を経験することにより、多くの体験をすることとなるでしょう。

# 第二話　苦しみからの脱却――大いなる徳を持て

九〇年十二月二十三日　於・仙台支部

## ◉確実に存在するカルマの法則

今日は、まず初めに、ちょっと難しい話から入りたいと思います。これは、今日、先程わかったことだから、あなた方が初めて、オウム真理教の私の信徒として聞く内容ということになる。

人間の苦しみというものは、この五つのskandha、つまり集まりに集積されている。五つの集まりとは何かというと、この肉体、感覚、イメージ、意志、意識という五つである。

そして、オウム真理教にはいろんな修行法がある。今日、私はヴァジラヤーナの帰依（きえ）という、これは叩きながら、竹刀で叩きながら帰依マントラを唱えるという、まあ、特殊な方法だけども、これを行なった。これを一万発、まあ大体一時間半ぐらいで一万発、自分の両足を力強く叩くわけだけどね、するとどうだろうかと。叩く前、いろんなナーディの詰まりがあって、そこに痛みが生じていたと。ところが叩いた後はそれがかゆみに変わったと。なぜ、痛みがかゆみに変わったんだろうかと。それで、今日、私と一緒に同行している、皆さんもよく知っているヴァジラティッサ師、まあ、彼はドクターだけども、彼とそれについて話し合った。そうすると、痛みというの

はかゆみというのと同じ神経で感じるんだということがわかった。つまりどういうことかというと、同じ神経で、その刺激回数が少なければかゆみとして感じ、多ければ痛みとして感じるんだと。——ま、これは、ちょっと複雑な変換、つまり積分を使って行なうわけだけども——という話であると。ということは、叩いたことによって肉体のカルマが落ち、そして痛みからかゆみに変わったということを表わしているんだということである。ということは、仏教観でいうところのカルマの法則というものは、また一つ証明されたなと。ま、私はそれを知ったとき、私の心に光明が射し、そして絶対的な確信、これは何としてでも皆さんに、真理の法を根付かせ、そして正しい転生をさせなければならないという思いに至ったのである。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。どんなに大金持ちでも、あるいはどんなに異性にもてる男性や女性であったとしても、あるいはいくら愛し合ってる夫婦であったとしても、あるいはどんなに高い地位へ昇ったとしても、人は必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。では、死に対して何が有効かというと、先程述べた真理を絶対的に確信することであると。

これが例えばね、私が叩くことによってかゆみが出るというふうに知っていたならば、あるいはそうなるべきであるという暗示があったならば、今日私が一番初めに話したことは成立しないかもしれない。しかし私はそれを知らないで、その理法を得たわけである。

### ◉来世は決定されている！

例えば、これはちょっとバルドーのイニシエーションとも関係するわけだけども、人間が死ぬ前に、苦しい、苦しい、痛い、痛いと言いながら死んでいくと。そして死んだと。霊能者のとこへ行くと。「あなたのおじいちゃんは天界へ行きましたよ」と。君達はどう思うか。死ぬ寸前に苦しみの集積であった肉体を持って死んだ者が天界へ行くと思うか。当然これは地獄へと落ちる。ではだ、癌の患者で食べ物が食べたくても食べられないと。そして食べたい食べたいと思いながら死んでいく魂があったとしよう。これはどこへ生まれ変わると思うか、君達は。当然、次の転生は餓鬼であると。では、年を取り、あるいは年を取らなくても、老人性の痴呆症あるいは若年性の痴呆症となり、記憶が途絶え、ものが考えられなくなり、情報に流され、刺激によって動く状態で死んだとしよう。これはどこへ生まれ変わるだろうか。君達はわかるか。これは当然、動物へと生まれ変わる。同じように執着を背景とした場合、人間として生まれ変わり、あるいは純粋に論理性、平等性をもって死んだ場合、憤怒天へ生まれ変わると。そして、徳とともに快楽を求めて死んだ場合、これは戯忘の世界へと生まれ変わる。あるいは貪りを離れ、離貪した状態で転生した場合、梵天界へと生まれ変わる。あるいは、生存に対する全く欲求を持たない状態で転生した場合、無色の世界へと生まれ変わると。

つまり、私達が死ぬ寸前に、どのような心の状態で、どのような言葉の状態で、どのような身

体の状態で転生するかということは、次の生を決定する絶対的現象であるということである。つまり条件ではなく、もう既に死ぬ寸前にその人の次の生は決定されているんだということを理解しなければならない。

### ◉注がれる神聖なエネルギー

ここでいくつか、オウム真理教の教えが真理であり、そしてオウム真理教の発するエネルギーが神聖なものである証明をしたいと考えます。それはまず、十月の頃だったか、これはニューヨークの信徒のおばあちゃんが、「痛い。痛い。苦しい。苦しい」と言って、この人は癌に侵され、そして苦しんでいたと。そして、モルヒネ、つまり麻薬を打ったとしても、一時的には止まるが、どうしようもない状態であったと。そのおばあちゃんを動かすこともできないと。そして、信徒さんは「何とかしてください」という相談があったそうだ。私は無償の布施を勧めた。ところがである。そのニューヨークの信徒さんが無償の布施をオウム真理教に送り、オウム真理教に着いて私がそれを知ったその日に、そのおばあちゃんは苦しみから解放され、安らかに息を引き取ったそうである。これは何かというと、その肉体の苦しみ、肉体の苦しみの地獄から解放されたわけである。

あるいは、八月の頭、これは肝臓癌で苦しんでいた人がいたが、極限の布施、そして入院、特

殊な治療等を行なうことによって、肝臓癌を完全に死滅し、その肝臓癌の細胞が完全に死滅して、その肝臓癌のカルマが切れた瞬間に、その人は阿修羅の世界へと旅立ったと。つまり、人間より一つ上の憤怒の世界へと旅立ったと。もちろん、その人の死ぬ前の状態はどうだったかというと、例えば無意識状態になっても、わずか数カ月でだよ、マントラが出てきたり、あるいは詞章が出てきたりするような状態だった。そしてそのような状態までこの五蘊の意識が変わって、本来は餓鬼の世界へ生まれ変わらなきゃならないはずのカルマが、なんと憤怒天の世界へ生まれ変わったわけである。

このような例はたくさんあります。例えば、前回の十一月の三日のバルドーのイニシエーションを受けた信徒さんが、不慮の事故で亡くなりました。そのとき、わき腹を切り、動脈から出血し、即死したそうだ。その彼女は苦しみ、縁の深かったサクラーのもとへ行き、そして私のもとへ来たと。私は彼女がバルドーのイニシエーション、それから小乗のツァンダリー、それからオウムで言われているほとんどのイニシエーションを受けてる人で、真面目に修行してる人だったから特殊な瞑想を与えた。その瞬間、その事故を起こした相手に対する恨みが消え、安らぎ、そしてポアされたと。彼女は人間としても修行者の子供として生まれ変わるカルマを持ち、転生しました。

これは、私が皆さんに感覚で話してるわけではないということだ。つまり、私は見、感じ、聞

き、話してるんだということである。

今私は、祝福あるいは永代帰依祈願といったような形でエネルギーを移入している。あるいは飴のイニシエーション、ミラクル・ポンド等のエネルギー移入を行なっている。当然、これらのエネルギーの移入と同等に、それを使っている人達のカルマが私の中にどんどん蓄積されてくる。そしてそのカルマは——私は叩くことによって、あるいは七〇度、八〇度の熱を加えて焼くことによって——今消滅してます。そして、その私があなた方のカルマをしょい、消滅することが、あなた方の輪廻転生に対して、あるいはこれからの人生に対して、必ずやプラスになるということを確信して、それを行なっています。

### ◉在家信徒がなすべきこと

では、信徒であるあなた方は、何を行なえばいいのかということである。これはまず、ベースとなる八つの実践を行なうべきである。では、その八つの実践とは何かというと、まずグル、シヴァ大神に対する絶対的な心をもって帰依をすることである。帰依というのは何かというと、その教えを学び、考え、実践する。そして、供養すると。これは布施、奉仕のことである。同じように経典に対して絶対の信を持ち、そして帰依をするべきである。これは何かというと、その経典を読み、考え、実践する、そして、その経典が広まるように法施の実践を行なうということで

ある。次に私の弟子に対して帰依をするべきである。これはどういうことかというと、できるだけ道場へ通い、自己の疑問を解決し、そして奉仕活動を行なうと。これが、ベースの三つの実践であり、三つの功徳であると。

では、第二段階の功徳は何であろうかと。これは残り五つということになる。それは、殺生を離れ、生き物すべてに対して慈しみを持つこと。優しい心を持って生き物と接すること。盗みを離れ、優しい心を持って同胞と接するということである。そして、邪淫を離れ、異性を自己のものと見ず、心から和合して生きるということである。そして、第七番目は嘘を離れ、真理にかなって言葉を話すということである。そして第八番目は酒、タバコ、梅酒等の（薬物によって）自己の心を薬物によって乱さない、そして絶えず安定した優しい心を持って周りと和合するということである。

つまり、前者三つはあなた方のエネルギーを蓄えるということ、後者の五つはあなた方のエネルギーを漏らさないようにし、そして心を成熟させるという修行となっていく。これら八つの実践をなすこと、これはすなわち四預流支とつながってくる。つまり、グル、真理、そしてグルの弟子に対する絶対的な帰依を養い、その法を学び、考え、実践するという四預流支である。そして、この四預流支の在家の実践が、先程言った八つの功徳である。

殺生しないことをあなた方は悪業をなさないことと考えるかもしれない。それは正しくない。

これは積極的に見るならば、殺生しないではなく、殺生をせず慈しむと。よって、悪業をなさないではなく、心に功徳を積むということなのだ。そして私達はこの肉体を持っていけるわけではないから、来世は心しか持っていけないから、その心をいかに成熟させるか、また心を成熟させることのできる、実践ができる功徳を蓄えるかということがポイントとなってくる。そして功徳を蓄えるその修行は、先程言った、グル、真理、そしてグルの弟子に対する徹底的な帰依であると。それを漏らさず発展させるのが、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れ、妄語を離れ、そして酒、タバコ等の心を乱すものを離れるということである。

「そんなこと言っても麻原、俺はつらいよ」と。「それじゃ生きていけないよ」と言うかもしれない。まずはあなた方ができる、グルに対する帰依、次に真理に対する帰依、そしてサンガ、つまりグルの弟子に対する帰依の実践から一つ一つ下から固めていくならば、いずれはこの八つの実践ができるはずである。そして、この実践に到達するならば、あなた方の五蘊、つまり肉体、感覚、イメージ、意志、意識に蓄積されている悪業が増大せず、徐々に徐々に減少し、今日初めに話したように、痛みがかゆみへと変わり、そして最終的には苦しみから解放され、人間、憤怒天、そして戯忘天へと転生できるはずである。

## ◉今から死への備えを

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。死を見なくても死ぬ。死を見ても死ぬ。だとするならば、今から死に対して何をなせばいいのか、死に対して何を準備すればいいのか、死に対して何を実践すればいいのか、しっかり考えて実践してほしいと思います。

そして、この輪廻転生を絶対的にするためにはどうしたらいいか。それは功徳、教学、そしてカルマ落とし、そしてイニシエーションを受け、しっかりと高い瞑想をすることであると。この四つを肝に命じ、この一生で自分自身の魂のベクトルを三悪趣から解脱へと、最終的にはマハー・ニルヴァーナへと向かうように心をチェンジしていただきたいと思います。

私も、あなた方のカルマをしょえるだけしょいたいと考えている。そして理想としては、肉体はボロボロでも心はそれに対して平然としていられる、真の大乗の仏陀でありたいと。そして、すべての魂の苦しみが自己の内側に内在し、すべての魂が苦しみから解放され、マハー・ニルヴァーナに到達するまで、このサムサーラ、六つの欲の世界、苦しみの世界へと転生を続けていきたいと考えています。

# 第三話　光に満ちた未来へのいざない

九〇年十二月二十四日　於・新東京本部

## ◉グルとシヴァ大神の守護

この東京支部に、大変有名なMさんという一家の信徒さんがいる。この人の実名を出すとあまりにも有名過ぎるのでご迷惑がかかっちゃまずいから、今日はMさんということで話を進めたいと思います。

実は、このMさんに二人のお子さんがいらっしゃって、その中の下のお子さん、このお子さんも、まあ、ちょっと反逆的な性格ではあるが、熱心な信徒である。ここでいう熱心とは何かというと、教学や瞑想を一生懸命やるというわけではなく、ただオウムのいろんな出来事に対して、協力できる部分は一生懸命協力するというようなタイプの信徒である。そして、イニシエーション、その他の修行のコースもある程度受けていると。で、この子供さんの車が事故に遭って、そして子供さんは全くかすり傷一つ負わず、そして助手席に乗っていた人がムチ打ちを起こし、相当に苦しんでると。で、この子供さんは自分が何ともないのに、助手席に乗ってる者が苦しむのはおかしいと考えていたと。それはそうである。なぜならば、ある程度のイニシエーションを

受け、そしてある程度のバクティーを行なっている彼は、当然シヴァ大神、あるいはグルのエネルギーによって守られているからである。

近頃、とみにサマナの事故が多くなり、そしてケガをするケースが出てきている。これは何かというと、サマナの信が薄れ、教学をせず、そしてよこしまな考えに浸り、例えば経費の使い込みといったような最も悪業の極まりないカルマを積む結果、そういう現象が起き出してるということである。

### ◉ある事故が意味するものは

そして、昨日、私は仙台支部でシークレット・ヨーガを三十数名受けたわけだが、その中の二人の乗っている車が、岩手方面にて事故を起こし、その中の三名が亡くなった。私は、そのときちょうど仙台支部から東京へ向かう車中であった。そして、私の心臓と呼吸が止まり、性欲の空間に何度も何度も放り出されると。つまり性欲のバルドーに何度も何度も放り出され、一生懸命この現象界に、肉体の意識を戻そうと努力していたときである。つまりこの三名の信徒さんの即死、そして一名の大ケガという事態のときに、私はバルドーへと飛んだということになる。この事実はいずれ書物に著わすことにするが、この四名の最も近い人の一人はイニシエーションの説明を受けて残ったと。よって、この事故に遭わなかったと。そして、先程言った三名の即死以外の

もう一人の——これは重傷だがね——人はその日仙台支部に干し柿を持ってきた人であると。で、それを私が、これは仙台支部のサマナでは受けられないカルマであるから、私が持ち帰るよと言って、ちょうど私がその供養を受ける、まあもちろん口に入れたというわけではなくて、私が東京本部の方に運んでいた矢先であったと。

この四名には多くのいわれがある。まず、ここで登場する一人の女性は、昨年出家を考えてた女性である。しかし、その出家の動機が大変けがれていたと。つまり、それはどういうことかというと、ま、大変ハンサムなサマナがいて、そのサマナと恋に落ちたと。それを動機として出家したいと考え、それを私は出家を蹴ったという経緯(いきさつ)がある。そして、もう一人の人は、夫の修行に対して大変反発し、しかしまあ一応夫の手前信徒であられた方である。それからもう一人、先程言った重傷の者は、実は花畑をね、経営していて、農薬をまき、多くの昆虫を殺生すると。昨日はそのザンゲを受けたわけだけれども、で、「どうしたらよろしいでしょうか」と。「これには二つありますよ」と。「一つはその殺生のカルマはカルマとして返ってくるから、大いなる布施功徳を積みなさい」と。「それによって、悪業の果報、つまり苦しみと、善業の果報、つまり喜びとが同時に現われるはずである」と。「それからもう一つは殺生をやめなさい」と。こういうアドバイスをした矢先であった。で、そのおじいさんは私に対して、「カルマというのは早く返ってくるんですか、遅く返ってくるんですか」という質問をした。私は、あなたがサットヴァであ

れば、つまり心が清らかであれば、こういうザンゲをしたならば、即現象化するでしょうと。嘘の多い人生であるならば現象化は遅れるでしょうと話をした矢先である。つまりここで考えなければならないことは、これら四人の人達があまり徳も積まず、教学もせず、瞑想もせず、悪業を多く積んで、名ばかりの信徒として活動する場合、今まだ信があり、ある程度の教学、ある程度の瞑想をしてるときに、死というものが訪れたということは、魂の大きな流れから考えると決してマイナスではないということである。

### ◉解脱のチャンスをつかめ

私の心臓停止、呼吸停止については、八月の癌患者のときもそうであるし、あるいは十一月のポアのときもそうであるし、あるいは今回のときもそうであるが、信徒であり、私のイニシエーション、あるいは秘儀マントラ等、私とパイプのできた者が亡くなるとき、必ず私はそのバルドーへ現われ、そしてその者達の弁護人として、あるいはその者達を高い世界へポアする役割として、その世界へ至るということを実証的に説明した大変有意義な例だと思う。

そして、このような神通力というものは、仏陀釈迦牟尼の教団において成就者といわれる者達、特に八十人の成就者といわれている者達がすべて有していた神通力であり、例えばインド密教のティローパ、あるいはナローパといったカギュ派の成就者達。あるいはグル・リンポチェといっ

たタントラ密教の成就者達が有してた神通力である。また、チベットにおいては、例えばミラレパ、あるいはビルパ、あるいは今ではおそらく、カール・リンポチェやダライ・ラマといった数少ない成就者の有している特殊な菩薩の神通力であると、私は考えています。

しかし、大変残念なのは、例えば、その女性に対して私がアドバイスした「あなたは無智のカルマが強いから、このままいくと動物の世界へ転生するから、もっとしっかり教学をし、功徳を積みなさいよ」というアドバイスをし、そして秘儀マントラを耳から入れてあげた矢先のこの結果である。もちろん、シークレット・ヨーガを受けたことによって、その人の意識がポアされ、そして動物から餓鬼界、あるいは人間界へと転生したことは疑いない。まあ、この三人の転生を正確に説明するならば、一人は動物、一人は餓鬼、一人は人間よりも少し高い世界へと転生したと。転生すると。したじゃなくてするだね。今、形状は決定してるけどもバルドーの状態にあるから、今の場合はね——ということは、疑いない。

私が、ここでなぜ残念だと言ったかというと、それはここに集まっている者達もそうだが、本来このサムサーラを出離し、そして解脱するチャンスに恵まれている。もし、出離し、解脱するチャンスに恵まれてる魂が解脱をするならば、いかなる状況にあろうとも、例えば瞬間的な死であろうとも、時間のかかる死であろうとも、その死に際し意識を連続した状態で、次の生、高い世界へ転生できるという大いなるメリットがあるということである。そして、それを覚醒という

言葉に置き換えて、今のタントラの経典や、あるいはマハーヤーナの経典は説いている。

皆さんもよく知っている大乗仏教の菩薩ナーガールジュナ、これは日本では龍樹といわれてるけども、例えば彼の場合、グルからリンゴにエネルギーを込められて、エンパワーメントを受け、その瞬間に覚醒したという逸話が伝わっている。あるいは、ナーランダ大学の教授から密教の弟子になったナローパ、このナローパを覚醒させたティローパの技法というものは、自分の靴でナローパの頭を叩き、その瞬間に覚醒が生じたと言われている。これはオウム真理教でも、例えばヴァジラヤーナの帰依、あるいは今行なっている飴のイニシエーション、あるいはミラクル・ポンド等、いろいろなエンパワーメントによって、あなた方の意識を覚醒させようと努力し、そして多くの者達が覚醒し、輪廻に対するかなりの確信を身につけているという事実がある。

### ◉偉大なるボア

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。この死を避けることは、たとえ天皇であろうとも、総理大臣であろうとも、あるいは三菱や三井の大富豪であろうとも、あるいは異性にもてもてのタレントであろうとも、だれも避けることができない。あるいは真面目に生きようとも、不真面目に生きようとも、その死を避けることはできない。そして、その死に対して多くの準備を行ない、死を知り、経験し、確実な転生をすることこそ、私達がこの短い七十年、八十年

といった人生を与えられた最高の生き方であると私は考えます。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。では、在家では何を実践したらいいのかと。あるいは出家においては何を実践したらいいのかということになる。

まず、在家において実践しなければならないこと、これは八つの功徳である。では、八つの功徳とは何か。これはまず、グルに対して絶対なる信を持ち、帰依をすること。帰依というのは、グルの教えを聴き、それを実践し、そして布施等の供養を行なうということである。第二の功徳は何かと。これは真理を知り、真理を学び、真理を供養するということである。ここでいう供養とは、真理を広めるということである。では、第三の功徳とは何か。これは、サマナを敬愛し、そしてサマナに奉仕をするということである。これはバクティーの手伝い、その他の奉仕活動に従事をするということである。そして、教団に布施をするということである。では、第四の功徳とは何か。これは、生き物を殺さないだけではなく、哀れみの心を持ち、あるいは慈しみの心を持ち、接するということである。これはどういうことかというと、例えば人間が人間を見る場合、外道、凡夫といった、例えばまだ真理に巡り合うことのできない徳のない人達がいる。この人達に対して慈愛の心を持ち、早く真理と巡り合い、そして絶対的な自分自身を確定してほしいと願う心。あるいは、今まで殺していた小動物に対しては、その小動物の今の姿、行動に対して、その無智を哀れみ、そして早く人間へと生まれ変わり、真理と巡り合ってほしいと考えること、こ

れが四番目の功徳である。五番目の功徳は何かといったら、これは偸盗をしない、盗まないということである。そして、盗まないだけではなく、すべての魂があらゆる意味において、豊かで繁栄がもたらされることを祈るということである。では、六番目は何かといったら、これは邪淫をしないということである。この邪淫をしないというのは深い意味があり、これはオウムには「五戒の歌」というのがあるわけだが、ここでも述べられてるとおり、愛欲にふけり、独占欲が生じると、それによって人と人との和合というのが乱れる。よって心にけがれの残るような交わりをしないと。そして、すべての人と親和するということである。では、七番目の功徳は何かと。これは嘘をつかないということである。そして、嘘をつかず真実を語り、堂々と生きるということである。最後の八番目の功徳は何かと。これは、酒を飲まない、タバコを飲まない、梅酒を飲まないといった、要するに自己の心を乱すものを飲まない、吸わないということである。それにより統一した意識の状態を保ち続け、そして教学をし、データを入れ替え、高い世界へと意識を移し変えていく、これが偉大なるポアである。そして、ポアの終極には絶対的な境地が存在している。

### ◉八つの功徳を確定するために

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。その死の前には何をなせばいいのか。昨日亡くなった三人、そして大ケガをした一人は、今日この東京本部と同じように輪廻転生につい

て多くのことを学んで、その次の瞬間に死を迎える、あるいは重傷によって、意識の混沌とした状態を迎えている結果となっている。私は、徳がないわりには、徳があったんだなと考えています。そして彼ら四人に最も近しいサマナが一人います。このサマナは大変徳のある人ですから、きっとバルドーの教えを説き、その四名を今形成されている仮の姿から、少しでも高い世界へといざなう道案内をすることとなるでしょう。

では、この八つの功徳を確定するためには、何を実践したらいいのかと。そのためには四預流支の実践を行なうべきであると。この四預流支とは皆さんもよく知っているとおりね、まずグルに対して、あるいはシヴァ大神に対して、あるいは仏陀に対して絶対の浄信を持つということ。ここでいう仏陀やシヴァ大神というのは、その化身であるグルを指します。そして、真理に対して絶対的信を持ち、それを学ぶということ。そして、そのグルの弟子である真理を実践している人達に尊敬の念を持ち、その奉仕のお手伝いをし、一緒にすべての魂が絶対的境地であるマハー・ニルヴァーナへと到達する実践のお手伝いをするということ。これが第一である。

そして、第二は、説法テープを多く聴き、『マハーヤーナ』を何度も何度も読み、自己の心のデータを入れ替えるということ。例えば、例として挙げるならば、空腹感が生じたと。その空腹感に対して真理の教えでは、その空腹というものは、例えばまあ、餓鬼のカルマである。あるいは、実際に必要で空腹になっている状態である。あるいは、胃が拡張して空腹になってる状態で

ある、等々いろいろな見方があるだろう。しかし、一般には、空腹イコール何かおいしい食べ物はないかなという心の働きへと変わってしまうと。この二つの心の働きは大きな違いを招く。つまり、前者はより分析的に心を統御するようになり、そしていずれ餓鬼の世界と縁を切り、餓鬼のカルマを切ると。ところが後者は、どんどんどんどん煩悩を増大させ、餓鬼のカルマを増大させるという結果になる。よって、この現代のいろいろな情報に洗脳されてる私達は、多くの教学をすることにより、その洗脳の力を弱めるということである。

第三番目は、学んだ教えを深く考えると。そして自分に当てはめる、現象に当てはめる、あるいは周りのいろいろな環境に当てはめるということである。これが第三番目の預流支である。そして、第四番目は考えるだけではなく、それを実践するということである。そしてその終極が、六つの極限であり、聖なる八支の実践方法であると。

### ◉四つの柱の実践を

実は私は昨日ね、一つの、まあ、悟りを開いたというか、経験をしたと。それは何かというと、近頃皆さんも知ってるとおり、永代帰依祈願、シークレット・ヨーガ、その他のいろんなイニシエーションによって、皆さんのカルマを受けています。よって、例えばナーディが詰まると。そこで痛みが生じると。で、一昨日ぐらいから、またこの足をね、竹刀で一日一万発叩くというヴァ

ジラヤーナの帰依という修行があるわけだが、これを始めたわけです。するとどうかというと、叩いていると、ね、叩いてるときは確かに痛いと。しかし、終わった後、その詰まってるナーディが痛みからかゆみに変わるんだね。で、このかゆみは、ま、今回北海道、仙台、東京と一緒に動いているヴァジラティッサ師——これは皆さんもよく知っているドクターだけども——と話をしていてわかったことだが、結局同じ神経の働きで、痛みからかゆみになるんだということ。それはちょうどその痛みというのは、その部分を刺激する回数が大変多いと。例えば一秒間に何万回とか何十万回とかいう回数だと思うがね。ところがかゆみはその回数が少なくなって、かゆみになるんだということ。ということは何かというと、仏教でいう、例えばカルマ落としを受ければ、カルマが落ちるというのは正しいということになる。なぜならば、叩くことによって痛みが生じる。痛みが生じることによって私の受けたカルマが落ちて、痛みからかゆみに変わったということの証明であると。ま、これも、いずれね、皆さんに医学的根拠——この痛みからかゆみに至る数学的計算というのは積分を使うそうだから、きっちりとした形でね、皆さんに証明することになると思うが、私はそれによって、またこれで信徒の皆さんに一つプレゼントができたなと。このプレゼントを皆さんが生かしてくれるならば、より正しいものの見方によって、真理の実践を励んでくれるんじゃないかなという確信を持ちました。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。そしてその死の前にはお金は無効だし、

恋愛も無効だし、それから社会的地位も無効だし、権力も無効だし、一切のものが無効であると。そしてそれを超えるためには布施、奉仕といった功徳、それから教学、そして瞑想、そしてイニシエーションといった四つの柱を実践することにより、いかなる人も必ず超えられるんだということを皆さんの前で説き、今日の講話を終わりたいと思います。

こんなにも変わった心と身体

# 八つの功徳体験談集

## ❖ ヴァジラヴァッリヤ ❖

『マハーヤーナ・スートラ』と出会い、その教えに感銘を受け、オウム真理教に入信した私は、『マハーヤーナ・スートラ』の最初に書かれている「四向四果」を実践しようと思いました。そして、その基本である「仏・法・僧」に対する帰依をするように心がけました。

その頃、私は、群馬県にある会社に勤めており、寮生活をしていましたので、東京本部道場へ毎日通うことができませんでした。ですから、最初通信プログラムの修行を行なおうと思ったのです。しかし、

「土、日曜日だけでもよいから、なるべく道場に通った方が修行が進みますよ。」

というサマナの方の勧めにより、普通のヨーガタントラ・コースを選びました。寮から東京本部道場へ行くまでには、バスを乗り継ぎ、電車に数本乗らなくてはならず、通うと片道四、五時間かかってしまい、しかも毎週となると交通費だけでも大変かかってしまうので、気は進みません

でしたが、サマナの方のアドバイスは絶対に私にとってメリットがあることだろうと信じ、実践しました。今思うと、このときの「僧」に対する帰依のお蔭で、今の私があると思います。

私は、尊師のご著書だけでなく、もっと多くの説法を聴きたいと思い、信徒用の尊師説法テープをすべて購入しました。その説法は、今まで味わうことができなかったほどの多大な喜びを私に与えてくれました。尊師のご著書と、説法テープが私にとって最高の宝物となり、会社を休んで一日中、夢中になって説法テープを聴くこともありました。尊師の教えの素晴らしさを実感した私は、尊師と尊師の説かれる法に深く帰依したいと思い、より深遠な法を聴き、私のできる限りの功徳を積みたいと願いました。

しかし、会社が道場から離れていて、バクティーが思うようにできなかった私は、今の自分に一体どのような功徳が積めるか考えました。そして、考えた末、特に財施を中心に行なうことにしました。この財施を行なって気付いたことは、特に現世的な願望がかない始めたことでした。バスの待ち時間が短くなったり、必要な物がすぐ見つかったり……。しかし私は、つまらないことで徳を消耗したくはなかったので、欲望を持たないように努力しました。そして、財施だけでなく、あるきっかけで家族に真理施ができたとき、その日の深夜セミナーでダルドリー・シッディ（空中浮揚の前段階の神通力）を体験することができたのです。このとき、私は、真理施の功徳の偉大さを実感しました。その後、このような布施の実践を続けていくことにより、光に包ま

れたり、ダルドリー・シッディの飛距離が伸びたりすることが多くなりました。まさに、功徳は修行を進めるエネルギーだということを実感したものです。

「仏・法・僧」に対する帰依、そして功徳を積むことの素晴らしさを実感した私は、五つの戒の実践を始めました。まず、殺生をしないように心がけました。それまでは、虫を殺すことにあまり抵抗感を持っていませんでしたが、尊師のご著書を読むにつれて、今までなしてきた罪の深さを感じるようになったからです。ハエを殺したり、蚊を叩きつぶしたり、殺虫剤を使って大量の虫を殺すといった行為をしなくなると、それに伴って常にイライラしていた心が平静になり、不安感がどんどんなくなっていくことを実感できました。特に暗闇に対する恐怖というものがなくなっていくのを感じることができました。そして、人に対する嫌悪感が薄らいで、人間関係が和やかになっていきました。私は気が短く、イライラするとすぐに兄に八つ当たりをしていたのですが、そのようなことは全くなくなり、相手の長所が見えるようになってきたのです。私の母親も暗闇に対するかなり強い恐怖心を持っていましたが、今、考えるとハエを目にするとすぐにハエ叩きで殺生をしていたので、それが原因ではないかと思います。今は、不殺生の戒の実践をしていると思いますので、早く心の安定を得てほしいと思います。

不殺生の実践を始めて間もなく、物に対する執着がなくなっていくのを感じました。私は、特に物に対する執着が強く、物をたくさん自分の回りに集めて捨てることをせず、物があふれ

て自分で困ったことが多々ありました。しかし、財施の実践を始めると、貪(むさぼ)りの心は消えて、非常に心が軽くなり、布施をすることの喜びを味わうことができました。そして、さらに性エネルギーを漏らさないように心がけると、自分に自信がつき、活動的になりました。自信といっても心の不安感を隠すための強がりではなく、心の安定を伴った自信というものがわいてきました。すると、自然と嘘をつかなくて済むようになり、嘘をつくことによって生じていた心の不安感がより一層取り払われていくのを感じました。嘘をつかなくなったことにより、特に記憶力が飛躍的に伸び、論理的な思考ができるようになってきました。そして、判断ミスがかなり減少しました。特に、以前から克服したかった「曖昧(あいまい)さ」が少なくなり、自分の欠点が改善されていく喜びを感じることができました。

さらに、酒をやめたときのメリットも多大なものがありました。会社勤めをしていたので、付き合いで飲まなくてはならないときもありましたが、そのときは後でガージャ・カラニーで酒を体から出していました。すると、以前から弱かった胃腸は大変丈夫になり、頭痛や体のだるさ、倦怠感(けんたいかん)から解放されました。特に集中力が飛躍的に伸びて、仕事の上で自分の集中力がどんどん伸びていくのを実感できました。意志の力も強くなり、仕事を完成させるスピードがかなり早くなりました。

また、こういう効果もありました。以前から人前で話をすることが苦手だった私は、何かを発

表するときはあがってしまい、心臓の鼓動が激しくなり、思うように発表できませんでしたが、ある日、会社でふいに発表しなければならなくなったときに、自分の心が全く動揺せず、心臓の鼓動も平常で、乱れがなかったのです。これには、我ながら驚いてしまいました。

このように五つの戒を守ることによるメリットは、多大なものがあったのです。

この八つの功徳を実践したことによる最も大きなメリットは、心の安定を得たことと、カルマの法則を実感できたことです。以前の私を振り返ると、殺生を子供の頃から多く行なっていたために、自分で自分の心を不安定にさせて悩んでいました。盗みをすることにより、貪りの心は一層増大し、心が不安定になり、より一層物を欲求するようになっていました。その欲求は際限がなく、満足することがありませんでした。性エネルギーをロスすることにより、自分に自信がなくなり、意志が弱り、何もする気がなくなり、怠惰になっていきました。意志が弱ると、消極的な嘘が多くなり、さらに自分をかばうための嘘が多くなっていきました。

嘘をつくようになると、嘘が発覚することを恐怖し、心が退縮し、積極的に行動できなくなりました。そして、他人も自分に嘘をついているのではないかと常に相手を疑いをもって見るようになり、心が猜疑心に支配され、より一層不安定になっていきました。そして、相手に対する嫌悪の心が生じて、遠ざけてしまい、酒を飲んだときにその心が表面化し、悪口を放ち、仲たがいをさせるような言葉を発してしまい、口のカルマを積んでいました。そして後で悔やみ、より一

層心は不安定になり、その心を隠すために軽薄語を放ち、瞬間的な喜びを肯定し、曖昧で、意味のない毎日を過ごすようになっていました。まさに悪循環の毎日だったのです。それがオウムと巡り合い、尊師の説かれた教えを実践することにより、その苦しみは瞬く間に氷解してしまいました。まさに、尊師の説かれた教え、二千五百年前にサキャ神賢（しんけん）の説かれた教えというものが真理であり、それがいつの時代にも通用するものなんだということを実感しました。

私が、初めて『マハーヤーナ・スートラ』と出会って、何よりも興味を持ったのは、尊師ご自身がそこに書かれていることの体験者だということでした。経験できないものは、どんなに素晴らしいことが書かれていたとしても意味がないと常に思っていた私は、自然科学に傾注し、宗教というものに偏見を持っていましたが、尊師に出会えたことにより宇宙の実相を学び、それを経験することができ、オウムは真の宗教であると確信することができました。今私は、自分が長年求めていたものにやっと巡り合えたと感じています。

出家した今、苦しいことがあっても耐えられるのは在家のときに実践した「八つの功徳」のお蔭だと思います。ですから、とにかく実践し、経験してほしいと思います。そして、より多くの人達にこの喜びを味わってほしいと思います。

（九一年四月現在　二十七歳）

## ❖ 金井正範 ❖

いとこの〝あの子〟が脳腫瘍で亡くなったのが六年前。痩せ細り、物が食べられず、鎮痛剤で痛みを止めただけで苦しみながら亡くなるのを、私達はなす術もなく見ているだけであった。そのときまで私は、死を直視することなど露ほどもなかったが、このことは私にとってショッキングな出来事であった。それ以来、死を直視せざるを得なくなった。そして、私の中にいつしか、「人は必ず死ぬ。私達は死に対して無力である。死を超越する方法はないのだろうか」という思いが芽生えてきた。

私は、それ以来、この思いを解決する方法を探し求めた。そして、ついにたどり着いたのがオウムである。それ以来、教義を学び、実践し、様々な体験をし、これぞ真理であると確信し、いつしか家族にも実践してほしいという願いがわき上がってきた。〝あの子〟の二の舞をさせないためにも……。

父の癌が発覚したのは、九〇年四月のことだった。肝臓の三分の二以上が癌に侵されており、「長くてあと一カ月の命……」と西洋医学のお医者さんに宣告され、漢方の名医からも「他にいい医者はいませんか……」と遠回しに断られる始末。絶望のどん底に突き落とされた母と妹に光明を照らし出したのがオウムだった。それまで、あまり熱心な信徒ではなかった親子に初めて降りかかった大事件であったが、これを機に、母も妹も急速に真理の実践へと突き進むことになったのである。

医師に、父のことで心の準備をするように迫られた母は、ある日、おろおろしながら妹に告白した。そこで、妹は父の命を救うのはオウムしかないということで、師に相談をしたところ、ミラクル・ポンドと浄化法を勧められた。ただし、父はオウムには反対なので、それ以来、漢方薬（例の漢方の名医に調合していただいたもので、本人は未練があったようである）とミラクル・ポンドを内緒で一緒に飲ませることにした。すると、父が「この漢方薬はよく効く」と言い始めたのだ。果たして、漢方薬が効いたのかどうかは疑問であるが……。

数日間そんなことをやっているうちに、ある日、父が眠れないとぼやき出した。そこで妹は、「お父さん、この水を飲むと眠れるかもしれないよ。」と父にミラクル・ポンドを差し出した。すると、本当によく眠ったのである。

次の日、妹が父に、

「お父さん、眠れたでしょ。あれは、オウムの水だよ。尊師のエネルギーが入っているんだよ。」
と言うと、
「変な水を飲ませるな。」
と怒ってしまった。そこで仕方なく、妹が普通の水で漢方薬を飲ませたところ、今度はちっとも効かないのである。そのせいだろう、妹が夕方、水道水を汲んでいると、父が、
「その水でいいのか。」
と心配そうにのぞき込んだ。それ以来、父はミラクル・ポンドを欲しがるようになり、イニシエーションの効果を認めるようになった。
ただ、末期癌だけに、これだけでは不十分である。妹は、ある日、シークレット・ヨーガにて尊師に示唆をいただくことに決めた。
「……癌を告知しなさい。あなたが告知しなさい。あなたができないならお母さんが……。」
尊師にそう言われてためらった妹が、
「医者が言ってくれないかな……。」
と思うと、心を見透かされたように、尊師は、
「医者は告知しませんよ。」
と——。

このシークレット・ヨーガによって、結局妹は父に癌を告知することを決意し、ある日、父にこう告げた。

「お父さんは癌だよ。お医者さんに見離されてしまったんだよ。オウムなら治るよ。お父さん、私の最後のわがままだと思って！」

襖越しに聞いていた母も一緒になり、二人して泣きながら、繰り返し繰り返し頼んだ。そこへ、事の次第を聞きつけた叔父までが加わると、熱意が伝わったのか、やっとのことで父が折れたのである。

「俺は拝むのは嫌だけど、病院へは行くぞ。」

と。

叔父、母、妹に連れられ、父は、初めてオウムの門を叩いた。オウム真理教附属医院である。初めて会った佐々木先生は、妹が既に癌の告知をしてから来院したことを知り、曖昧な表現は避けて、ずばずばと事実を述べていった。父はかなり気分を害したようだが、サマナによる浄化法の説明と実演にはかなり興味をそそられたようで、しきりに質問していた。

家に帰った次の日の朝早く、父は母をせき立てるように起こして、レモンを買いに行かせた。そう、サンカプラクサラーナ・クリヤ（浄化法の一つ）の実践が始まったのだ。すると驚いたことに、父の身に大きな変化が訪れたのである。まず、サンカ実践一日目にして、長年悩まされて

いた頭痛が取れた。それに気を良くした父は、次の日もその次の日も続けると、検査のために飲んだバリウムが便として出たり、黒色便が出たりして、体の浄化が目に見えて起きてきた。

最初はあくまでも病気治しのためにオウムの門を叩いたにすぎなかった父が、ミラクル・ポンドの効果、そして浄化法の著しい効果を知るに至り、オウムの教義や修行法など、宗教的要素にも目を向け始めたのは当然のことだった。あれだけ宗教的活動を嫌っていたのに、ついに「大予言セミナーPART1」にも出たのである。

そして、「大予言セミナーPART2」のときには、シークレット・ヨーガも受けた。尊師と初のご対面である。

オウムのことをひどく嫌っていた父が、病気治しのためとはいえ、いやいやながらもやっとのこと、オウムの門を叩いた。そして、実践するにつれ、身をもってオウムの素晴らしさに気付き始めたのである。そんなことで、尊師に対して引け目を感じていた父は、妹の後から申し訳なさそうに尊師のいらっしゃる部屋に入った。

尊師は、妹の後から肩をすくめて入ってきた父に、にっこりしながら、

「金井さん、良くなってきてますね。」

と、開口一番、おっしゃった。そして、実にきめ細やかな指導をしてくださったのだ。それまで、「教祖様が、自分のことなど知ろうはずがない」と思っていた父は、その事細かいアドバイスに

びっくりするとともに、オウムを否定していた自分のことを親身に考えてくださっている尊師に、喜びと感謝の気持ちでいっぱいになった。

「ありがとうございます。お蔭さまで。」

父は尊師にそう述べた。

その日、帰りの車の中で、父はしみじみと話した。

「お父さんはな、教祖様と直接お話ができてうれしかった。頑張らなくっちゃ。」

と。尊師のお人柄に触れた父は、真理の実践を決意し、尊師に対する絶対的な信を深めた。話によると、そのときにいただいたマントラを車の中でもどこでも唱えるといった徹底ぶりだったそうである。

その後、父は病気を治すため、本格的な治療を始めた。すると、オウムのサマナが父に対して親身になって面倒を見てくれるので、徐々にサマナに対する信も深まり、そのアドバイスをよく聞くようになった。ただし、食に対して執着していた父は、味付けのないオウム食には閉口したようだ。今まで濃い味付けの食事を好んで食べていただけに、

「こんなの食えるか！」

と文句を言って、醤油をあふれるほどかけて、ごまかしながら食べていたのである。

癌は貪りのカルマの現われだと言われている。味に執着していた父に与えられた課題は、塩分

を制限するということだった。父は、この課題にがっくりし、しょぼくれ、しばらくじいーっと考え込んでいたが、ついに意を決した。

「あきらめた。薬だと思って食べよう。」

こう思い、父にとってはあまりおいしくない食事を我慢して取るようになってから、これほど肉体は汚れているのかと思わせるほどの汚い物が、目や鼻や耳からドボドボと出てくるようになった。今までどす黒かった顔色が、ピンク色の赤ちゃんのような血色のいい肌になり、いつも眉間にしわを寄せていた顔からはしわが取れ、慈愛に満ちた顔になってきた。そして、それまで大嫌いだったお布施を自らしたいと母に言い始めたのだ。

これだけ思い切って食に対する執着を捨てられたのは、尊師に対する信だけではなく、あのシークレット・ヨーガ以来、オウムのことをもっとよく知らなければ真理の実践はできないと思って実践し始めた教学の賜でもあろう。おそらく、布施の良さも教学により頭ではわかっていたのだろうが、初めはなかなか実践できなかったようである。しかし貪るなかれの戒を守り、食に対する貪りが切れた時点で、心より貪りを離れ、施すことの素晴らしさがわかったようだ。

母に対して優しい言葉をかけたことのなかった父だが、それ以来、

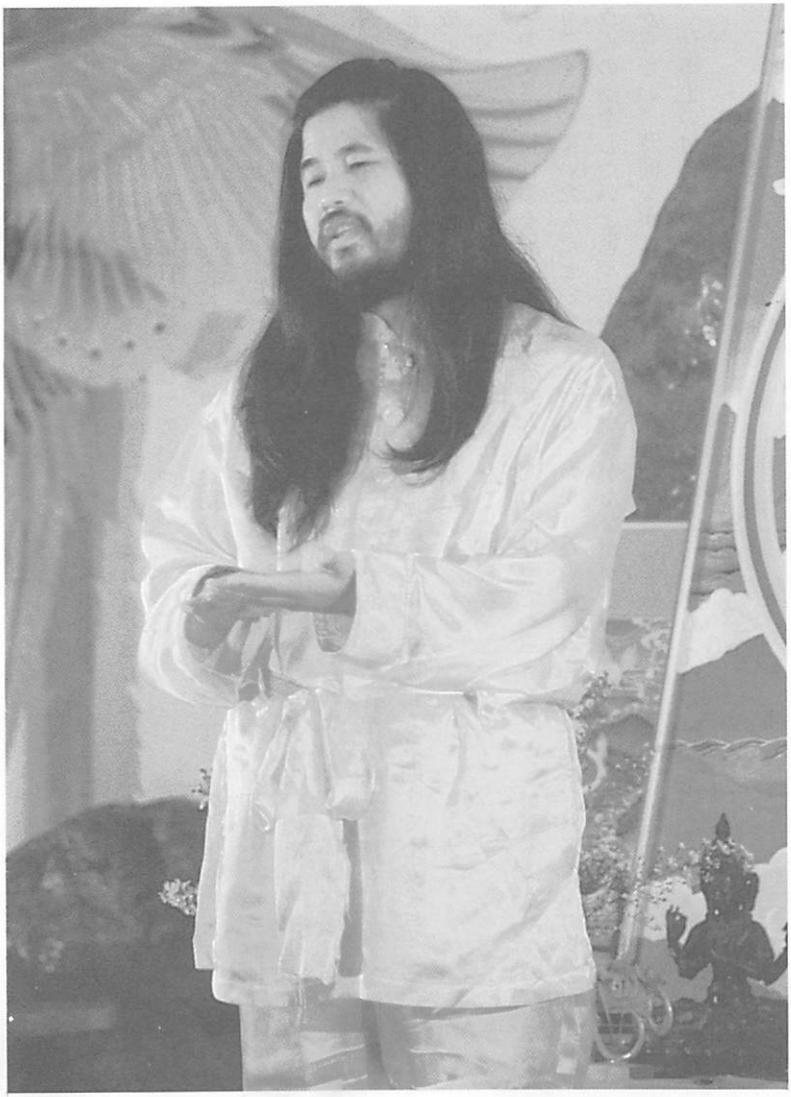
「ご苦労さま。」

といたわりの言葉をかけるようになり、また、プライドが強いがためにお礼の言葉をあまり言わ

なかったのに、だれにでもお礼を言うようになったのである。

——こういう具合に、どんどん心が変わってきていたあるとき、父の入院生活が始まった（もちろん、病院はオウム真理教附属医院である）。ここでは、自ら苦を乗り越えるために日夜修行をし、四無量心の心を培った優しいお医者さんと看護婦さんの手厚い看護と、真理にのっとった画期的な治療法により、日増しに良くなっていくのがはた目にもわかった。CTの断層写真でも癌が壊死しているのがよくわかる。それもこれも、教学と教学にのっとった実践と瞑想修行、そして多くのイニシエーションの賜である。そして、その土台となっているのが、初めてシークレット・ヨーガで尊師にお会いして以来の、尊師に対する信である。そして、師、真理の法を受持した先生方に対する深い信頼なのである。これらがうまくかみ合ったときに、外側を覆っていたコンクリートの塊がどろどろに溶けて、中から水晶玉のような透明な心が現われたのである。そして、そのように心が変化していくにつれ、病状が良くなっていったのである。

本当に、この短い期間の父の変化は驚くべきものがあった。まず、ミラクル・ボンドと浄化法によりオウムの素晴らしさに気付き、尊師にお会いしてグルの偉大なる心に感応し、信を持つに至った。そして、教学し、戒を守るようになった。小さな生き物でも殺生しなくなり、自分を良く見せたいがための嘘もつかなくなり、もちろん酒もやめた。さらに、貪らないという持戒により心身の浄化が起こった。その戒を守る素晴らしさに気付き、布施をすることによってますます



心が浄化された。嫌悪がなくなり、優しさがにじみ出てきた。貪ることの無意味さを知り、ますます布施の心が出てきた。また、決めたことを繰り返し繰り返し実践することにより、病気に打ち勝つ心の強さが日に日に強くなっていった。

そして最期には、完全に餓鬼のカルマを切り、切った瞬間に今生での人生を終わり、尊師のポアによって不飲酒天の世界へと旅立っていった（この餓鬼のカルマが切れたという証明としては、死後、T大附属病院で遺体を解剖した結果、癌細胞はすべて壊死していたという事実がある）。

肝臓癌が発覚してから約四カ月——。普通なら物も食べられなくなり、昏睡状態に陥って、一週間から一カ月ぐらいで苦しみながら死ぬところである。それが結局三カ月も延命し、最期まで歩き、普通に食べ、安らかに逝ったのだ。このことは、私達にも最期まで不安を与えることなく、安心して見送れたという恩恵を与えてくれた。

父がいつか私にしみじみと話してくれたことがある。

「お父さんは仕事を辞める。今まで人のためと思ってやってきたことが、実はみんなの煩悩（貪り）を強めていたんだということがよくわかった。仕事を辞めた後は、お客さんの家を回ってオウムの話をしたいと思っている。俺がわかんなかったのと同じように、世の中の人もなかなかわからない。時間をかけてやらなきゃならないこともあるんだよ。」

仕事上の付き合いが多く、会計士として社会的に認められていた父にとって、仕事を辞めて、

真理施をなす決心をすることは相当勇気がいったことと思う。真理の実践の素晴らしさを実感していたからこそ、プライドを捨ててでも、そのようにしたかったのだろう。私もその父の遺志を少しでもわかっていただけるように今以上に精進し、真理を伝えていきたいと思う。

父は、もう少し早くオウムの修行と治療を行なっていたら、間違いなく今も修行者として頑張っていたことだろう。今、病苦に悩んでいる方々、そしてそのご家族の方々、観念にとらわれて後悔しないように、一日も早くオウムの門を叩いてほしいと思う。真理の扉が今まさに開かれているのだから。

（九一年四月現在　二十二歳）

## ❖ 鈴木隆夫 ❖

私は今、真理なしでは生きられません。修行――心の成熟と霊性の向上――この最も大切な人間として生きる意味合いを抜きにして人生を考えるなら、それは空虚なものと思えます。麻原尊師の説く真理の実践が、今の私の生きる根本なのです。

しかし、そういう私も、オウムに出会う前は人間の幸福イコール物質的豊かさが基本と考え、政治活動をはじめとした外的環境の変革を求める活動をし、常に満たされぬ心を抱えて、ストレスの多い日々を送っていました。それが、オウムに出会い、少しずつ教えを実践するようになって、自分自身に大きな変化が起こり、このような思いを持つに至ったのです。では、その私の体験を少しお話ししたいと思います。

まず、グル、シヴァ大神、そして師をはじめとする出家教団に対して布施と奉仕の実践を行なうことにより、心が安定してきました。以前は、職場の人間関係でもちょっとしたことが心に引っ

かかり、緊張したり、ぎくしゃくしたりすることが多かったのですが、毎日道場に来て、ザンゲし、お布施（少ないですが）をすることにより、以前の私が嘘のように心を常に平静にキープできるようになってきたのです。また、煩悩が少なくなってきたためか、睡眠時間が五時間ぐらいでも生活できるようになってきて、神秘体験も少ないですが、詞章を唱えていると頭頂に圧迫を感じたり、少し痺れたりするようになり、クンダリニーの存在を実感することができるようになりました。

もちろん、このような恩恵を受けることができた背景には、布施、奉仕の実践だけではなく、日々の教学があると思います。私は、『マハーヤーナ』、説法テープなどは通勤途上で時間があれば必ず読み、聴くようにしていますが、この一年半、少しずつ教学していったことによって、自己の心の中に真理のデータが根付き、自分の身・口・意の行ないとその結果について、カルマの法則に基づいて考えることが少しずつできるようになりました。「自己の苦しみは自己の因」という偉大な教えの意味がわかりかけてきており、本当に麻原尊師の愛の大きさとその説く法の素晴らしさ、そしてそれに帰依できる自らの功徳に感謝しています。

また、心の安定と併せて現世での幸福、円滑化という点でも三宝への帰依は絶大な力を発揮するようです。求めず、いろんなことに頓着しなくなってくると職場の人間関係も良くなってきます。当たり前のことですが、相手に求めなければぶつかり合うこともなく、その態度に対して心

を乱すこともなく、落ち着いた心で相手を見ることができ、以前だったら怒ってしまったと思われる相手の対応も哀れみをもって見ることができるようになってきました。加えて、仕事自体も集中力と判断力が増して、以前多かったミスやど忘れも少なくなり、順調にいっています。また——これは、付け足しですが——バス停で待っているとバスが遅れてしまい、乗り継ぎの電車に遅れそうになったのですが、知っている人が見つけて車で送ってくれたりなど、偶然とは思えないラッキーなことも頻繁に起こるようになったのです。

このように、グル、シヴァ大神、真理、そしてサマナに対する帰依は、私に素晴らしい結果をプレゼントしてくれました。これらから、オウムには本当に神聖なエネルギーが存在していると証明できると思います。

——ところで、今まで述べてきたのは、八つの功徳のうちの三つ目までに当たると思いますが、残り五つの功徳についても、私はこの布施や奉仕と同様、教義にのっとり実践しました。つまり、在家信徒が守るべき五つの戒です。これも、私に大きな恩恵を与えてくれました。

まず、「不殺生」については、オウムに入信する以前から、蚊も殺すのが嫌だった私ですが、殺生が自と他を区別し、自己保全のため嫌悪する心が背景となって、地獄に至るカルマをつくること、堕胎もそうであることを知ったことは、結婚している私にとって素晴らしい知識となりました。

「盗まず、施す」ことの実践では、毎日道場に来て、財施をすることで大変心が軽くなりました。

「不邪淫」の戒では、今までは精を漏らすことがストレスの解消にいいと思い、雑誌やアダルトビデオに刺激を求めていたこともありました。しかし、精を漏らすことは肉体と意志の力を弱らせることを知り、現在はなるたけ精を漏らさないようにしています。それだけでなく、心の中でも邪淫のイメージが出てきたら、マントラを唱えるなどして打ち消すようにしています。これらのお蔭で、少しずつですが煩悩が落ちてきたようです。また、肉体が疲れにくく、エネルギッシュになり、雑念の少ない、集中した心の状態が長く続くようになりました。

「嘘をつかない」ことの実践は、つらいこともありますが、結果的には心に最も楽をもたらしてくれました。今まで、ちょっとしたことでも自己保全のために嘘をついていたことによって、心が屈折し、正しい判断もできないタマス優位の状態だったのですが、嘘をつかないことによって、霧が晴れたように不思議なくらい心が軽くなり、さらに判断力も高まり、自分に自信が持てるようになりました。

「酒の禁戒」については、付き合いでどうしても守れないときがありますが、日常的には全く飲んでいません。逆に、付き合いで少しでも飲めば、意志の力が弱り、予定していたことが遅れ、修行にも大きなマイナスになることを思い知らされています。

以上、八つの功徳について述べてきましたが、私が今、日常の心構えとして努力しているのは、「楽を求めない」ことです。また、心に苦を感じたら、なぜ苦を感じているか、その原因となっている自分の煩悩について考えるようにしています。そして、毎日道場に来てザンゲしています。

五つの戒、そして布施とザンゲによって私は心の安定を得、人に対して自然に優しい思いやりのある態度で接することができるようになってきました。当然、まだ百パーセント戒を守れているわけではないので、今後もっともっと厳格に戒を守るように努力し、そして真理の実践をしていきたいと思います。

（九一年四月現在　三十一歳）

# 四預流支

## あなたは未来の覚者

相応部経典 大篇第十一 預流相応

サキヤ神賢

# Sotāpatti-saṃyutta 「預流相応」（ソーターパッティ・サンユッタ）

## ◆一　王

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。

二　そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、こうお告げになった。

「向煩悩滅尽多学男達よ。」

「尊師よ。」

と、彼ら向煩悩滅尽多学男達は、覚者にお応え申し上げた。そこで、覚者は次のようにお説きになった。

三　「向煩悩滅尽多学男達よ、たとえ転輪王が、四つの大陸を王権をもって統治し、その身が壊れ、死んだ後、善趣である天界の三十三天の仲間に転生し、そこの歓喜林で天女達に取り囲まれ、天の五妙欲を授けられ、具足し、楽しんだとしても、彼は四つの法を具足することはない。し

たがって、彼は地獄から解放されず、動物界から解放されず、餓鬼界から解放されず、悪趣・険難処・堕処から解放されないのである。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、たとえ聖なる多学の弟子が、托鉢によって生き、ぼろ布をまとったとしても、彼は四つの法を具足する。したがって、彼は地獄から解放され、動物界から解放され、餓鬼界から解放され、悪趣・険難処・堕処から解放されるのである。それでは、四つとは何であろうか。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに聖なる多学の弟子がいて、覚者に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「かの覚者は、供養値魂・最上正覚者・智徳成就者・最上善逝・世間解・無上士・丈夫調御者・天人師・覚者・世尊である」と。

六　法に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「よく説かれた覚者による法は、現実に利益をもたらし、直接的であり、すべての人に理解できるように説かれており、煩悩破壊へ導き、それぞれの識別によって理解できる」と。

七　出家教団に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「覚者の多学の弟子出家教団は、善に付き従い、覚者の多学の弟子出家教団は、誠実に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正しい体系に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正法にのっとり

日々を送るという、すなわち、覚者の多学の弟子出家教団は、四対の人々・八つの宗教的特性を持つ人々であって、崇拝に値し、厚遇されるに値し、布施を受けるに値し、合掌されるに値し、この世の無上の福田である」と。

八　聖者が愛する戒を具足する。すなわちそれは、

「聖なる戒であり、道徳的に肯定されるべきものであり、悪趣に落ちない戒であり、純粋な戒であり、煩悩から解放する戒であり、識者に称賛され、煩悩に負けないための戒であり、サマディに導く」と。

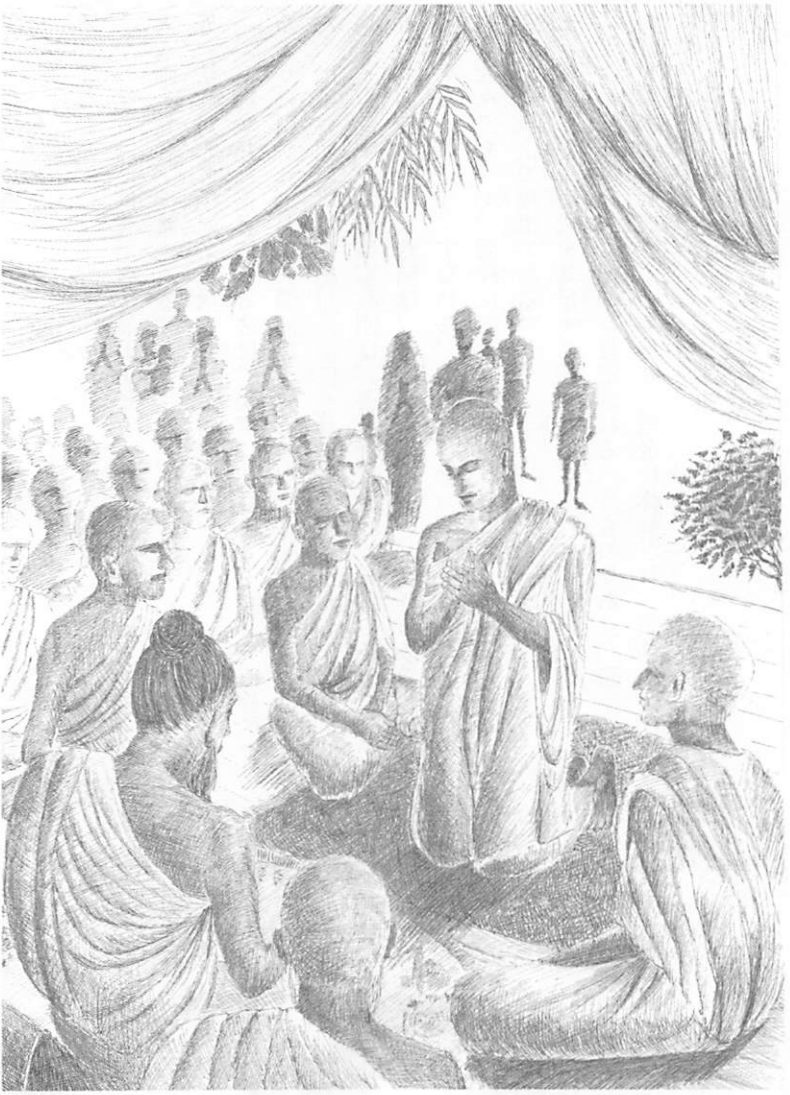
九　つまり、これら四つの法を具足することである。

一〇　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの大陸を獲得することと四つの法を獲得することでは、四つの大陸を獲得することは、四つの法を獲得することの十六分の一にも及ばないのである。」

## ◆二　没入、あるいは自己の落下

三「向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を具足するならば、聖なる多学の弟子は預流者であり、悪趣に落ちない法があり、決定者であり、正覚に至るのである。それでは、四つとは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに聖なる多学の弟子がいて、覚者に対して絶対の浄信を具足す



る。すなわち、

『かの覚者は、供養値魂・最上正覚者・智徳成就者・最上善逝・世間解・無上士・丈夫調御者・天人師・覚者・世尊である』と。

五　法に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

『よく説かれた覚者による法は、現実に利益をもたらし、直接的であり、すべての人に理解できるように説かれており、煩悩破壊へ導き、それぞれの識別によって理解できる』と。

六　出家教団に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

『覚者の多学の弟子出家教団は、善に付き従い、覚者の多学の弟子出家教団は、誠実に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正しい体系に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正法にのっとり日々を送るという、すなわち、覚者の多学の弟子出家教団は、四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々であって、崇拝に値し、厚遇されるに値し、布施を受けるに値し、合掌されるに値し、この世の無上の福田である』と。

七　聖者が愛する戒を具足する。すなわちそれは、

『聖なる戒であり、道徳的に肯定されるべきものであり、悪趣に落ちない戒であり、純粋な戒であり、煩悩から解放する戒であり、識者に称賛され、煩悩に負けないための戒であり、サマディに導く』と。

八　向煩悩滅尽多学男達よ、これら四つの法を具足するならば、聖なる多学の弟子は預流者であり、悪趣に落ちない法があり、決定者であり、正覚に至るのである。」

九　このように覚者はお説きになった。そして、このように説いた後、世間解である尊師は、さらに次のようにお説きになった。

帰依があり、戒があり、
浄信があり、法を見る者は、
最後の時に至って、
神聖行（しんせいぎょう）に没入し、安楽である。

## ◆五　サーリプッタ（二）

二　そのとき、長老サーリプッタは、覚者がいらっしゃる所を訪れた。訪れると、覚者を礼拝して傍らに座った。傍らに座った長老サーリプッタに、覚者はこうお告げになった。

三　「サーリプッタよ、預流支（よるし）、預流支とこう説くが、サーリプッタよ、それでは預流支とは何であろうか。」

「尊師よ、『善と徳のある人の仲間になること』は預流支です。『真理の法をできるだけたくさん

聴くこと」は預流支です。「真理にのっとり作意すること」は預流支です。「真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」は預流支です。」

「素晴らしいことだ、サーリプッタよ。素晴らしいことだ、サーリプッタよ。「善と徳のある人の仲間になること」は預流支であり、「真理の法をできるだけたくさん聴くこと」は預流支であり、「真理にのっとり作意すること」は預流支であり、「真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」は預流支である。」

四　「サーリプッタよ、「流れ」、「流れ」とこう説くが、サーリプッタよ、それでは「流れ」とは何であろうか。」

「尊師よ。この聖なる八支の道は「流れ」です。すなわち、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正精進・正記憶修習・正サマディのことです。」

「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、サーリプッタよ。この聖なる八支の道は「流れ」である。すなわち、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正精進・正記憶修習・正サマディのことである。」

五　「サーリプッタよ、預流者、預流者とこう説くが、サーリプッタよ、それでは預流者とは何であろうか。」

「尊師よ、この聖なる八支の道を具足した、この者が預流者であります。まさしく、何々名、何々

姓の長老のことです。」

「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、サーリプッタよ。この聖なる八支の道を具足した、この者が預流者である。まさしく、何々名、何々姓の長老のことである。」

## ◆一二　祭司

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。

二　そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、こうお告げになった。

「向煩悩滅尽多学男達よ。」

「尊師よ。」

と、彼ら向煩悩滅尽多学男達は、覚者にお応え申し上げた。そこで、覚者は次のようにお説きになった。

三　「向煩悩滅尽多学男達よ、祭司達は昇天（しょうてん）に至るという方法を示し、多学の弟子をこのように鼓舞するのである。

『さあ男よ、朝早く起きて、東に向かって行け。穴を避けるな。絶壁を避けるな。杭（くい）を避けるな。

イバラの地を避けるな。水たまりを避けるな。どぶ池を避けるな。落ちた所で死に至るがよい。さあ男よ、このようにしてお前は、その身が壊れ、死んだ後、善趣である天界へ転生するだろう。」

**四**　向煩悩滅尽多学男達よ、しかし、祭司達はこのことで愚痴に導き、このことで愚鈍に導きはするが、このことで、現世否定・離貪・滅尽・寂静・証智・正覚・煩悩破壊に導くことはないのである。

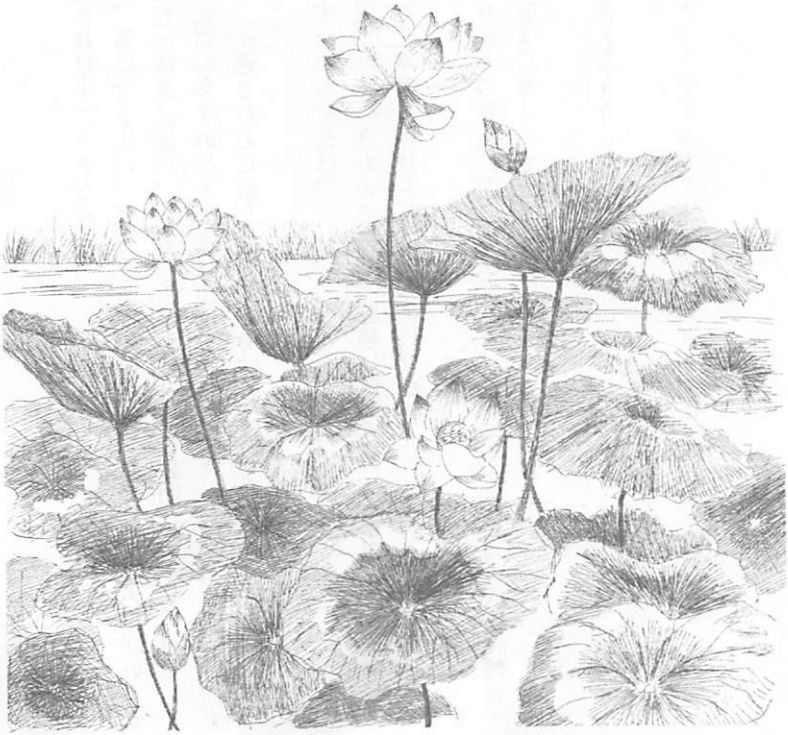
向煩悩滅尽多学男達よ、私もまた、聖なる律において昇天に至る方法を示すのだ。そして、それは完全なる現世否定・離貪・滅尽・寂静・証智・正覚・煩悩破壊に導くのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、どのような昇天に至る方法が、完全なる現世否定・離貪・滅尽・寂静・証智・正覚・煩悩破壊に導くのであろうか。

**五**　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに聖なる多学の弟子がいて、覚者に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「かの覚者は、供養値魂・最上正覚者・智徳成就者・最上善逝・世間解・無上士・丈夫調御者・天人師・覚者・世尊である」と。

法に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「よく説かれた覚者による法は、現実に利益をもたらし、直接的であり、すべての人に理解できるように説かれており、煩悩破壊へ導き、それぞれの識別によって理解できる」と。



出家教団に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「覚者の多学の弟子出家教団は、善に付き従い、覚者の多学の弟子出家教団は、誠実に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正しい体系に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正法にのっとり日々を送るという、すなわち、覚者の多学の弟子出家教団は、四対の人々・八つの宗教的特性を持つ人々であって、崇拝に値し、厚遇されるに値し、布施を受けるに値し、合掌されるに値し、この世の無上の福田である」と。

聖者が愛する戒を具足する。すなわちそれは、

「聖なる戒であり、道徳的に肯定されるべきものであり、悪趣に落ちない戒であり、純粋な戒であり、煩悩から解放する戒であり、識者に称賛され、煩悩に負けないための戒であり、サマディに導く」と。

六　向煩悩滅尽多学男達よ、これがその昇天に至る方法であり、それは完全なる現世否定・離貪・滅尽・寂静・証智・正覚・煩悩破壊に導くのである。」

## ◆二六　破戒、あるいはアナータピンディカ（一）

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまって

おられた。

二　そのとき、アナータピンディカ長者は病気となり、患い、重病であった。

三　そこで、アナータピンディカ長者は、ある召使いにこう告げた。

「召使いよ、さあ、お前は長老サーリプッタの所に行きなさい。行って、私の名前で長老サーリプッタのおみ足を頂礼しなさい。

『尊者よ、アナータピンディカ長者は病気となり、患い、重病です。彼は長老サーリプッタのおみ足を頂礼して、このように言っています。

「尊者よ、どうか慈悲の心を持って、長老サーリプッタがアナータピンディカ長者の家にいらっしゃいますよう、お願い申し上げます」と。』」

「かしこまりました。ご主人様。」

と、その召使いはアナータピンディカ長者に応えて、長老サーリプッタの所を訪れた。訪れると、長老サーリプッタを礼拝して、傍らに座った。

四　傍らに座ったその召使いは、長老サーリプッタにこう言った。

「尊者よ、アナータピンディカ長者は病気となり、患い、重病です。彼は長老サーリプッタのおみ足を頂礼して、このように言っています。

『尊者よ、どうか慈悲の心を持って、長老サーリプッタがアナータピンディカ長者の家にいらっ

しゃいますよう、お願い申し上げます』と。」

そして、長老サーリプッタは黙って同意したのである。

五　そこで、長老サーリプッタは、早朝、内衣を着け、衣鉢を持って、長老アーナンダをお付きの出家修行者として、アナータピンディカ長者の家を訪れた。訪れると、設けられた座に座った。そして座ってから、長老サーリプッタはアナータピンディカ長者にこう言った。

「長者よ、あなたの病気は良くなっていますか。耐えられますか。苦の感覚は減っていて増えず、その減少を知るばかりで、増大を知らないということはありませんか。」

「尊者よ、私の病気は良くならず、耐えられず、激しい苦の感覚は増えていて減ることはなく、その増大を知るばかりで、減少を知ることはありません。」

六　「長者よ、覚者に対する不信を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたには覚者に対するそのような不信はありません。長者よ、あなたには覚者に対する絶対の浄信があるのです。すなわち、

『かの覚者は、供養値魂・最上正覚者・智徳成就者・最上善逝・世間解・無上士・丈夫調御者・天人師・覚者・世尊である』と。

したがって、自分には覚者に対して絶対の浄信があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

七　長者よ、法に対する不信を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたには法に対するそのような不信はありません。長者よ、あなたには法に対する絶対の浄信があるのです。すなわち、

「よく説かれた覚者による法は、現実に利益をもたらし、直接的であり、すべての人に理解できるように説かれており、煩悩破壊へ導き、それぞれの識別によって理解できる」と。

したがって、自分には法に対して絶対の浄信があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

八　長者よ、出家教団に対する不信を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたには出家教団に対するそのような不信はありません。長者よ、あなたには出家教団に対する絶対の浄信があるのです。すなわち、

「覚者の多学の弟子出家教団は、善に付き従い、覚者の多学の弟子出家教団は、誠実に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正しい体系に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正法にのっとり日々を送るという、すなわち、覚者の多学の弟子出家教団は、四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々であって、崇拝に値し、厚遇されるに値し、布施を受けるに値し、合掌されるに値し、この世の無上の福田である」と。

したがって、自分には出家教団に対して絶対の浄信があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は

必ず鎮まることでしょう。

九　長者よ、破戒を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような破戒はありません。長者よ、あなたには聖者が愛する戒があるのです。すなわちそれは、

『聖なる戒であり、道徳的に肯定されるべきものであり、悪趣に落ちない戒であり、純粋な戒であり、煩悩から解放する戒であり、識者に称賛され、煩悩に負けないための戒であり、サマディに導く』と。

したがって、自分には聖者の愛する戒があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

一〇　長者よ、邪見解を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪見解はありません。長者よ、あなたには正見解があるのです。

したがって、自分には正見解があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

一一　長者よ、邪思惟を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪思惟はありません。長者よ、あなたには正思惟があるのです。

したがって、自分には正思惟があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

三　長者よ、邪語を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪語はありません。長者よ、あなたには正語があるのです。

したがって、自分には正語があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

三　長者よ、邪行為を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪行為はありません。長者よ、あなたには正行為があるのです。

したがって、自分には正行為があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

四　長者よ、邪生活を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪生活はありません。長者よ、あなたには正生活があるのです。

したがって、自分には正生活があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

五　長者よ、邪精進を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪精進はありません。長者よ、あなたには正精進があるのです。

したがって、自分には正精進があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

一六　長者よ、邪記憶修習を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪記憶修習はありません。長者よ、あなたには正記憶修習があるのです。

したがって、自分には正記憶修習があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

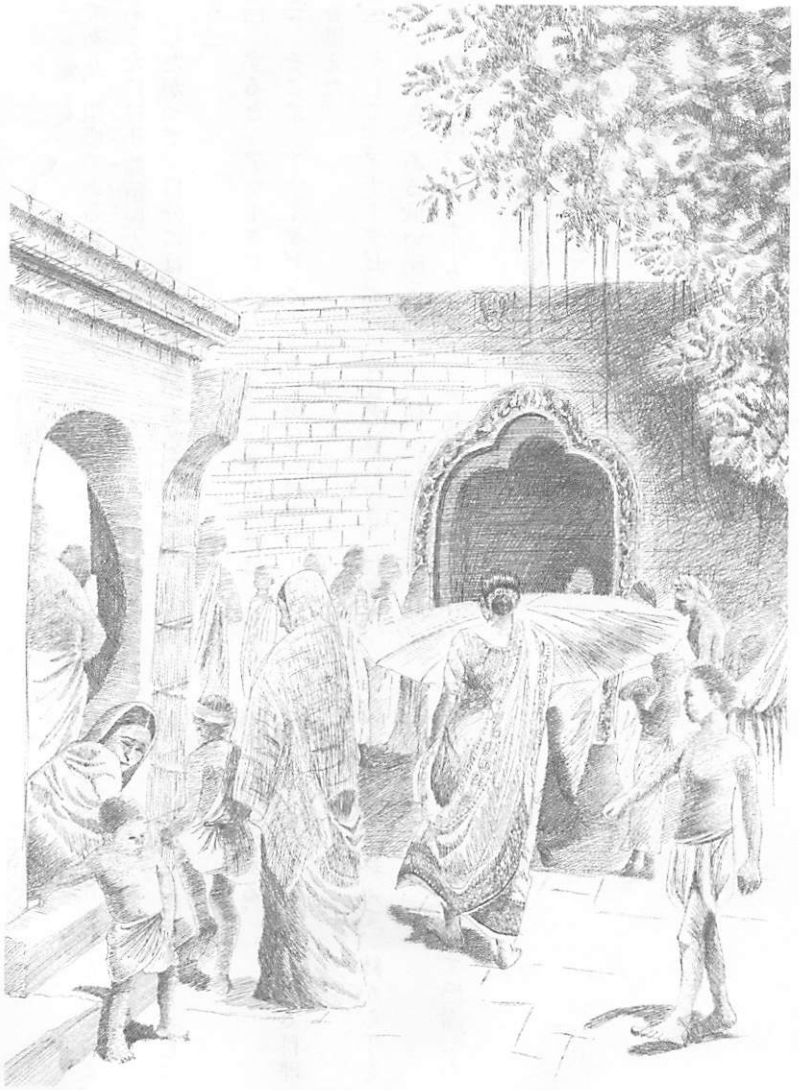
一七　長者よ、邪サマディを具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪サマディはありません。長者よ、あなたには正サマディがあるのです。

したがって、自分には正サマディがあるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

一八　長者よ、邪精通を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪精通はありません。長者よ、あなたには正精通があるのです。

したがって、自分には正精通があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。

一九　長者よ、邪離解脱を具足する無学の凡夫は、その身が壊れ、死んだ後、悪趣であり、険難処



であり、堕処である地獄に転生しますが、あなたにはそのような邪離解脱はありません。長者よ、あなたには正離解脱があるのです。

したがって、自分には正離解脱があるのだとあなたが観れば、苦の感覚は必ず鎮まることでしょう。」

二〇　すると、アナータピンディカ長者の苦の感覚は、必然的に鎮まったのである。

二一　そこで、アナータピンディカ長者は、長老サーリプッタと長老アーナンダに、自ら鍋で料理を供えた。

二二　そして、アナータピンディカ長者は近付き、長老サーリプッタが食事を終えて、鉢から手を離したとき、ある低い座を取って、傍らに座った。

二三　傍らに座ったアナータピンディカ長者に対し、長老サーリプッタはこの詩句によって感謝した。

真理勝者に対する帰依は、
不動であり安定しており、
善なる戒は、
聖者が愛し称賛され、
出家教団に対する浄信は、

正しい真実の見解であり、
「貧しくない」とそれを言い、
この生活は空しくはない。
それゆえに、聡明なるあなた方は、
覚者の教えを記憶しながら、
帰依と戒と浄信と法見解を
守り実践するがよい。

二四 そこで、アナータピンディカ長者に対し、長老サーリプッタはこの詩句によって感謝して、座を立って去っていった。

二五 そして、長老アーナンダは覚者がいらっしゃる所を訪れた。訪れると、覚者を礼拝して傍らに座った。傍らに座った長老アーナンダに、覚者はこうおっしゃった。

二六 「さて、アーナンダよ、あなたは早朝どこから来たんだ?」

「尊師よ、長老サーリプッタは、アナータピンディカ長者にこれこれという教戒をしたのです。」

「アーナンダよ、サーリプッタは賢者である。アーナンダよ、サーリプッタは大慧である。なぜならば、四預流支を十の状態に分別できるからである。」

◆三六　同胞

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を具足するならば、神々が歓喜して「同胞である」と語るのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに聖なる多学の弟子がいて、覚者に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「かの覚者は、供養値魂・最上正覚者・智徳成就者・最上善逝・世間解・無上士・丈夫調御者・天人師・覚者・世尊である」と。

神性であって、覚者に対して絶対の浄信を具足して、ここで死没してかの所に転生した者は、こう考える。

「私達が覚者に対して絶対の浄信を具足して、そこで死没してここに生まれてきたように、聖なる多学の弟子もまた、このように覚者に対して絶対の浄信を具足して、神々のもとに来ることであろう。」

四　また、聖なる多学の弟子は、法に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「よく説かれた覚者による法は、現実に利益をもたらし、直接的であり、すべての人に理解できるように説かれており、煩悩破壊へ導き、それぞれの識別によって理解できる」と。

神性であって、法に対して絶対の浄信を具足して、ここで死没してかの所に転生した者は、こ

う考える。

「私達が法に対して絶対の浄信を具足して、そこで死没してここに生まれてきたように、聖なる多学の弟子もまた、このように法に対して絶対の浄信を具足して、神々のもとに来ることであろう。」

五　また、聖なる多学の弟子は、出家教団に対して絶対の浄信を具足する。すなわち、

「覚者の多学の弟子出家教団は、善に付き従い、覚者の多学の弟子出家教団は、誠実に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正しい体系に従い、覚者の多学の弟子出家教団は、正法にのっとり日々を送るという、すなわち、覚者の多学の弟子出家教団は、四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々であって、崇拝に値し、厚遇されるに値し、布施を受けるに値し、合掌されるに値し、この世の無上の福田である」と。

神性であって、出家教団に対して絶対の浄信を具足して、ここで死没してかの所に転生した者は、こう考える。

「私達が出家教団に対して絶対の浄信を具足して、そこで死没してここに生まれてきたように、聖なる多学の弟子もまた、このように出家教団に対して絶対の浄信を具足して、神々のもとに来ることであろう。」

六　また、聖なる多学の弟子は、聖者が愛する戒を具足する。すなわちそれは、

「聖なる戒であり、道徳的に肯定されるべきものであり、悪趣に落ちない戒であり、純粋な戒であり、煩悩から解放する戒であり、識者に称賛され、煩悩に負けないための戒であり、サマディに導く」と。

神性であって、聖者が愛する戒を具足して、ここで死没してかの所に転生した者は、こう考える。

「私達が聖者が愛する戒を具足して、そこで死没してここに生まれてきたように、聖なる多学の弟子もまた、このように聖者が愛する戒を具足して、神々のもとに来ることであろう。」

七　向煩悩滅尽多学男達よ、この四つの法を具足するならば、神々が歓喜して「同胞である」と語るのである。

## ◆三八　雨

二　向煩悩滅尽多学男達よ、たとえるならば、天から山の上に大いに雨が降るとき、その水は下方に流れ、山の渓谷（けいこく）や渓流を満たす。山の渓谷や渓流が満ちあふれると、小さな池に満ちる。小さな池が満ちあふれると、大きな池に満ちる。大きな池が満ちあふれると、小さな川に満ちる。小さな川が満ちあふれると、大きな川に満ちる。大きな川が満ちあふれると、大海に満ちるのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、このように、聖なる多学の弟子の覚者に対する絶対の浄信と、法

に対する絶対の浄信と、出家教団に対する絶対の浄信と、聖者が愛する戒といった、これらの諸法は流れて、かの岸に至り、漏の破壊に導くのである。

## ◆五〇　支

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四預流支がある。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、これらが四預流支なのである。

## ◆五五　四つの果（一）

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、預流果の現証に導かれるのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、この四つの法を修習し、真面目に行なうならば、預流果の現証に導かれるのである。

◆五六　四つの果（二）

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、一来果の現証に導かれるのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

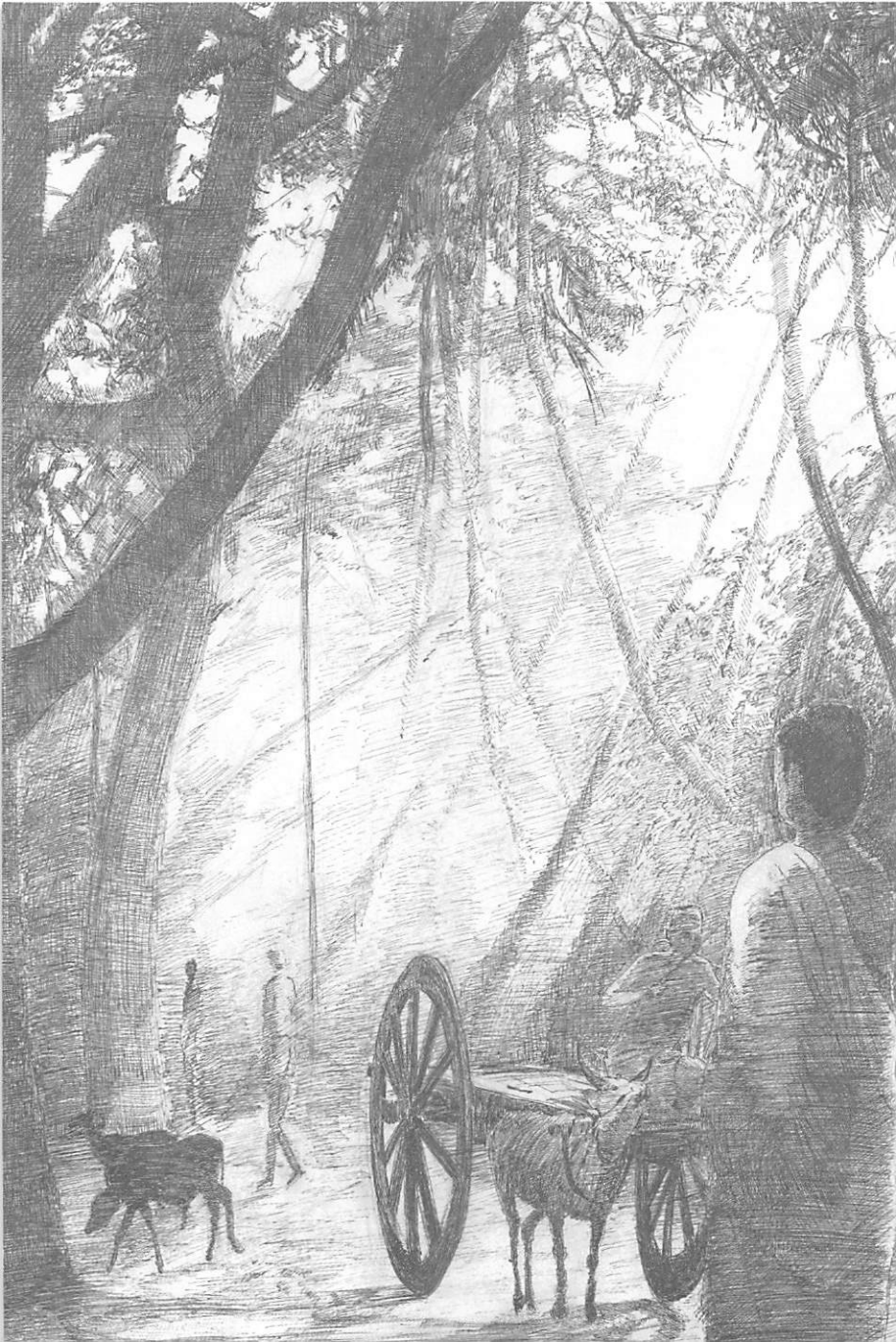
四　向煩悩滅尽多学男達よ、この四つの法を修習し、真面目に行なうならば、一来果の現証に導かれるのである。

◆五七　四つの果（三）

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、不還果の現証に導かれるのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、不還果の現証に導かれるのである。



## ◆五八　四つの果（四）

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、供養値魂果の現証に導かれるのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、この四つの法を修習し、真面目に行なうならば、供養値魂果の現証に導かれるのである。

## ◆五九　到達

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、智慧の到達に導かれるのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、この四つの法を修習し、真面目に行なうならば、智慧の到達に導かれるのである。

◆六〇　発達

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、智慧の発達に導かれるのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、この四つの法を修習し、真面目に行なうならば、智慧の発達に導かれるのである。

◆六一　充実

二　向煩悩滅尽多学男達よ、四つの法を修習し、真面目に行なうならば、智慧の充実に導かれるのである。それでは、四つとは何であろうか。

三　すなわちそれは、「善と徳のある人の仲間になること・真理の法をできるだけたくさん聴くこと・真理にのっとって作意すること・真理の法にのっとり法の実践を行なうこと」である。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、この四つの法を修習し、真面目に行なうならば、智慧の充実に導かれるのである。

# 四預流支

麻原彰晃尊師

## いにしえの叡智をここに

そして、そのための実践は何かというと、それは四つの預流支です。では、その預流支とは何なのか。ほかでもない、四つの預流支の第一は、如来に対する帰依、仏陀に対する帰依をしなさいよと。これは何を表わしてるかというと、真理に対する帰依、つまりあなた方の心の測違しなければならないところの最終地点に対する、つまりあなた方の心の測違しなければならないところの最終地点に対する帰依をしなさいよと。あなた方は、現実の生活によって、いろいろな煩悩にまみれ、聞こえなくされている。だから、聞にそれを体現した者に対して帰依をすることにより、あなた方の本質、心の本性とそれ自体に対する帰依をしなさいよと。これが第一の帰依である。

次に第二の帰依、真理に対する帰依であると。この真理に対する帰依とは何かというと、真理に対する帰依というものは、あなた方を最終地点へ導く乗り物に対する帰依となるでしょう。では、第三番目のサンガに対する帰依、これは漢語で僧伽と言いまして、この僧伽の僧を取って、仏・法・僧の僧となりました。実際は、サンガと言うべきです。サンガというのは何かというと、しくない。

第一話　真理――その素晴らしさを実践してる者、真理を実践してる者、真理を実践して

策二話　マハー・ニルヴァーナへ至る道

第三話　天へ行く者、悪趣へ行く者

第一話　真理――その素晴らしさを実践してる者、真理を実践して
策二話　マハー・ニルヴァーナへ至る道
第三話　天へ行く者、悪趣へ行く者

# 第一話　真理――その素晴らしさ

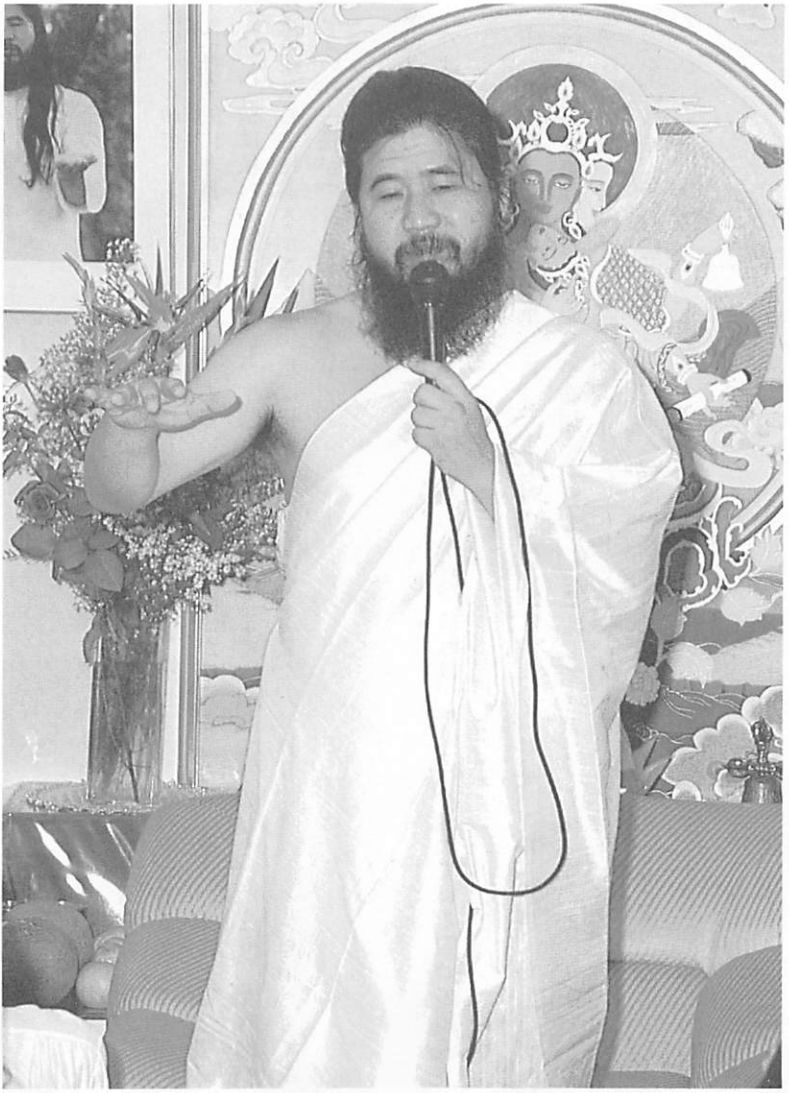
九一年一月十五日　於・名古屋支部

## ◉揺るぎない確信に基づいて

私は、この日本に生まれる前、多くの生において多くの文明を形成してきた。――今日、実は講話が遅れた理由というのは、三昧に入っていて体が固定されて、ちょっと動かなくてね、それで遅れたわけだけども――特に、石の文明、皆さんもよく知っているエジプトの文明、あるいは南アメリカの文明、あるいはこの地球以外の場所において、多くの文明を形成してきた。

で、この石の文明の由縁とは何かというと、多くの人達をいかにポアするかと。このポアというのは、高い世界へ意識を移し変えるかという、それを科学的にコントロールする一つの大きな技術であると。このポアは、私達の五大エレメント――地元素・水元素・火元素・風元素・空元素、この五大エレメントの地元素優位からいかに水元素へ移行させ、そして火元素へと移行させるかということが一つのポイントとなる。なぜならば、下の元素より上の元素の方が精神性が高いからであると。

そして私は、その自分自身が経験している三昧、如実智見、遠離、離貪、解脱というプロセス、



あるいはその三昧によって経験した死、生、死、生の繰り返し、あるいは死と生の中間状態、この経験、これをもって魂というものは必ず死に、そして、前生のカルマというものが、次の生を決定するのであるという話を皆さんにしているわけです。そして、この経験があるからこそ、いかに社会的に非難されようとも、あるいは社会的に評価が揺らごうとも、そういうことは一切関係なく、私は私の経験に基づいた主張というものを今まで展開してきました。つまり、絶対的な確信が私の中にあるからこそ、私は皆さんに対して、あなた方は真理にのっとり生きるべきであるという主張ができるわけです。

### ◉此の岸から彼岸へ

では一体、真理に根付いて生きるとは何なのかと。これは、皆さんの知っている四つの預流支のことであると言えます。

四つの預流支とは、まず第一に、三宝に対する帰依。つまりこれは、グル、真理、そしてグルの教えに集う集団に対する奉仕や布施の実践ということになります。この三宝のサンガとは何かと。これを別の言い方をするならば、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナの教えを実践し、その修行によって、ある程度の悟りに到達している者達ということになるでしょう。そして、その教え、これを多く聴き、学び、この現世の三悪趣へ至るデータと同じぐらいに

なるデータの量を吸収し、それに基づいて考えると。これが二番目の預流支、そして三番目の預流支である。そして第四番目の預流支、これはそれを実践することであると。

真理とは素晴らしいものです。では、なぜ真理とは素晴らしいのかというと、この四つの預流支を川による旅、あるいは海による旅にたとえて考えてみましょうと。

まず、第一番目の三宝に対する帰依は、これは自分自身が乗る船、この船を信じるということになります。あるいは、どの船に乗るかを選定し、過ちのないようにするということになります。そして、その帰依とはその船を掃除し、整備し、途中で沈没しないように奉仕すると。そして、まず全体的な地図の確認に入ると。これが、第二番目の多くのものを学ぶということです。もし、多くのものを学ばなければ、一体どの海流を使ったらいいか、あるいはどこでどのような川の流れになり、そしてそのときには、どうしたらいいかというようなことが理解できなくなる。よってまず、全体的な流れをつかみ、そして第三段階において、今自分自身がどこの所を実際に走っているのか、そしてどういう問題点があるのか、その問題点については、どのようにしたらいいのかということを十分に考えると。つまり、これは地図の確認、および今まで目的地へ到達したことがある人の意見を聞き、それを自分に当てはめて、頭の中で予行演習を何度も何度も行なうということです。そして、第四番目にやっとその実践を行なうと。つまり、頭の中に地図がはっきり入っていて、そしてその確認、それから自分自身の問題点、つまり運行途上の船の問題点とい

うものをしっかりと把握しているから、第四番目の目的地へ向かうということは、それほど難しいことではないでしょう。これこそ、四つの預流支であると。つまり、四つの預流支というものは、対岸、彼岸へと到達する絶対的な方法であるということが言えると思います。

### ◉何に対して帰依するか

では、次にこの三宝――ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナの教えの完成者、あるいは教え、あるいは教えに集う者とは何でしょうかと。これは、今月号の信徒用『マハーヤーナ』にも載ってると思いますが、その対象となる者は、八つの聖なる実践を行なっている者、または六つの徹底を行なっている者ということになるでしょう。ここで一つ気を付けなければならないことは、この八つの聖なる実践方法、つまり一般によく言われている八正道、あるいは六つの徹底、つまり六波羅蜜、この二つは同じであるということ。これは、今年一月の三日に行なわれた説法祭の中で、私は八正道と六波羅蜜が同じであるということを説いています。この講話をお聴きになられた方であるならば、よく理解できるでしょう。

この八正道や六つの極限によって三昧に到達し、その三昧によって、如実にこの三界を智見すると。そして、結局それはすべて幻影であるということを理解し、遠離し、離貪し、そして解脱した者、これを仏陀といいます。そして、その教え、それが真理です。そして、その途上にある

者達、これがサンガに集う者ということになるでしょう。もし、この者達に対して布施や奉仕の実践をするならば、必ずやカルマが落ち、浄化され、そして、未来において同じように仏陀として、完成者としてすべての魂の尊敬の的となることでしょう。

もし、この聖なる八支の道の実践者ではない者に対して、布施や奉仕の実践を行なうならば、それはちょうど焼いた種をまいて、花やあるいは果実や、果実を得ようとするのと同じように、それはなかなか不可能なものとなるでしょう。つまり、四つの預流支の土台は、何に対して帰依するか、これが第一の土台となります。

### ◉徹底した清らかな修行

これは、名古屋のある一生懸命やってた信徒さんの中で、こういう話があります。一生懸命オウム真理教を実践していると。そして、まあ、その人は事業をなさってたわけだけども、その事業が、オウム真理教の名前を出すことによって行き詰まられたと。それは、今まで社会的に叩かれてる教団だからであると。そして、彼はこう考えた。「現世を生きていかなければ仕方がないんだ」と。そういうことでオウムを離れられ、ある修験道者のところに行かれ、そしてそこで護摩火、その他を焚いていただき、現世的な生活を豊かにしようとしてらっしゃると。

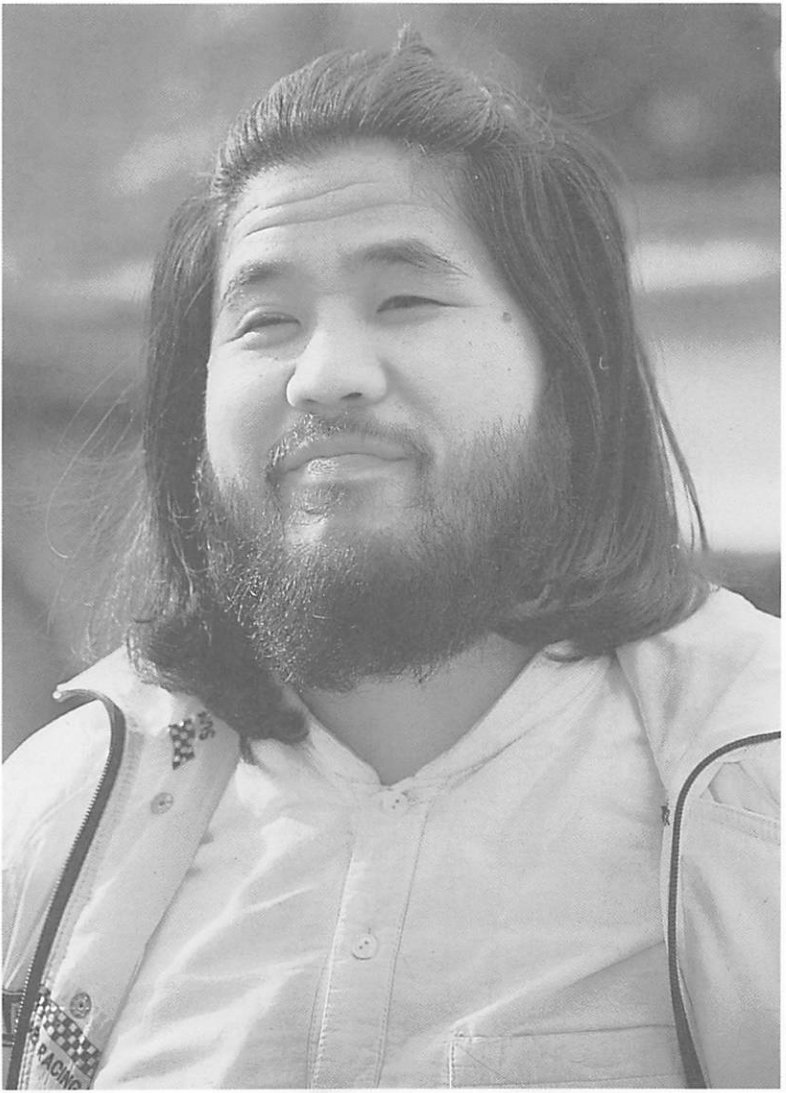
これは来月の『マハーヤーナ』に載る内容だけども、あのアナータピンディカ長者も、全く布

施のできないぐらいの貧しい状態に追い込まれました。それはなぜかというと、仏教の教えというものは、徹底した清浄。つまり、清らかな修行です。

アナータピンディカ長者は、早朝、そして食後、夕方と三回、僧達のたくさんいる精舎を訪れ、そして奉仕作業をなさってた。ということは、家事を全くなさらなかったと。稼業である事業をなさらなかったと。で、その度に布施の実践を行ない、結局どんどんどんどん布施していくわけですから、生活できなくなったと。もちろんこれは、最終的に神秘的な力で救済されます。

で、なぜその神秘的な力で救済されるまで、実践をなさったかというと、結局カルマが落ち切るまで、つまり人間としてのカルマが落ち切るまで、あるいは利益追求の長者としてのカルマが落ち切るまで、この実践をなさったんだと考えたら正しい。ところが、カルマが落ちる前に果報、つまり結果を求めようとすると、真理の教えというものは、なかなかつらいものがあります。つまり、その名古屋の信徒さんは、教義、仏教的な教え、あるいは真理の教えというものが理解おできにならなかったんだという、これは大変残念な例です。

逆に、同じ名古屋の信徒さんでこういう例もある。これは、前回のシークレット・ヨーガで私にザンゲをなさり、そこでカルマが噴き出し、事故に遭われたと。ま、車がつぶれ、若干のケガをなさったが、それによって殺生、つまり地獄へ落ちるカルマを切ったという方もいらっしゃいます。この人は一生懸命、教義を理解してらっしゃったから、自己のカルマであることを認識し、



それからより一層修行にいそしまれていたと聞いています。この前者の選択をするのか、あるいは後者の選択をするのかは、大きな違いがあります。

### ◉エネルギーを強め、充実させる

在家の修行である六つの徹底、この六つの徹底の中の三番目になぜ忍辱（にんにく）が来るのかということ、これを皆さんがもしご理解いただいたら、仏教の素晴らしさ、あるいは真理の素晴らしさというものがよくご理解いただけるでしょう。

つまり、三つの布施――財施・真理施・安心施という三つの布施を徹底的に行なうことによりエネルギーを強めると。光を強めると。

そして、第二番目の殺生を離れ、すべての魂を慈しむと。偸盗（ちゅうとう）を離れ、施すと。邪淫（じゃいん）を離れ、人と人と和合すると。嘘をつかず真実を語り、堂々と生きると。酒、タバコ等の心を乱すものから離れ、絶えず心を安定させた状態に置くという五つの戒を守ることにより、エネルギーの漏れをなくし、蓄えられた功徳のエネルギーを充実させると。

そして、三番目に来るもの、それは過去、あるいは過去世に積んだ悪業を滅するための忍辱です。つまり、布施・持戒という二つがなされていれば、三番目の忍辱は平然と耐えられるはず。ところが布施・持戒がなされていないと、三番目の忍辱というものはなかなか耐えることができません。

では、この布施・持戒を実践するためには、何をなせばいいのかと。その問題については、先程も述べたとおり、四つの預流支の実践ということになります。つまり三宝帰依、真理を多く学ぶこと、真理に基づき考えること、そしてその実践です。つまり、前者の信徒さんはこの四つの預流支ができてなかったということになる。後者の信徒さんは四つの預流支の途上にある、実践ができてるということになる。

### ◉法は実践してこそ

法は生きています。そして、この法の実践をするかどうかが法の喜びであり、そして私とサンガの喜びであると言えます。

一九九一年は多くの出来事があるでしょう。それは、社会の揺れというものは、今よりもっともっとひどくなり、逆にオウム真理教は、多くの真理のデータを皆さんに提供することになるでしょう。例えばアニメーション、例えば「死と転生」、例えば、子供達に声の劇団というのかな、等の提供ですね。あるいは若者のためのマンガ等です。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。死の前には財産も無効だし、権力も無効だし、あるいは愛着しているものすべてが無効であり、苦しみであると。このことをしっかりと悟ってください。

# 第二話　マハー・ニルヴァーナへ至る道

九一年一月十二日　於・横浜支部

## ◉仏教――すべてを包含する教え

人間の一生というものは大変短い。そして、その間に多くの経験をし、その経験を昇華させる形で次の転生がある。

オウム真理教の基本的教義のバックボーンの一つ、パーリ仏典『南伝大蔵経』、この『南伝大蔵経』のお経の骨子の約八割は、人がどのようにして生きるならば本当の意味での幸福・自由・歓喜の世界へといざなわれるのかと、この教えに約三百数十ページのお経の四十数冊が費やされている。

そして、その基本的な原則は、皆さんもよく知っている四つの預流支である。この四つの預流支は、私達を最終的には、マハー・ニルヴァーナへと導いてくれるということになっている。このマハー・ニルヴァーナへ最終的に導いてくれるということはどういうことかというと、この四つの預流支が、結局、私達を形成している五蘊を少しずつ少しずつ神々の身体に変えていき、そして、その実体のない心の状態、空に到達させ、その空の広がり、あるいは深さが最終地点へと

到達し、すべてを包含し、そしてマハー・ニルヴァーナへと至るという教えなのである。これが仏教である。

そして、この仏教の教えの中に、キリスト教も、あるいはユダヤ教も、あるいはイスラム教も、あるいは他の神道的な教え、他の大乗仏教の一部の経典、これもすべて含まれるのである。

### ◉光へと変えて……

それはなぜかというと、私達を構成しているものは、小乗の仏教であれ、大乗の仏教であれ、五蘊以外考えられないからである。この五蘊とは、皆さんもよく知っている色、これは私達の肉体、形のあるもの、これを色といいます。受、これは感覚、例えば目でものを見る、耳で音を聞く、舌でものを味わうといったようなもの。想、これはイメージである。私達が例えば、「ラクダ」という名前を聞いたときに、パッとラクダの形が浮いてくると。あるいは、「悪魔」という名前を聞いたときに、日頃培っている正しくないデータによって、こういう顔のこういう形のものであるというイメージが出てくる。これが、想である。そして、行。これは、意志である。つまり、いついつまでに何々を達成するだとか、あるいは、これをこのような形で動かすぞといったような意気込み、これが意志である。そして、最後の意識。これは瞑想を深くやっていればよく経験することだが、私達の肉体の構成部分は意識で形成されている。つまりデータの集まり、

データの塊、塊だね、これが意識である。これ以上の要素は存在しないし、また、これ以下の要素も存在しない。

そして、この五蘊を完璧に浄化し尽くすこと。そして、それを最終的には光に変えてしまい、そのいろんなエレメントの光を一つの光へと変換させ、そして大いなる広がりと、大いなる深みをつくり上げること。これが、オウム真理教で説くマハー・ニルヴァーナへ至る道である。

### ◉最終地点までの途上には

当然、その途中の段階で、形ある美しい世界への没入、あるいは神秘的力の獲得、あるいは身体が神々に変化する、といったいろいろな体験、およびいろいろな心の状態を経験する。

例えば、私達が死を経験し、その死の中でまた死を経験するといったような教え、これはまあ、最終地点に到達すれば生と死というものはすべて見えるわけだが、この二重の死、三重の死の表現は、皆さんもよく知っている『滅亡の日』（オウム出版）、あるいはキリスト教の『ヨハネの黙示録』ね、こういうものにうたわれている。つまり、仏教観とこの例えば『ヨハネの黙示録』とは、相反するものではなく、仏教的修行の途上の一部分にすぎないということになる。

あるいは、ヨーガ的なものの考え方で、創造・維持・破壊といわれるもの、これも同じで、これはこの欲界、あるいは色界、つまり形状の世界、美しい形の世界、この世界が創造され、維持

TEAM PERSON'S
BAND CHAMPIONSHIP
PERSON'S RACING TEAM
1986 ENDURANCE

され、破壊されるというものすべてを経験していれば、これもまた、真理の流れの一つであるということに気付くであろう。そして当然、その世界の神々の中には、アラーの神も登場すれば、あるいはヤハーの神も登場すると。あるいは、ヴィシュヌ神も登場すれば、シヴァ大神も登場するという形になる。あるいは、この欲界や色界へ存在している無数の仏陀、この無数の仏陀も登場することになると。そして、これらの形状の持ち主、魂は、すべて真理に到達するための一つのポイントにすぎない。というと、シヴァ大神も一つのポイントかということになる。

シヴァ大神には、無数の法身・報身・変化身・本性身・金剛身といった、この欲界・色界・無色界、あるいはマハー・ニルヴァーナに至る世界において、無数の形ある現われがあります。よって、途上であるとも言えるし、最終地点でもあるということだね。そして、それは何を隠そう、あなた方が修行し、四つの預流支を実践することによって、変化していく過程であるとも言えます。つまり、あなた方の最終地点にあるもの、あなた方の最も奥にある如来像、あるいは仏性といわれてるもの、ここへ到達する途上のいろいろな形、あるいはいろいろな五蘊の現われ、これが神々であり、あるいは菩薩であり、あるいは仏陀であり、あるいはシヴァ大神の法身・報身・変化身・本性身・金剛身であると言えるわけです。

## ◉三宝帰依、その本質は一つ

そして、そのための実践は何かというと、それは四つの預流支です。では、なぜ四つの預流支なのかと。まず、四つの預流支の第一は、如来に対する帰依、仏陀に対する帰依、あるいはグルに対する帰依を説きます。これは何を表わしてるかというと、私達のまず最終地点に対する、つまりあなた方の心の到達しなければならない、最終地点に対する帰依をしなさいよと。あなた方は、現実の生活によって、いろいろなものを見えなくされ、聞こえなくされている。だから、既にそれを体現した者、それを体現した者に対して帰依をすることにより、あなた方の本質、心の本性とそれをダブらせ、帰依をしなさいよと。これが第一の帰依である。

次は第二の帰依、真理に対する帰依であると。この真理に対する帰依とは何かというと、あなた方がその地点へ到達するためには、多くの教え、多くの実践が必要です。その多くの教え、多くの実践を説き明かしたもの、これを真理といいます。もちろん、この教え、この実践をなすことにより、先程述べた如来の本性へと到達します。そして、それはイコール、シヴァ大神ということになります。よって、この第二番目の真理に対する帰依というものは、あなた方を最終地点へ導く乗り物に対する帰依ということになるでしょう。では、第三番目のサンガに対する帰依、これは漢語で僧伽と訳されまして、この僧伽の僧を取って、仏・法・僧の僧となりました。実際は、だから正しくない。実際はサンガと言うべきです。サンガというのは何かというと、真理を

実践している者の集いに対する帰依と。真理を実践してる者、真理を実践してる人達の集まりに対する帰依ということになります。この意味は、ちょうど如来の本性を最終地点だとするならば、その途中の多くの駅――つまり、あなた方の今の出発点から、多くの段階がそこで存在するわけだけど――その実践途上の人達が経験している、つまりあなた方の目的地に至る途上に対する帰依と言うことができます。

つまり、三宝帰依とは何かというと、本質は一つである。それは、如来の本性に対する、あるいはシヴァ大神に対する帰依であると。そして、そこへ到達する乗り物という真理、あるいはそこへ到達しようとしている多くのポイントを今ね、実践している人達に対する帰依を培うことにより、今から如来の本性に到達するまでの道を一本化すると。そして、目先を固めることにより、どんなに遠い道のりでも必ず到達するのと同じように、目先を固めることにより、必ずその本性へと到達しますよという教え、これが仏教であり、真理です。そして、第一の預流支は、この三宝に対する帰依です。

### ◉学び、考え、実践する

そして、この三宝に対する帰依をなしたならば、次はどのように学び、どのように考え、どのように実践するかということが、四つの預流支の残り三つということになります。

まず、どのように何を学ぶのかと。これについては、皆さんもよく知ってるとおり、仏典、仏典を基に説かれた教え、あるいはそれを現代版に変えられたグルの教え、これを聴き、読み、ね、これが二番目であると。なぜここで聴き、読みで止めるのかというと、多くの教義を聴き、読まないと自己の生まれてから今までの観念、つまり三悪趣（さんあくしゅ）へ至るための観念によって、法をねじ曲げてしまいます。よって、まずはデータの入れ換えという意味において、グルの教え、あるいは経典の教えというものを何度も何度も聴く必要があります。

よくね、優秀な人に過ちが多い。それは、パッと記憶してしまうから、もうそれをいかにも自分のものになったという錯覚を起こすわけだね。ところが、実際深い意識というのは、もう小さいときから、テレビ・雑誌・新聞、あるいは友人関係等で大量のデータを入れていますから、心の奥底のデータというものは濁ってると。そして、それと同じレベルで一回教義を聴き、あるいは教義を読んだだけでは、あまり意味をなさないんだと。何度も何度も読み、聴くと。それで、データを入れ換えると。

次に第三番目の預流支。これは、そのデータを聴き、あるいは読み、それに基づいて考えると。この考えるとは何かというと、例えば自己の苦しみについて考えると。あるいは、周りの苦しみについて考えると。よく皆さんは、こういう質問を私にします。

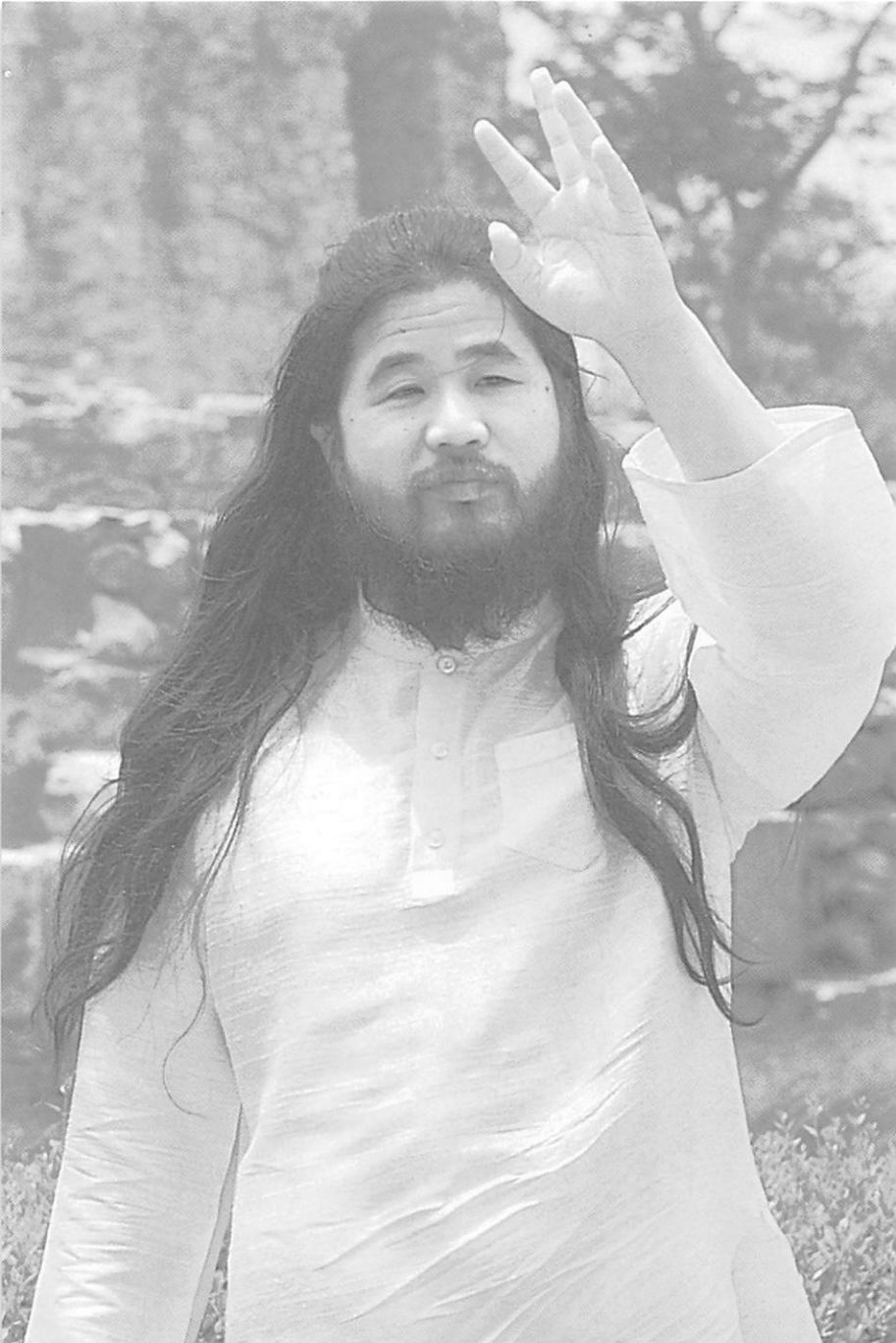
「周りが理解しないんだけど、どうしたらいいでしょうか。」

と。しかし、私が思うには、周りが理解しないのではなく、あなた方が努力しないがゆえに、まだ教義が入ってないんだと。つまり、一番目の説法を聴き、それから読むという段階が少ないがために、周りの言葉、あるいは感情に翻弄されてしまうと。本来凡夫、あるいは真理に到達できない外道というものは、哀れむべき存在である。なぜならば、心の本性へ到達できないからである。そこを考え、しっかりと押さえ、そして真理を学び、次に考えると。そして、諸現象について考えるならば、すべての苦しみは必ず解決できる問題であると。解決できない問題は、この世に存在しないんだということが理解できるでしょう。そして第四番目、その法の実践を行なうと。

ということは、この四つの預流支というものは、まず自己の道筋を第一の預流支で決めると。そして、第二の預流支で学び、第三の預流支でその道筋に沿って考え、第四番目の預流支によって実践すると。ということは、あなた方の五蘊は、この人間に生まれ、今まで三悪趣のデータがたくさん詰まってたこの五蘊は、徐々に徐々に変化し、そして人間へと変化し、憤怒天へと変化し、戯忘天へと変化し、そして色界の天界へと変化し、無色界の天界へと変化し、最終的にはマハー・ニルヴァーナへと到達するということになるわけです。

### ◉残された日々をどう生きるか

仏典も前期仏典では、あまり神変、つまり神通が現わされていません。しかし、後期仏典にお



いては、多くの神変、つまり神通が現わされています。これは何かというと、例えば一年修行した人と、三年修行した人、あるいは五年修行した人、あるいは七十年修行した人とでは、これは五蘊の形成している要素が全く違います。例えば煩悩ゼロで、神々の言葉を語り、神々の心を持ち、あるいは神々の行為をなす者、この者の周りは、当然光に満つるでしょうし、多くの神変を現わすこととなるはずです。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。どんなに人間が頑張ったとしても、人生はわずか八十年である。この八十年の人生を、既に私達は二十年、三十年、四十年とつぶしている。残りの六十年、五十年、四十年をどう生きるか。そして、三悪趣へ転生するのか、あるいは、人間、憤怒天、戯忘天といった高い世界へ転生し、楽を長い間にわたって享受するのか、これはあなた方が選択する道だと言えるでしょう。

もう一つ別の比喩を使うならば、ちょうどあなた方が欲界のバルドーに入ったとき、つまりもうかなり後半だね、夜摩神が登場します。そして、夜摩の神々はあなた方を裁くわけだけど、そこで、白い石と黒い石を用意し、そして、それを秤にかけます。それは、あなた方の善業と悪業を量る段階です。これを考えると、おかしいなと考えるかもしれない。しかし、ちっともおかしくない。なぜならば、私達の五蘊というものは、先程も述べたとおり、悪業と善業の集積だからである。この悪業と善業の集積ということは、あなた方の死後、地元素から空元素の分解に至る

過程において、すべていったんアーカシック・レコード、コーザルの世界へと還元されます。そして、そのデータによって裁かれるわけです。

よって、真剣に正しく生きることこそ、皆さんにとって最も得な生き方と言わざるを得ません。

# 第三話　天へ行く者、悪趣へ行く者

九一年二月三日　於・横浜支部

**◉求め続けた法が今……**

私達が欲六界の構成を理解することは、何をなせばどうなるのかという、つまり原因と結果の正確な把握につながるわけである。この正確な把握をしない限り、私達は正しくない実践、つまり邪明見解の実践を行なうこととなる。まず私達が、この三界をクリアに理解するためには、身・口・意の浄化が必要である。この身・口・意の浄化とは何かというと、まず土台としてなされる布施、そして持戒の徹底に尽きると。その上に、カルマを落とされる忍辱、そしてその浄化された器をより一層浄化する二正勤二正断。この四つのプロセスをしっかりと通過した者が、正確に瞑想に入れば、サマディに導かれ、そして智慧へと到達するのである。

この智慧によって得た三界の経験、この三界の経験をもとにいろいろな仏典が説かれているわけである。ということは、この仏典の内容が大ざっぱに書かれている理由は、一つ一つを、例えば西洋の神秘学者、あるいは西洋の哲学者、あるいは西洋の霊能者といった者達が書いている細かな描写をするならば、あまりにも膨大になり過ぎるがために、簡単に描写されているのである。

これはどういうことかというと、つまりベースになっている基本的世界観の違い――基本的世界観の違いとは、西洋的な世界観がその東洋的世界観の一部であるということを踏まえるならば、よくわかるはずである――つまり、小さな器の内容を細かく説明して大量の本を出している、あるいは大量の表現をしているのが西洋的な神秘世界の内容であり、あまりにも大きいがためにその説明を簡単に述べている、それでいても膨大なのが要するに仏教観ということになる。

今私は、やっと天界について説き出した。この天界について説き出した理由というのは、前回の東京の説法でも述べたとおり、多くの疑問が解けてきてるからである。そしてこの多くの疑問が解けてきている背景には、ここにいる信徒の皆さんがこの無明の日本の中にあって真理を求め、一生懸命功徳を積んでらっしゃると。その功徳に対しては、しっかりとしたサットヴァの答えを提供することによって、つまり皆さんの求めている世界観を提供することによって、カルマの法則というものは成立するということを理解していただければよくわかるはずである。

ということは、今やっと天界の話が始まったわけだから、この中のまた一部の方が一生懸命修行なさり、そしてその光が広大となれば、私の説く法も当然色界のもっと高いレベルの話、そして無色界の高いレベルの話を詳細に説くこととなろう。それが私の役目だからなのである。この天界の話のポイントは何をなせばどの天界へ生まれ変わるか、何をなせばあるいは三悪趣へ生まれ変わるかということなのである。

## ◉カルマはこのようにして返る

まず、その前にお話をしなければならないことがある。それはカルマの理法というものは、自作でないということなのである。自作とは何かというと、自分のなした行為、その行為がダイレクトに結果を招くのではないということである。その行為の条件、そして対象、この三つが絡み合って、初めて正確な結果を招くのである。

これはどういうことかというと、例えば凹鏡、あるいは凸鏡という鏡二枚を想像していただきたい。そしてもう一枚は平面鏡である。三枚だね、だから。凹鏡というのは、このような形をなしていて自分自身を映すならば小さく見えると。凸鏡というのは大きく映ると。そして平面鏡というのは、まあ、大体身体の二倍映し出せると一般的にいわれてるわけだけど、これをちょっとインチキをして、一対一の関係というふうに考えましょう。この凹鏡、平面鏡、凸鏡、この三者の、この三つの鏡の意味合いは何かというと、行為をなした対象、そして行為をなす者ということになる。そして、これに距離、あるいは光の度合等が加わって、カルマの返りというものがはっきりと現われてくるわけである。それはどういうことかというと、例えば同じ人物が、その三枚の鏡の上に立ったとして、ある者は大きく映り、ある者は小さく映り、ある者は同じに映るということなのである。つまり、行為としてはその鏡から等距離に、つまり同じ距離に立っているにすぎないと。しかし、結果は違ってくると。

これは例えば、大変憎しみの強い人がいたとして、その人を思いっ切り殴ったと。もう一人は無智のためにボーッとしてる人がいたとして、思いっ切り殴ったと。もう一人は修行者でカルマを落とされたいと思っている人がいたとして、思いっ切り殴ったと。この三者においては、三者のカルマの返り方があるということなのである。

例えば、第一の例の憎しみの強い人は、殴ったがために身のカルマだけではなくて、相手の憎しみという強烈なカルマを受けてしまう。第二のパターンは、殴ったがためにその殴られた、殴ったというカルマだけではなく相手の無智を受けることになる。第三のパターンは、殴ったがために殴ったという行為と同時に殴られた対象が、もし「ああ、カルマ落とされてありがとうございました」という思念をしたならば、それと同じように、殴られることによって、自分自身の修行が進むというカルマを積むことになる。この三者は三様で違うということである。

これは、例えば善業である布施に対しても同じである。相手の四無量心が広大であれば、その対象に対して布施をなせば、当然それは広大な形で返ってくる。あるいは相手が大変商売のうまい人であれば、当然商売がうまくなるという形で返ってくる。相手が知性が高ければ、当然知性が高いという形で返ってくる。相手が解脱に向かっていれば、当然解脱に向かうという形で向かってくる。しかし、なした布施、この布施の行為は同じであるということである。

このような形で現象を分析するならば、なぜ同じ行為を行なっているのに、結果が違うのかと

いうことが如実にわかるはずである。これを土台として経典を読んでいくならば、例えば『布施品』という経典があるわけだけど、その内容がよく理解できるはずである。そして、この一つ一つの現象を正確に分析するならば、何を持てば第一天界へ生まれ変わり、何をなせば第二天界へ生まれ変わり、何をなせば第三天界へ生まれ変わり、どういう修行をなせば第四天界へ生まれ変わり、いかに成就すれば第五天界へ生まれ変わりということが理解できるはずである。そして、功徳と瞑想の修習によって、第六天界へ生まれ変わるんだということも理解できるはずである。

### ◉天へ赴く

まず、この第一天界の条件は、ある意味で現世的な功徳というものが優位になってくる。その第一は、例えば会社、あるいは組織、あるいは国を堅固に統治し、すべての人に幸福を与えようと願い、努力し続けた者の行く世界。この第一天界は例えば日本、例えばアメリカ、例えばイギリス、例えば中国といった一つ一つの国に一人一人担当官が存在している。担当神が存在しているとと。そしてその国が順調に運べるように、運営ができるようにと統治をしている天界である。第一天界の第二番目は、これは、すべての魂が物理的にしっかりと成長するようにということを管理している天界である。例えば今のように、木が切られ、砂漠化すると。あるいは生き物が大量に殺されるといったのは、この第一天界の成長を担当する神々にとっては大変な悲しみであ

り、怒りを招くことになる。そして、もし生き物を慈しみ、殺生を離れ、修行し続けるならば、この四大天王（しだいてんのう）の一人として生まれ変わることができるのである。第一天界の第三番目、これは天空を司っている天界である。ここは、龍を支配している。そして例えば五穀豊饒（ごこくほうにょう）の祭りを行なうとか、あるいはすべての魂のために、例えば気候が平静であってほしいと願うとか、あるいは実際に環境汚染の問題を解決するとか、そういうようなことをなす人、この人が来世第一天界のこの四大天王に生まれ変わるのである。そして、第一天界の四番目、これは名医が、特に外科的な名医が転生する世界である。この世界は、庶民がケガをしないように、外傷に遭わないようにということを管轄している天界である。もちろん、これは『パーヤーシ経』にも詳しく載っているが、布施、そして持戒の厳守、この二つがこの天界で優位となる条件となる。

第二天界は有能神（ゆうのうしん）の天界である。この有能神の天界とは何かというと、もともと知性の高い人が、その知性を生かし、大いに救済に役立った場合、行ける天界である。例えば、商売のうまい人がその商売を利用して得た利益を布施すると、布施することによって救済計画が大いに進むと。あるいは、例えば何らかの特殊な技能を持っている人が、その技能を提供すると。つまり奉仕活動に入ると。それによって救済活動が成功すると。この、例えば第二番目の例は、絵をかく人が例えば救済計画に参加し、マンダラをかき、そのマンダラによって多くの人を救済したと。このような場合行く世界、これが第二天界なのである。

そして、第三天界は、これは――私は、この世界から上はちょっと若干詳しいんだけど――第三天界は、まず、ここへ生まれ変わった者は体が切れてもすぐ元に戻るとか、そういう決められた生命の間は死なない天界である。あるいは傷付いても、その傷が即座に癒えてしまうという特殊な天界なのである。そして、この天界は空を飛ぶことが自在であり、目的に対しては瞬時に移動できるという天界である。で、ここの天界へ生まれ変わるためには、まず、真理、つまり死、生、この生と死、この生と死を超越する教えに多くの者を導く。例えば、今横浜では、数人、何人も導いてらっしゃる方がいるが、こういう人達は第三天界のカルマをつくっていると言える。これはなぜかというと、この現世的な価値ではなく、死後の価値というものを提供することになるからである。そして、ここの王に生まれ変わるためには、ポアに熟達した魂が王として生まれ変わることになる。つまり、この第三天界は完全に死と生を知り尽くしてる者、あるいはその死に対して、奉仕をなしてる者、この死に対して奉仕をなしてるとはどういうことかというと、人間の短い生だけではなく、長い長い死に対して、そして、次の生を決定する死に対して、しっかりと功徳を積んでる者の行く世界、これが第三天界なのである。

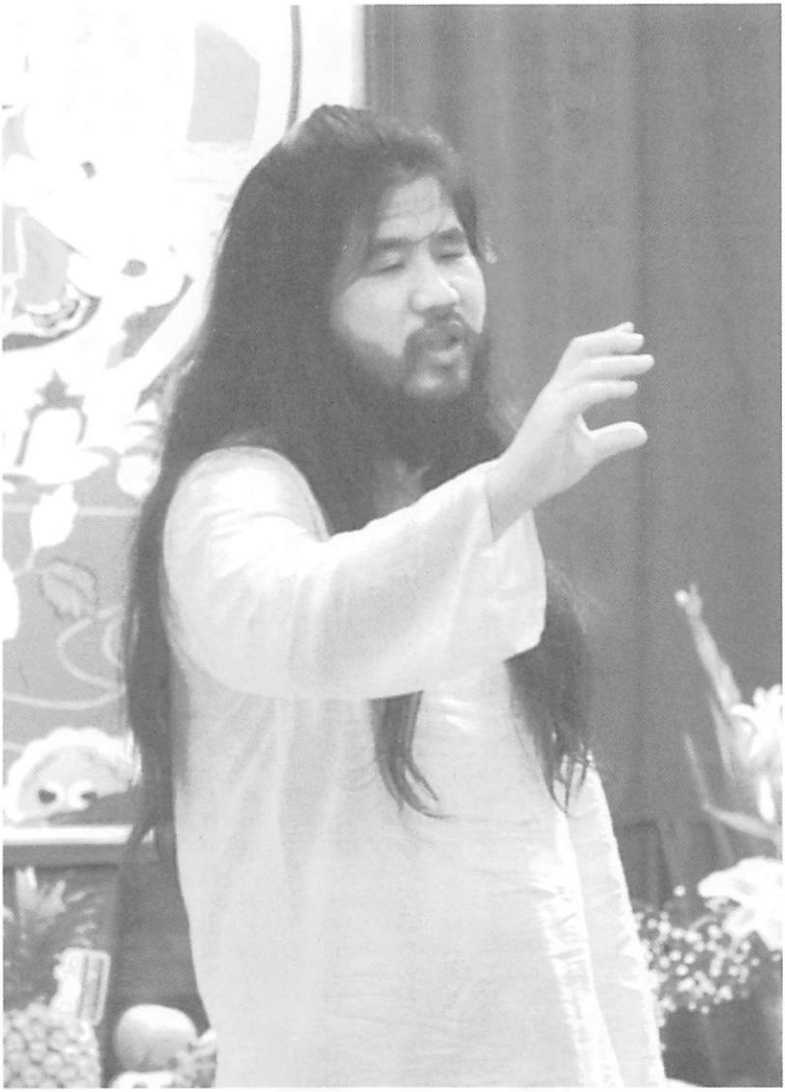
では、第四天界、この第四天界は除冷淡天（じょれいたんてん）といわれているわけだが、この第四天界とはどういう天界だろうかと。この天界はまず、嫌悪を滅尽し、博愛の心を持っている者。慈愛の心を持っている者。あるいは貪（むさぼ）りを離れ、布施の心を持ってる者。そして、この現世的な価値ではなく、

しっかりと真理に作意し、教学をしている者。この三つの条件を備えた者が行く世界。しかも一、二、三を同時に内在している人。この人が行く世界である。例えば仏典では、アナータピンディカ長者や、あるいはマッリカーという王妃ね——これはパセーナディー王の王妃ですが——こういう方々が行った世界である。そしてここにはマイトレーヤ如来が存在し、二千五百年前の仏陀釈迦牟尼の弟子達が多く存在している。そして、ここはまた、一来果の魂の行く世界であるといわれています。

ということは、大体見当がついてきたと。第一天界は、ベーシックな生き方をしっかり行なえばいいんだなと。つまり観念的な生き方を行なえばいいんだなと。第二天界へ至るためには、とにかく自分の持っている才能をフルに生かして、救済活動の手伝いをすればいいんだなと。第三天界へ至るためにはとにかく導き、そして真理を、死に対してね、しっかりと理解することが必要なんだなと。第四天界に生まれ変わるためには、四無量心の実践が必要なんだなということになる。

そして、第五天界はこれは創造満足天といわれていて、いろいろな物を自分で作り出してそこで満足する世界である。ここはまあ一種の神通の世界であると。しかし、ここでつくり出される世界は煩悩である。

では、第六天界はどうかというと、その煩悩に加えて功徳を有する魂が行く世界である。つま



りどういうことかというと、他人が、あるいは他の魂が自分を満足させてくれると。その大きな功徳と同時に、その人も、あるいは周りの人も瞑想の力があって、そしてその神秘的な力によって満足させてくれると。この世界が第六天界である。

そして、この上にある神聖天、この神聖天は——まあ、今までオウム真理教の出版物では梵天といわれていた、この梵天を、ブラフマンを正確に訳すならば神聖、神の聖の天ということになります。この天界へ至るためには、まず煩悩を離れ、そしてひたすら瞑想を修習すると。これは仏教徒でなくても行ける、真理の実践者でなくても行ける世界である。煩悩さえなければ、行ける世界であると。

そして、これらの世界観、つまり、どの世界に行くためにはどういう修行が必要である、どの世界に生まれ変わるためには何々が必要であるということをしっかりと理解して修行を続けるならば、それを思念し続けるならば、必ずや来世その世界へ生まれ変わるはずである。それはちょうど、例えばスカイラインを買うために金額を知り、そしてその金額のためにひたすら努力をし、そしてそれを購入する。あるいは、アメリカ旅行するために、ひたすらまずアルファベットから学び、そして英会話のテープを買い込み、一生懸命英会話の練習をし、アメリカへ行き成功するというのと同じである。つまり、すべては原因があり結果があるわけだから、何を努力すればいいかをしっかりと把握すればよろしい。

## ◉落下！　地獄・餓鬼・動物への転生

では、そのための土台は何かというと、それは布施、そして持戒なのである。ではその布施・持戒を確実にしていくためには何をなせばいいのかというと、それは四つの預流支なのである。では、この四つの預流支をなさなければどうなるのかというと、それは三悪趣へ落ちるのであるということである。

なぜならば、地獄は完全に自と他の区別のはっきりした空間である。例えば、ここに一つ理解していただきたいことがある。それは、私達がお風呂に入ると。そして三〇度から、まあ、四〇度ぐらいまで、お湯は気持ちいいと感じると。しかし、二〇度、一〇度になると冷たいと感じると。もちろん、五度、三度となると大変冷たいと感じ、入るのが苦痛である。あるいは、四二、三度まではいいかもしれないが、四五度、五〇、六〇となるともうそれは大変な苦痛であると。これは私達のカルマが、ちょうど三〇度から四〇度の間に存在してるということを意味している。

ところがもし、嫌悪の強い人がいたらどうなるだろうかと。熱い、寒いという感覚が強ければ、その三〇度から四〇度の空間が、例えば三五度から三八度の空間へと狭められてしまう。すると、三〇度、三一度、三二度といった快適な温度もその魂にとっては大変な苦痛になる。地獄はこれと同じなのである。嫌悪の心を修習し続けるがために、その世界へ落ちると。そうするとその激烈な苦しみというのは、その人の嫌悪によって増大された激烈な苦しみなのである。よって、こ

の嫌悪を滅するということは、たとえ地獄へ転生してもその苦しみが軽減されると。あるいは、地獄へ転生しないカルマをつくることになる。

貪りも同じである、これは。この貪りというものはとめどもない。例えば、しっかりと瞑想してれば一日一食で、しかもそんなに量を多く取らなくても体は安定する。しかし、貪りの心があるとどんどん食べ、プラーナをそこに消耗させると。あるいは、物をどんどん集め、心をどんどんどんどん貪りの心に支配させてしまうと。ということは、例えば餓鬼の世界に物がないのかというと、そうではなくて若干はあるのである。しかし、そのある物質に対して心が満足せず、それより、例えば量を求め、あるいは質を求めるがゆえに、そこから餓鬼の世界というのは苦しむことになっているのである。

動物の無智も同じである。例えば、わざわざ天敵のいる、つまり自分自身の身体を傷付けられる対象の側へ行き、恐怖し、おびえ、逃げると。あるいは、そこで殺されてしまうと。もし、動物が無智でなければ、そういう恐怖のないところにまずしっかりと様子を見、例えば上から様子を見、下から様子を見、そして獲物を捕りに行き、そしてまた自分の空間へと帰れば恐怖はないはずである。ところが動物は無智なるがゆえに、その対象をしっかりと認識せず、そしてその苦しみの空間へと身体を運んでいってしまい、そしてその動物連鎖の恐怖に苦しむのである。

## ◉五蘊を神々の状態に

これらのことを理解すれば、私達が嫌悪・貪り・無智から解放されることは、ひいては自分自身が楽になることであり、そして自分自身が幸福になることであることが理解できるはずである。このような形で地獄・餓鬼・動物を知り、あるいは天を知ることによって、この人間の生き方が決定されてくる。そして、この人間の生き方の最も理想的な生き方は、四つの預流支を背景として生きることである。四つの預流支を土台として生きることである。では、この四つの預流支とは何であろうか。

これは根本的なグル、あるいは仏陀、シヴァ大神に対して絶対的な信を持つこと。第二番目は真理に対して絶対的な信を持つこと。第三はサンガに対して、つまりオウム真理教では教団に対して信を持つこと。これが第一グループの預流支である。そして、第二グループの預流支は、多学の弟子になることである。多学の弟子になることとは、例えば送られてくる『マハーヤーナ』、『真理の芽』、説法テープ、こういう説法会等を利用し、何度も何度も記憶修習をすること、そしてその記憶がパッと出てくるまで努力すること。これが第二グループの預流支である。そして、第三グループの預流支は何かというと、これはその記憶修習したものにのっとり思索をすることである。これが第三グループの預流支である。そして、第四グループの預流支は、その思索した結果、身・口・意にのっとり実践することである。

ということは、この第二グループの記憶修習、この多学というものは、正しい見解を身につけるということになる。つまり、聖なる八支の実践の中の第一の道ということになる。そして、第三のそれに基づき考えるということは、正思惟、つまり正しく思索をするということになる。これは聖なる八支の実践の中の第二番目になる。そしてそれにのっとり身の行ないを統御し、口の行ないを統御し、心の働きを統御するということは、聖なる八支の正語、そして正行為、正生活、そして正精進、正記憶修習、そして最後の正サマディということを意味してるのである。ということは、この四つの預流支は、聖なる八支の実践の、もっともっとそれをね、コンパクトにしたものなのである。

このような形で考えれば、何をなせば天へ行き、何をなせば悪趣へ生まれ変わるのか、何をなせば幸福になり、何をなせば不幸になるのかが一目瞭然である。そして、時間をかけ、私達のこの五蘊を少しずつ少しずつ神々の状態に変えていくこと、これが修行なのである。

私も皆さんと同じようにできるだけ長く生き、この五蘊をより一層完全な形にしたいと考えています。

ついに手に入れた本当の幸福

# 四預流支体験談集

## ❖マイトレーヤ❖

性欲について思索を始めた。その瞬間だった。性欲がズバッと落ちた。

続けてプライドについて瞑想した。すると、思索を始めてすぐに、プライドに対応するチャクラのあたりに何かがチカッと光って消滅した。そして、強いエネルギーが昇り、目の前が光で満たされていった。

「煩悩が瞬間的に滅するとは、このことか！」

それまで、どうしても到達できなかったステージだった。極厳修行でも、その後の修行でも、一回も経験することができなかった。前回の極厳修行でクンダリニー・ヨーガを成就したが、それは修行が完成したというわけではない。特に支部での救済活動など、他人の影響を強く受ける環境では、煩悩を抑え切れずに何度となく振り回され、自分が自分の思うようにならず苦しみ続けてきた。

しかし、このとき、

「煩悩は本当に滅することができるんだな。」

と、私は実感した。それは、私が修行を始めてからずっと求め続け、初めて体験した〝本当の喜び〟だった。煩悩を満たすことによっては絶対に得られない、自分のすべてが喜んでいる状態だった。

これは、私が一九九〇年十二月、ヒマラヤで集中的な瞑想修行を行なった際、体験したことを教団機関誌『マハーヤーナ』二九号から引用したものです。この体験は、私にとって大変素晴らしいものでしたが、もちろん一朝一夕に得られたものではなく、一九八七年にオウム真理教に出家して以来、約三年半にわたる出家修行によって、ようやく到達したものでした。

さて、自分の修行の過程を振り返ると、それが四預流支（しよるし）の実践に他ならなかったことを強く感じます。実際、私が四預流支という言葉を知ったのは、少なくともヒマラヤの修行より後のことですが、それまでの修行の内容は、まさに四預流支の実践の繰り返しであったのです。私は、これに気付いたとき、尊師が（原始仏教の経典に表わされている教義の）基本的原則は四つの預流支であると説法されているように、四預流支が修行を進めるために欠かせないものであることを実感したのでした。

尊師のご説法からわかるように、四預流支とは、

①仏・法・僧の三宝に対して帰依をする
②その教えを学ぶ
③教えに基づいて思索する
④実践する

という四つの修行をなすことを意味します。

そして、私が信徒の方々および後輩の出家修行者を指導する際に感じることは、帰依し、教えを学ぶということは、比較的わかりやすいものの、教えに基づいて思索し、実践するということが具体的に何であるかを理解することはなかなか難しいのではないかということです。

そこで、この本を読まれている修行者の皆さん、もしくは、これから修行をやってみたいとお考えになっている皆さんのために、この点について、自分の体験も振り返りながら、少しお話しさせていただきたいと思います。

まず、教えというものは、公式であるということを理解する必要があります。ですから、個々の具体的な例に応用されなくてはならないのです。

例えば、「この世は苦であり、苦は生起し、苦は滅尽することができ、滅尽する道がある」という「四つの絶対的真理」と呼ばれる教えがあります。修行者がやらなくてはいけないことは、

この公式をよく記憶した後、自分や他人に当てはめて具体的に考えることなのです。

例えば、「なぜ、この世は苦なんだろうか」「どのように苦は生起するのだろうか」ということを自分や周りの人のケースに当てはめて、自分や周りの人の経験をもとに具体的に考えるわけです。

こうすることによって、教えが単なる抽象的な公式ではなく、あなたの心に深く浸透する叡智（えいち）へと消化されていき、その結果、修行意欲も強くなるという効果があります。

また、教えのほとんどは、自分の従来の考え方、煩悩や観念にとらわれた考え方とぶつかり合うものですから、教えに対する疑問が生じる場合がありますが、思索を深めることによって、やはり、教えの方が正しいということを深く実感するようになります。

この点について、私が体験したことが、先に引用した『マハーヤーナ』二九号に掲載されていますので、少し引用させていただきます。

私の煩悩は、修行を妨げるために様々な疑問を投げかけてきた。修行の意義を支える根本的な世界観、例えば、魂の存在、転生の存在、欲六界の存在、カルマの存在などに対する疑問、自分の神秘体験が幻影ではないかという疑問、在家で天界を目指す修行に妥協しようという誘惑……などが心に浮いてきた。私の心は揺さぶられた。

そこで、私は、導師の本を読み直すことに加え、オウムの出版物に載っている大師方の体験、サキャ神賢やチベット仏教の経典、欧米での信頼できる輪廻転生の研究などに注目した。貴重な体験をした大師から、詳しい話を聞いた。関連する経典、出版物にも目を通した。そうしながら、疑問に対する回答を見つけるため、自分の体験の意味合い、現世の意味合い、修行の意味合いなどを考えていった。

これらの思索は、ある時期に集中して行なったのではなく、煩悩によって修行に対する疑問が強くなる度に考えたことだ。何カ月間も同じところで答えが出ずに、苦しんだこともあった。しかし、一つ一つの疑問が解決するごとに、修行はするべきだという気持ちが、疑問を持つ心よりも着実に強くなっていった。

修行を通じての世界観は、自分の体験だけではなく、信頼できる事実や他人の修行体験を目にするうちに、自分の心の中で次第に確固たるものとなっていった。

現世での生活をはじめとする煩悩的な生き方についても、そのはかなさ、苦しみといったものを感じるようになっていった。しかし、これには特に長い時間がかかった。多分出家前にあまり苦しまなかったためだろう。

ここで役に立ったのが、前に述べたオウムでの様々な苦しみ、煩悩によって生じた苦しみの体験だった。そして、その体験の中で培ってきた修行における粘り強さだった。もちろん本に

書いてある教義も役立ったが、自分自身の苦しみの体験は何といっても強いインパクトを伴っていた。

このようなプロセスを経験して、徐々に尊師の教えに確信を深めていった私は、厳しい修行を何とか続けることができ、その結果、最初に述べたヒマラヤでの瞑想修行において、煩悩を滅尽するという高度な体験をすることができたのでした。

また、思索を深めるということは、別の面でも恩恵を与えてくれます。つまり、教えの意味合いを深く理解することができ、他の人に教えを説くことが容易になるのです。教えを単に記憶するだけでは、字面の理解にとどまってしまいますが、教えのエッセンスを理解していれば、ケースバイケースで表現を変えながら、その人に合った話をして、真理に導くことができるのです。

尊師がご説法の中で、

「次に第三番目の預流支。これは、そのデータを聴き、あるいは読み、それに基づいて考えると。この考えるとは何かというと、例えば自己の苦しみについて考えると。あるいは、周りの苦しみについて考えると。よく皆さんは、こういう質問を私にします。

『周りが理解しないんだけど、どうしたらいいでしょうか。』

と。しかし、私が思うには、周りが理解しないのではなく、あなた方が努力しないがゆえに、ま

だ教義が入ってないんだと。」

と言われているように、他に的確に法を説くには、思索が前提となります。

私自身も、思索を進めることによって、支部で信徒さんの応対をすることが容易になったという体験をしました。その点も、『マハーヤーナ』に書かれていますので、引用させていただきます。

支部に来る人だけではなく、各地方を回ったり、信徒さんの自宅で「集い」を開いたりした。ほとんどオウムを知らない人に入信の案内をすることも多かった。このとき、修行の意味合いについて繰り返し思索した経験が、修行の世界に懐疑的な一般の人を説得していくのに非常に役立った。

こうして大阪支部で巡り合った人の中には、今出家して一生懸命修行している人もいる。もちろん、その人達はもともとオウムとの縁があったのかもしれないが、何か自分の苦労が報われたような気がする。苦しむことがあっても、その経験が、将来同じ苦しみを持つ人にとって役立つかもしれないということを考えると、何か元気が出てくる感じがした。

他の人にうまく法を説けるということは、その人にとって大変な功徳になり、高いステージに導かれる要因となる重要なものです。この点からしても、思索は非常に重要なものであると言う

ことができます。

それでは、どうしたら良い思索ができるのでしょうか。私の考えでは、それには二つの条件があるのではないかと思います。

第一に、教えを十分に記憶していることです。教えという公式を当てはめようにも、公式自体があやふやでは、応用した結果に誤りが出てきてしまいます。また、記憶力がいい人も、繰り返し繰り返し記憶（記憶修習）し、どんなときでもパッと教えが応用できる状態にしておかなければなりません。特に、瞑想によって潜在意識に入っていきますから、繰り返し教えのデータをインプットして、その心の深い部分にまで根付かせておく必要があります。

第二に、集中力が必要であるということが言えます。教えを自分の体験等に当てはめて何らかの結果を得るには、相当の間集中し続ける必要があります。一つ一つの体験を、一つ一つの事実を丹念に分析し、さらに関連する事柄にも思索を発展させられるからです。

この集中がうまくいくと、あるときズバッと瞬間的に重要な認識が得られたり、意識が変化するという現象が起こりますが、これはチベット密教では、ポアと呼ばれています。最初に述べた私の体験もポアの体験です。

こうして、教えを十分に記憶し、集中して思索するならば、前に述べたように、教えが自分の心に根付き、疑問が解消され、教えの精髄が理解できるようになります。そして、その結果、教

えの実践に対する障害がなくなり、実践の意欲が高まるのです。そして、よい実践はよい結果、すなわち精神的・神秘的体験に結び付き、ひいては皆さんの帰依を強めることになるでしょう。そして、それは、より貪欲に教えを学び、思索し、実践するという好循環を形成していきます。

この意味では、四預流支とは四つの独立した修行ではなく、連結した修行であるという方が適当であり、教えに基づく思索は、他の三つの修行に深くかかわっているのです。

最後に、真理への到達を志す皆さんが、しっかりと四預流支の実践を行なうことによって、速やかに、最終の目的地に導かれることを願い、その旨を説かれている尊師の説法を引用したいと思います。

「そして、その基本的な原則は、皆さんもよく知っている四つの預流支である。この四つの預流支は、私達を最終的には、マハー・ニルヴァーナへと導いてくれるということになっている。このマハー・ニルヴァーナへ最終的に導いてくれるということはどういうことかというと、この四つの預流支が、結局、私達を形成している五蘊を少しずつ少しずつ神々の身体に変えていき、そして、その実体のない心の状態、空に到達させ、その空の広がり、あるいは深さが最終地点へと到達し、すべてを包含し、そしてマハー・ニルヴァーナへと至るという教えなのである。これが仏教である。」

（九一年四月現在　二十八歳）

## ❖ ガヴァンパティ ❖

昔、私は、実験動物を扱う仕事をしていました。そして、実際に自分の手によって多くの生き物を殺生するという最も悪い地獄に至るカルマをどんどん積んでいました。これは、私が、生命の尊さというものを考えなくなるほど無智に覆われていたからでしょう。

やはり、カルマは返ってくるものです。どんどん心が殺伐となり、目先の楽しみを追い求めるようになり、自分の心の空虚さを酒で補おうとごまかしてみたり、挙げ句の果てには、道で肩が触れたとの理由でやくざに殴られたりとかしました。やはり、動物界、地獄界とかなりつながっていたのでしょう。

このままの生活を続けていたら……そう考え、ものすごい空しさ、無常感を感じていました。

そんなあるとき、私は一念奮起して、自己改革を目指し、ずっと以前から興味のあった原始仏教、ヨーガの本を読みあさりました。そして、書店で麻原尊師の『超能力・秘密のカリキュラム』

を見つけたのです。「癌・エイズだって恐くない!!」というサブタイトルに本当かなあと思いつつも一応読んでみて、載っていた行法を実際に自分でやってみると、その効果はてきめんで、体の調子が一遍に良くなってしまいました。「すごい!」と思った私は、『イニシエーション』『生死を超える』と尊師のご著書を次々と読み進めていきました。これが、大変明快な内容で、他の仏教書やヨーガの本などでは答えの出なかった疑問がすべて載っていたのです。

そこで、これは本物かもしれないと思い、それまでは日本の既成の宗教のイメージがあり、宗教嫌いだったにもかかわらず、オウムは真理ではないかという期待に突き動かされて入信し、修行を始めるようになりました。そして、入信後、チラシ配り等のバクティー・ヨーガ、コースでの瞑想、呼吸法や師の的確なアドバイスにより、今までの殺伐とした心は穏やかになり、安定し、身体が心地良く振動するなどの体験をし、これは本物だと信じるようになりました。そして、尊師の二度のシャクティーパットによって絶対の確信を持った私は、翌年出家したのです。

そして、念願の出家生活が始まりました。四預流支の本格的な実践が始まったわけです。初めは、ワーク（奉仕）と戒を守るという実践と、そのワークの合間を見て、説法テープを聴く等の記憶修習の実践をしていました（また、このとき先輩の師と勉強会等に行くことが多かったのですが、師の説法が聴けたというのはとてもラッキーなことで、今思うと記憶修習の実践には大いにプラスになったと思います）。私は、できるだけ教義にのっとり考え、行動するように努

めました。

あるとき、こんなことがありました。布施と持戒の実践を行なっていると早くカルマが返ってくるという教義のとおり、両足の足首から指の先まで、青紫色に約二倍に腫れ上がるという浄化現象が起こりました。この足の腫れを見て、みんなはゴジラの足みたいだとびっくりしていました。普通だったら、突然そんなことが起こったらびっくり仰天でしょうが、日頃の教学によって殺生のカルマというのは足に痛みを伴って出てくるということを知っていたため、さほど驚きはしませんでした。先程も述べたとおり、自分には殺生のカルマがあるし、教義が正しければ必ずカルマ落としがあるはずだ、と心の中で準備していたからです。

カルマの法則はあるんだと再度確信し、信が深まりました。もし、教学をしていないで、このカルマの浄化があったならば、なぜ幸福になるために奉仕行をしているのに、こんな目に遭わなければいけないんだろうと思い、痛みに耐え切れずに逃げ出していたに違いありません。逆に教義を知っていれば、今耐えることで、来世地獄へ至り何カルパという長い期間苦しまなければならない悪業を清算しているんだと思うことにより、大変なうれしさが込み上げてくるものです。そして、この約二カ月の浄化が過ぎ、スーッと足の腫れが引いた途端に、ダルドリー・シッディ（空中浮揚の前段階の神通力）が起きました。ある程度浄化されたからでしょう。同時に、心もものすごく軽くなりました。すごい喜びと、心身が本当に軽快になる体験をさせていただき

ました。

そうして出家生活を続けていくうちに、私はあるとき、ついに成就のための極厳修行に入れていただいたのです。そしてそこで、サマディらしき体験をさせていただいたのでした。

――そのとき、初めは、一緒に修行しているだれかが懐中電灯をつけているのかと思いました。フラッシュのような光とは違い、視界全体が柔らかく明るくなってくるのです。しかし、目を開けてみると、そのような様子はありません。依然として、瞑想ルームは一筋の光も入ってこない真っ暗な空間です。私は、二回、三回とツァンダリーの瞑想を続けていきました。すると、どんどん光が強まってきて、全体が蛍光灯のような明るさになりました。今までになく雑念がなくて、集中が長く持続します。そして、すごく楽な状態というか、軽い状態になりました。初め、この光は気のせいかな、自分でイメージしたものかなと思いましたが、そうでないことに気が付きました。なぜなら、ツァンダリーを三回、四回と続けていくごとに光が強まるし、途中で気を抜くと光は弱まってくるからです。そして、光が強くなってくるときには心に雑念がわかず、安定して静まり、非常に楽な状態であるのに、集中が崩れ、雑念がわき、それによって少しでも心が動くと光が弱まるのです――。

この修行中の精神的プロセスとしては、自分自身のことがよくわかってきて、自分の心の弱さとか無智からくる冷淡さ、自己保全の心、愛のなさなどがわかり、いかに自分は無智であったか、

そしてそれによってどういう心の屈折が起き、苦悩してきたかがわかってきていました。それを正すには、本当にすべてを知り、最高の愛をお持ちのグルに帰依して、その教えを聴き、記憶修習し、それにのっとり考え、自己の身・口・意を統御していくしかないんだ、と私は思ったのです。

前述の光の体験の約一カ月後、修行の効果を如実に示すような一つの出来事が起こりました。水中クンバカの実験（水槽に潜って、その中でどれだけ保息できるかという試み）が行なわれたのですが、私はそこで十四分二十七秒という記録を出すことができたのです（それまでの世界記録を四十五秒上回っているということでした）。ヨーガでは通常、呼吸法によって心を静め、心をコントロールしていくのですが、逆に、瞑想によって煩悩を弱めることによって呼吸も自然に長くなり、回数も減っていくんだということを私はこのとき実感しました。以前、尊師がおっしゃっていた「呼吸は煩悩である」ということを確信したのです。

光の体験――そのとき、雑念はなく、意識は鮮明で、集中が持続し、幸福感に満たされています。そして、心が静かで動かないため、クンバカが長くなるのです。これは、調べてみると、いにしえのヨーガの経典、あるいは仏典に書かれているとおりの体験でした。

尊師の言葉は真理である、オウムの教義は真理である、オウムの修行体系は真理である、と改

めて確信を持ちました。尊師の愛により、尊師のイニシエーションにより、そして尊師の説かれる法の実践により、私はクンダリニー・ヨーガの成就をさせていただきました。これからは、もっともっと精進し、自己の心の成熟とともに、多くの人の心の解放、幸福を願って、真理の実践をしていきたいと思います。

（九一年四月現在　二十七歳）

## ❖ 栗林初實 ❖

オウム真理教に入信する前、私はM教という手かざし教団に入っていました。十年間、救済という名のもとに、自分の身体がボロボロになるまで手をかざし続けてきたのです。そして、気付いたときには、自分で立ち上がることもできないような状態になっており、目まいがひどくなって、入院せざるを得なくなりました。そして、そのとき、左の胸が乳癌（にゅうがん）に侵されているということがわかり、手術を受けたのです。

私がオウムに巡り合ったのは、その手術後、健康状態が優れず、仕事にも支障をきたし、前途にも希望のない不安な日々を送っていたときのことでした。私は、入院中の抗癌剤の副作用によって、薬の恐さを身をもって知っていたので、手術後も薬の服用はやめて、自然療法によって体質改善を図ろうと心がけていました。そんな折、自然食が縁で知り合ったUさんの紹介で、何度か「真理の集い」に参加させていただき、「入院したと思って、浄化法をやってみたら」といった軽

いお誘いを受け、それならとオウム真理教に入信させていただいたのです（M教は、オウムに入信した月にやめました）。

入信後、私は、尊師よりいただいた浄化法や呼吸法を毎日忠実にこなしていきました。それに加えて、シャクティーパットや数々のイニシエーションを受けさせていただき、その結果、見違えるように健康が回復し、顔色も良くなってきました。

そして、いつの間にか教学にも身が入り、尊師の説かれる世界観、人類救済へのご熱意に深く引き込まれていきました。涙があふれることも何度かあり、その奥の深い教義に魂がぐんぐん引き寄せられていくのがわかりました。長い間、迷妄の世界をさまよっていた魂が、初めて触れる真実の世界。苦悩からの解放へと導いてくださる確かな道標が、私の前に示されたのでした。オウム真理教は、数々のカルマによって、生きることも死ぬこともできないほどの苦を味わった私に、ようやく訪れた一筋の光、高い世界への確かないざないだったのです。

いつしか私は、尊師がお示しくださった四預流支（しよるし）の実践をできるだけ心がけるべく、ビラ配り、その他のバクティーをはじめとして功徳を積み、大阪・名古屋・京都の説法会へと足を運びました。それまでは、長い間培った観念により、なかなかご指導くださるようには実践できなかったのですが、この頃から心より功徳を積まさせていただくことができるようになりました。

同時に尊師が指し示してくださる救済への熱意が、私の中でひそかに燃え上がってきました。

そのせいでしょうか、最近になって周りの環境もずいぶんと変わり、真理施がしやすくなりました。私を通してオウムを見てくださっているのだと思います。

最近私は、自分の心の変化にはっきりと気付き始めています。その変化とは、自分のことや自分の周りに起こる現象を冷静にありのままに見られるようになってきたということです。このため、周りの人達を見る目も変わったようです。以前のような情による偏った見方や思い込みも少なくなり、ある程度の間隔を置いて見られるようになってきたため、いろんな事象や自己の煩悩に振り回されることもなく、心が非常に安定してきたのです。この心の安定こそ、私が長い間求め続け、どんなに努力しても得られなかったものであり、深い幸福の実感なのです。

尊師、そしてあの覚者サキャ神賢は、苦を感じることこそ、修行の第一歩と説かれていますが、その意味合いが実感として受け止められます。

「この世というものは一切が苦である。すべての事象、すべての現象は苦である。そして私達が歩くと、私達が行為すると、私達が思うと、必ずその苦にぶつかり、苦というものは起き上がる。そして、その苦は必ず滅尽できる。」

この尊師の力強いお言葉が、無智に覆われた私の魂に語りかけてくださるようでした。苦から解放される確かな道が、二千五百年を経て、今、現実に私達の前に指し示されているのです。

「自分を信じなさい。自分の体験したものを信じ、それを根本としなさい。」

私は、今後、この尊師のお言葉どおり、自分の得た体験を信じ、誇り、さらに一人でも多くの人々にこの真実を伝えていきたいと思います。「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」というこの詞章こそ尊師のお心と拝し、今生で許されなくともいつの日か、必ず未来際において、真の救済者として尊師のお供を許されることを、私は今ひそかに念じています。

「一人でも多くの人が真理に導かれ、この迷妄の世界から脱却して、マハー・ニルヴァーナに入れますように」と祈念しつつ、ここまで導いてくださった方々に心より感謝して……。

合掌

（九一年四月現在　五十三歳）

読むだけでわかる八正道の真実

# 八正道

サキヤ神賢

相応部経典　大篇第一　道相応

# Magga-saṃyutta 「道相応」（マッガ・サンユッタ）

## ◆一　非神秘力

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。

二　そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、こうお告げになった。

「向煩悩滅尽多学男達よ。」

「尊師よ。」

と、彼ら向煩悩滅尽多学男達は、覚者にお応え申し上げた。そこで、覚者は次のようにお説きになった。

三　「向煩悩滅尽多学男達よ、非神秘力が先行して、不善法が生起した後は、慚愧がなく、良心がないのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、非神秘力に達した愚者には、邪見解が生じる。邪見解から邪思惟が生

じる。邪思惟から邪語が生じる。邪語から邪行為が生じる。邪行為から邪生活が生じる。邪生活から邪精進が生じる。邪精進から邪記憶修習が生じる。邪記憶修習から邪サマディが生じるのである。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、神秘力が先行して、善法が生起した後は、慚愧があり、良心があるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、神秘力に達した賢者には、正見解が生じる。正見解から正思惟が生じる。正思惟から正語が生じる。正語から正行為が生じる。正行為から正生活が生じる。正生活から正精進が生じる。正精進から正記憶修習が生じる。正記憶修習から正サマディが生じるのである。」

## ◆七　ある向煩悩滅尽多学男（二）

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。

二　そのとき、一人の向煩悩滅尽多学男がいて、覚者がいらっしゃる所を訪れた。訪れると、覚者を礼拝して、傍らに座った。

三　傍らに座って、その向煩悩滅尽多学男は、覚者にこう申し上げた。
「尊師よ、愛著の調状・邪悪心の調状・迷妄の調状とおっしゃいますが、尊師よ、一体この愛著の調状・邪悪心の調状・迷妄の調状とは、何の同義語なのでしょうか。」
「向煩悩滅尽多学男よ、この愛著の調状・邪悪心の調状・迷妄の調状とは、煩悩破壊界と同義語なのだ。そして、これによって、諸々の漏の破壊を説くのである。」
四　このように説かれると、その向煩悩滅尽多学男は、覚者にこう申し上げた。
「尊師よ、不死、不死とおっしゃいますが、尊師よ、一体どのようなことが不死なのでしょうか。また、どのようなことが不死に至る道なのでしょうか。」
「向煩悩滅尽多学男よ、愛著の滅尽・邪悪心の滅尽・迷妄の滅尽、まさにこれを不死と説くのである。また、この不死に至る道とは、聖なる八支の道のことなのだ。すなわちそれは、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正精進・正記憶修習・正サマディのことである。」

## ◆八　分別

一　このように私は聞いた。
あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、君達に聖なる八支の道を説き分別しよう。聴いて、よく作意しなさい。私は説こう。」

「かしこまりました、尊師よ。」

と、彼ら向煩悩滅尽多学男達は覚者にお応え申し上げた。そこで、覚者は次のようにお説きになった。

三　「向煩悩滅尽多学男達よ、聖なる八支の道とは何であろうか。

すなわちそれは、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正精進・正記憶修習・正サマディのことである。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正見解とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、苦における精通・苦の生起における精通・苦の滅尽における精通・苦の滅尽に至る方法における精通のことなのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、これを正見解というのである。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正思惟とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、出離の思惟・非邪悪心の思惟・非残酷の思惟のことなのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、これを正思惟というのである。

六　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正語とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、妄語を断つこと・両舌を断つこと・悪口を断つこと・軽薄語を断つことなのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、これを正語というのである。

七　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正行為とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男達よ、すなわちそれは、殺生を断つこと・偸盗を断つこと・非神聖行を断つことなのだ。向煩悩滅尽多学男達よ、これを正行為というのである。

八　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正生活とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男達よ、ここに聖なる多学の弟子がいて、邪生活を捨断して、正生活によって日々を送る。向煩悩滅尽多学男達よ、これを正生活というのである。

九　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正精進とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、まだ生起していない悪不善法が生起しないように、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

既に生起した悪不善法を捨断するために、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

まだ生起していない善法が生起するように、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

既に生起した善法に集中継続し、困惑することなく、増大し広大にし、修習し円満にするため

に、決意を起こし、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力する。

向煩悩滅尽多学男達よ、これを正精進というのである。

10　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正記憶修習とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、この世における貪欲と憂いを調伏しなさい。

感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、この世における貪欲と憂いを調伏しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、この世における貪欲と憂いを調伏しなさい。

観念において観念を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習して、この世における貪欲と憂いを調伏しなさい。

向煩悩滅尽多学男達よ、これを正記憶修習というのである。

11　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、正サマディとは何であろうか。

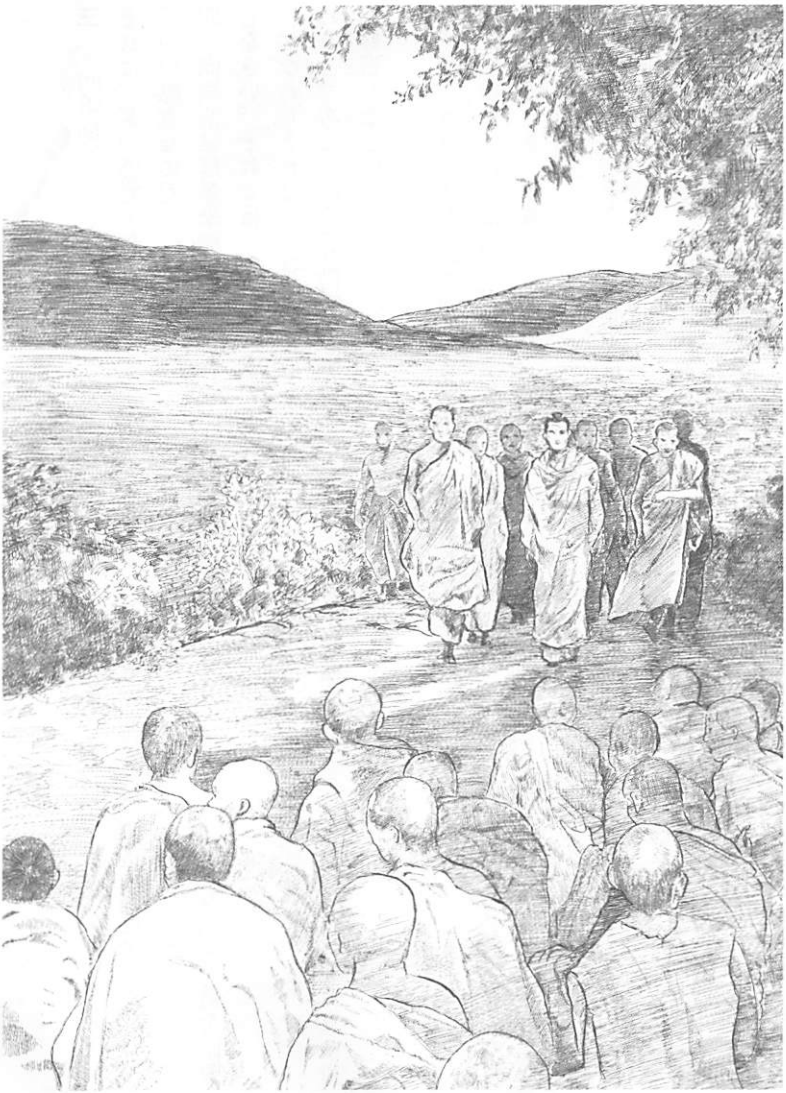
向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、諸々の欲を離れ、不善法を離れて、有熟考有吟味にして、遠離から生じる喜と楽とがある、第一静慮を具足してとどまる。

熟考と吟味を静止し、内側を静め、心が一点に集中する状態となって、無熟考無吟味にして、

サマディから生じる喜と楽とがある、第二静慮を具足してとどまる。
喜から離貪し、無頓着となってとどまり、記憶修習し正智して、身をもって楽を受け、諸々の聖者が『無頓着にして記憶修習がある楽住である』と説く、第三静慮を具足してとどまる。
楽を捨断し苦を捨断して、以前の喜びと憂いとを滅したことから、不苦不楽にして、無頓着と記憶修習による清浄とがある、第四静慮を具足してとどまる。
向煩悩滅尽多学男達よ、これを正サマディというのである。」

## ◆二九　感覚

一　このように私は聞いた。
あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。
二　そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、こうお告げになった。
「向煩悩滅尽多学男達よ。」
「尊師よ。」
と、彼ら向煩悩滅尽多学男達は、覚者にお応え申し上げた。そこで、覚者は次のようにお説きになった。



三　「向煩悩滅尽多学男達よ、三つの感覚がある。それでは、三つとは何であろうか。すなわちそれは、楽の感覚・苦の感覚・不苦不楽の感覚のことである。向煩悩滅尽多学男達よ、これらが三つの感覚なのだ。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、これら三つの感覚を理解することによって、聖なる八支の道を修習しなさい。それでは、聖なる八支の道とは何であろうか。

すなわちそれは、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正精進・正記憶修習・正サマディのことである。向煩悩滅尽多学男達よ、これらの感覚を理解することによって、聖なる八支の道を修習しなさい。」

## ◆三〇　ウッティヤ、あるいはウッティカ

一　このように私は聞いた。

二　あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。

三　そのとき、長老ウッティヤは覚者がいらっしゃる所を訪れた。訪れると、覚者を礼拝して傍らに座った。

四　傍らに座って、長老ウッティヤは覚者にこう申し上げた。

「尊師よ、私は人里離れた所で独居していると、心にこのような考えが生じました。『覚者は五妙欲をお説きになった。それでは、覚者は一体何を五妙欲とお説きになったのであろうか』と。」

**五**　「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、ウッティヤよ。ウッティヤよ、確かに、私はこの五妙欲を説いた。それでは、五つとは何であろうか。

すなわちそれは、眼によって識別される形状・容姿において、好むこと・楽しむこと・快いこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することと、耳によって識別される声において、好むこと・楽しむこと・快いこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することと、鼻によって識別される香りにおいて、好むこと・楽しむこと・快いこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することと、舌によって識別される味において、好むこと・楽しむこと・快いこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することと、身によって識別される触において、好むこと・楽しむこと・快いこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することなのである。

ウッティヤよ、これが、私が説いた五妙欲なのだ。

**六**　ウッティヤよ、この五妙欲を捨断することによって、聖なる八支の道を修習しなさい。それでは、聖なる八支の道とは何であろうか。

すなわちそれは、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正精進・正記憶修習・正サマディ

のことである。ウッティヤよ、この五妙欲を捨断することによって、この聖なる八支の道を修習しなさい。」

## ◆五五　真理にのっとり——遠離を目的とする

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二「向煩悩滅尽多学男達よ、太陽が昇るとき、この先駆けとなり、この前兆となるのは、暁のことなのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が聖なる八支の道を生起するとき、この先駆けとなり、この前兆となるのは、真理にのっとり作意することを具足することなのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、真理にのっとり作意することを具足した向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、向煩悩滅尽多学男は、真理にのっとり作意することを具足して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、

滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。
向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、向煩悩滅尽多学男は、真理にのっとり作意することを具足して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。」

**◆六三　善き友（一）——遠離を目的とする**

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、聖なる八支の道を生起させるのに有効な一つの法がある。それで

は、一つの法とは何であろうか。すなわちそれは、善き友であることなのだ。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、善き友である向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、善き友である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、善き友である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。」

## ◆八四　善き友（二）——愛著調伏

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二「向煩悩滅尽多学男達よ、まだ生起していない聖なる八支の道が生起し、生起した聖なる八支の道が修習され円満になるという法を、私は他に一つも見たことがない。すなわちそれは、善き友であることなのだ。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、善き友である向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、善き友である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、愛著の調伏に究竟（きょうきょう）し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正見解を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正思惟を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正語を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正行為を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正生活を修習する。
愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正精進を修習する。
愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正記憶修習を修習する。
愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正サマディを修習する。
向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、向煩悩滅尽多学男は善き友であり、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。」

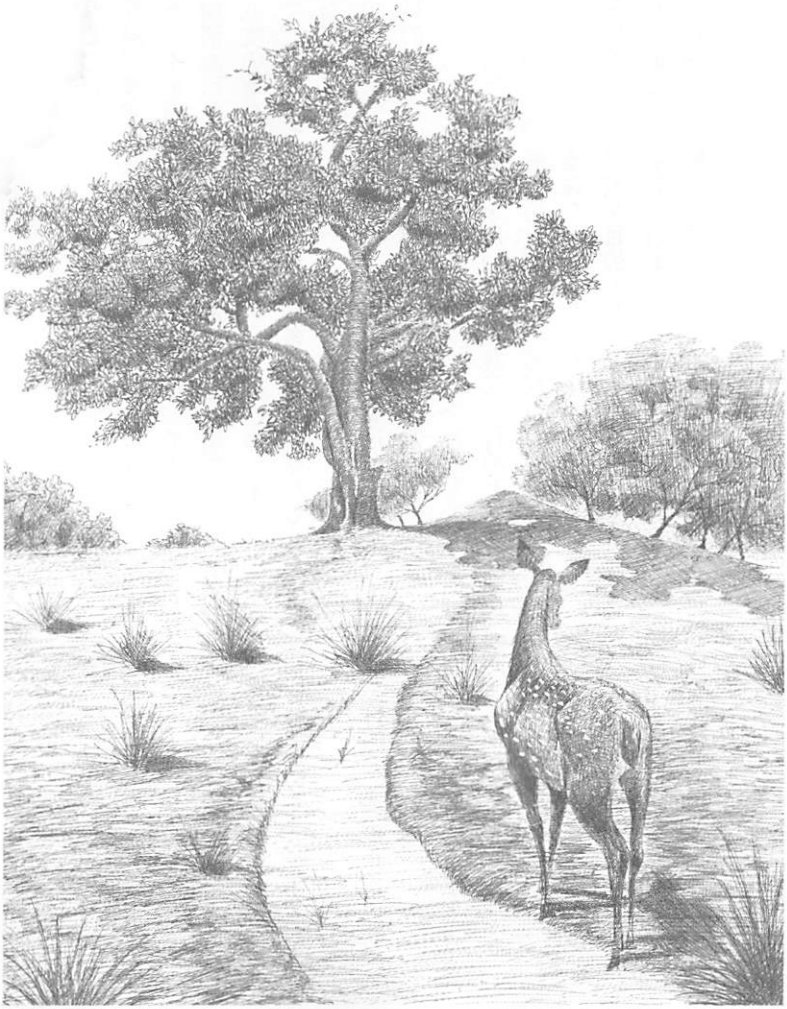
## ◆一三九　真理勝者

### 一　遠離を目的とする

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、諸々の衆生で、足のないもの、あるいは二本足のもの、あるいは四本足のもの、あるいは多くの足があるもの、あるいは形状・容姿があるもの、あるいは形状・容姿がないもの、あるいは認知があるもの、あるいは非認知があるもの、あるいは非認知非非認知があるものに関しては、供養値魂（くようちこん）・最上正覚者（さいじょうしょうがくしゃ）である真理勝者が、それらの中で第一であると



宣言されるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、どのような善法もすべて、不放逸を根本とし、不放逸と結び付き、不放逸はそれらの諸法の中で第一であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。

さらに三つの経について詳しく述べるであろう。」

## 二　愛著調伏

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二「向煩悩滅尽多学男達よ、諸々の衆生で、足のないもの、あるいは二本足のもの、あるいは四本足のもの、あるいは多くの足があるもの、あるいは形状・容姿があるもの、あるいは形状・容姿がないもの、あるいは認知があるもの、あるいは非認知があるもの、あるいは非認知非非認知があるものに関しては、供養値魂・最上正覚者である真理勝者が、それらの中で第一であると宣言されるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、どのような善法もすべて、不放逸を根本とし、不放逸と結び付き、不放逸はそれらの諸法の中で第一であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八支の道を修習し、

聖なる八支の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正見解を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正思惟を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正語を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正行為を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正生活を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正精進を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正記憶修習を修習する。

愛著の調伏に究竟し、邪悪心の調伏に究竟し、迷妄の調伏に究竟する正サマディを修習する。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。」

## 三　不死没入

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、諸々の衆生で、足のないもの、あるいは二本足のもの、あるいは四本足のもの、あるいは多くの足があるもの、あるいは形状・容姿があるもの、あるいは形状・容姿がないもの、あるいは認知があるもの、あるいは非認知があるもの、あるいは非認知非非認知があるものに関しては、供養値魂・最上正覚者である真理勝者が、それらの中で第一であると宣言されるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、どのような善法もすべて、不放逸を根本とし、不放逸と結び付き、不放逸はそれらの諸法の中で第一であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、不死に没入し、不死に到達し、不

死に究竟する正見解を修習する。
不死に没入し、不死に到達し、不死に究竟する正思惟を修習する。
不死に没入し、不死に到達し、不死に究竟する正語を修習する。
不死に没入し、不死に到達し、不死に究竟する正行為を修習する。
不死に没入し、不死に到達し、不死に究竟する正生活を修習する。
不死に没入し、不死に到達し、不死に究竟する正精進を修習する。
不死に没入し、不死に到達し、不死に究竟する正記憶修習を修習する。
不死に没入し、不死に到達し、不死に究竟する正サマディを修習する。
五　向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。」

## 四　煩悩破壊に向かう

一　このように私は聞いた。
あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。
二「向煩悩滅尽多学男達よ、諸々の衆生で、足のないもの、あるいは二本足のもの、あるいは

四本足のもの、あるいは多くの足があるもの、あるいは形状・容姿があるもの、あるいは形状・容姿がないもの、あるいは認知があるもの、あるいは非認知があるもの、あるいは非認知非非認知があるものに関しては、供養値魂・最上正覚者である真理勝者が、それらの中で第一であると宣言されるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、どのような善法もすべて、不放逸を根本とし、不放逸と結び付き、不放逸はそれらの諸法の中で第一であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、この聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうことを望むのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正見解を修習する。

煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正思惟を修習する。

煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正語を修習する。

煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正行為を修習する。

煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正生活を修習する。

煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正精進を修習する。
煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正記憶修習を修習する。
煩悩破壊に向かい、煩悩破壊に傾き、煩悩破壊に臨む正サマディを修習する。
五　向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、不放逸である向煩悩滅尽多学男は、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。」

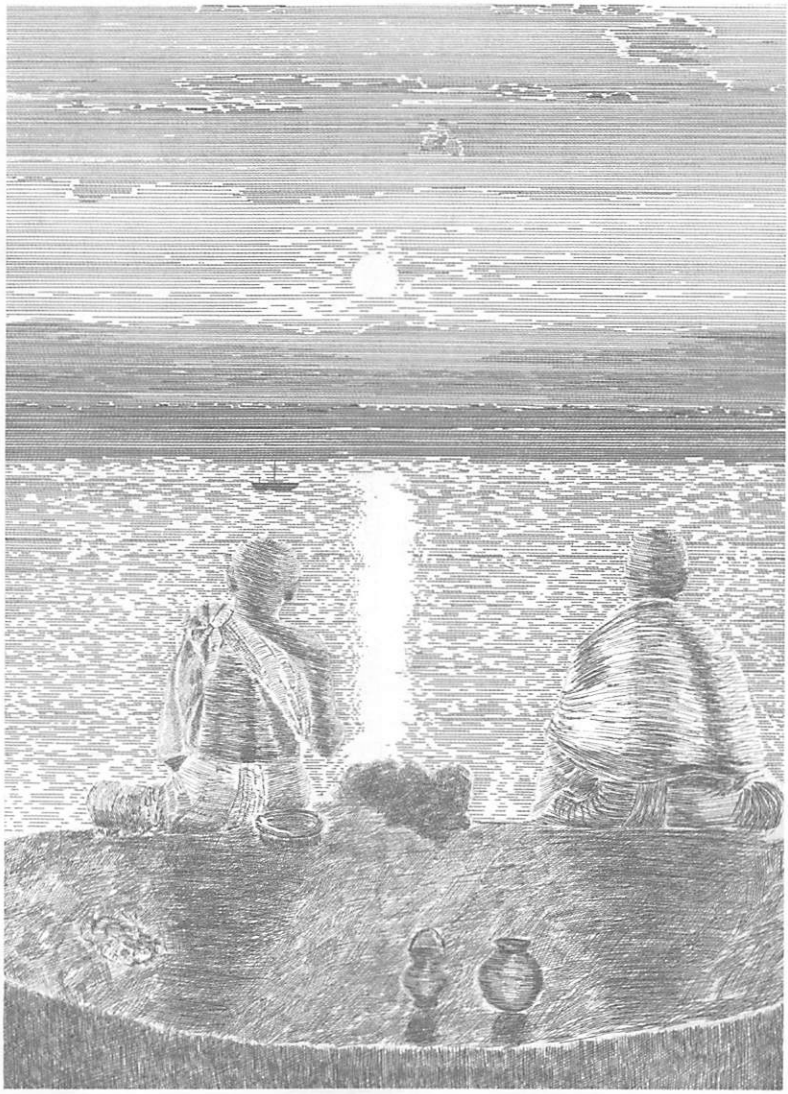
## ◆一四九　力

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、たとえるならば、力を必要とする仕事をなすのは、すべて地により地に立脚するのであって、このようにして、力を必要とする仕事はなされるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男は戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのようにして、向煩悩滅尽多学男は戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのであろうか。



三　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男達よ、このようにして、向煩悩滅尽多学男は戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうのである。」

## ◆一五〇　種子

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、たとえるならば、どのような種子や草木であっても、増大し生長し広大になるのを得るのは、すべて地面により地面に立脚するのであって、このように、種子や草木は増大し生長し広大になるのを得るのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が、戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、諸法において、増大し成長し広大になるのを得るのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのように、向煩悩滅尽多学男が、戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、諸法において、増大し成長し広大になるのを得るのであろうか。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が、戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、諸法において、増大し成長し広大になるのを得るのである。

## ◆一五一　龍

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、龍は山の王者雪山により、身体を増大させて力を獲得する。そこで、彼らは身体を増大させ力を獲得して、小さな池に入る。小さな池に入って、大きな池に入る。大きな池に入って、小さな川に入る。小さな川に入って、大きな川に入る。大きな川に入って、大海原に入る。そこで、彼らは身体が巨大になり、広大になるのを得るのだ。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、諸法において巨大になり、広大になるのを得るのである。向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのように、向煩悩滅尽多学男が戒により

戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、緒法において巨大になり、広大になるのを得るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が戒により戒に立脚して、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、法において巨大になり、広大になるのを得るのである。」

## ◆一五五　空

一　このように私は聞いた。

あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまっておられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二「向煩悩滅尽多学男達よ、たとえるならば、空には様々な風が吹く。すなわち、東風が吹き、西風が吹き、北風が吹き、南風が吹き、ほこり混じりの風が吹き、ほこりのない風が吹き、涼風が吹き、熱風が吹き、そよ風が吹き、大風が吹く。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、四つの記憶修習述は修習され円満になり、二正断二正勤は修習され円満になり、四つの如意の基礎は修習され円満になり、五つの潜在性は修習され円満になり、五つの能力は修習され円満になり、七つの覚醒部分は修習され円満になるのである。

向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのように、向煩悩滅尽多学男が聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、四つの記憶修習述は修習され円満になり、二正断二正勤は修習され円満になり、四つの如意の基礎は修習され円満になり、五つの潜在性は修習され円満になり、五つの能力は修習され円満になり七つの覚醒部分は修習され円満になるのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、

滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。
向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、四つの記憶修習述は修習され円満になり、二正断二正勤は修習され円満になり、四つの如意の基礎は修習され円満になり、五つの潜在性は修習され円満になり、五つの能力は修習され円満になり、七つの覚醒部分は修習され円満になるのである。」

## ◆一五九　訪問客

一　このように私は聞いた。
あるとき、覚者はサーヴァッティーのジェータ林にあるアナータピンディカの園にとどまって

おられた。そのとき、覚者は向煩悩滅尽多学男達に、次のようにお説きになった。

二　「向煩悩滅尽多学男達よ、たとえるならば、宿屋があり、そこには東方からの訪問客が泊まり、西方からの訪問客が泊まり、北方からの訪問客が泊まり、南方からの訪問客が泊まり、武人階級の訪問客が泊まり、祭司階級の訪問客が泊まり、庶民階級の訪問客が泊まり、奴隷階級の訪問客が泊まるのだ。

向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、証智（しょうち）して理解できる諸法を証智して理解し、証智して捨断できる諸法を証智して捨断し、証智して現証（げんしょう）できる諸法を証智して現証し、証智して修習できる諸法を証智して修習するのだ。

三　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、どのような法が証智して理解できるものなのだろうか。それは、五つの執着の集積であると言えるのだ。それでは、五つとは何であろうか。すなわちそれは、形状・容姿の執着の集積・感覚の執着の集積・表象の執着の集積・意志の遂行の執着の集積・識別の執着の集積のことである。向煩悩滅尽多学男達よ、これらの諸法が証智して理解できるものなのだ。

四　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、どのような法が証智して捨断できるものなのだろうか。それは、非神秘力と生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男達よ、これらの諸法が証智して捨断でき

るものなのだ。

五　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、どのような法が証智して現証できるものなのだろうか。それは、神秘力と離解脱である。向煩悩滅尽多学男達よ、これらの諸法が証智して現証できるものなのだ。

六　向煩悩滅尽多学男達よ、それでは、どのような法が証智して修習できるものなのだろうか。それは、寂止と正観である。向煩悩滅尽多学男達よ、これらの諸法が証智して修習できるものなのだ。

七　向煩悩滅尽多学男達よ、それではどのように、向煩悩滅尽多学男が、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、証智して理解できる諸法を証智して理解し、証智して捨断できる諸法を証智して捨断し、証智して現証できる諸法を証智して現証し、証智して修習できる諸法を証智して修習するのであろうか。

八　向煩悩滅尽多学男達よ、ここに向煩悩滅尽多学男がいて、遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正見解を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正思惟を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正語を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正行為を修習する。

遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正生活を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正精進を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正記憶修習を修習する。
遠離を目的とし、離貪を目的とし、滅尽を目的とし、安楽に回向する正サマディを修習する。
向煩悩滅尽多学男達よ、このように、向煩悩滅尽多学男が、聖なる八支の道を修習し、聖なる八支の道を真面目に行なうならば、証智して理解できる諸法を証智して理解し、証智して捨断できる諸法を証智して捨断し、証智して現証できる諸法を証智して現証し、証智して修習できる諸法を証智して修習するのである。」

# 八正道

麻原彰晃尊師

## 今甦った原始仏教の真髄

第一話　いつの日か覚醒するために

第二話　修行――苦から楽への転化

第三話　実践的八正道と四無量心

# 第一話　いつの日か覚醒するために

九一年一月二十二日　於・阿蘇シャンバラ精舎

## ◉真理にのっとりデータを入れる

聖なる八支の実践。これが私達の五蘊形成に大きな影響を与え、そして未来際において仏陀として生まれ変わるための土台をつくり、五蘊を変化させていくということを君達は知っているだろうか。

この聖なる八支の実践。これは正しい見解を具足するということ。この正しい見解を具足するとはどういうことかというと、私達が生まれてから修行に入るまで持っている正しくない見解、つまり俗にいわれる現実的な見解を離れ、真理にのっとりそのデータを入れるということである。この正しい見解とは何を意味するのかというと、これは、私達を苦しみから真に解放するデータということになる。例えば、愛着は喜びであると一般的にいわれています。なぜならば、愛着する者が喜べば自分も喜ぶと。あるいは、愛着するものが多ければ多いほど、その人生は楽しいと。しかし、ここで考えなければならないことは、その愛着が強ければ強いほど、あるいはその対象が多ければ多いほど、ディタッチするとき、つまり離れるときに、苦しまなければならないとい

う実態です。この苦しまなければならないという実態を超越できるのは、ただ一つ、グルと弟子の関係だけであると。これは、どういうことかというと、グルのステージが大変高く、そして弟子のステージが大変高ければ、輪廻転生を超え、いつでもどこでも一緒についていくことができると。しかし、そうではない関係においては、必ず死というものを境に、その苦しみは必ずやってくるということです。

### ◉ひたすら法を学べ

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。どんなに大きな家に住んでいても、どんなに大金持ちであっても、多くの恋人を有していても、あるいは一人の愛する妻を持っていても、あるいはどんなに高い地位に就いていても、どんなに権力を有していても、人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。その死を境に苦しまなければならない。

そして、そのディタッチの際、つまり愛着から離れる際に、苦しまなくていい法があると。その法を学ぶこと、その法に基づいて考えること、これが正しい見解を具足するということです。

よくサマナの中で、私は揺れていますという人がいます。その揺れてますという人の話を聞くと、生まれてからこの方の苦しみを因とするものの考え方に立脚し、その修習を行なっていると。例えば、オウムでは、オウム食だけしか食べられないと。外ではラーメンがおいしかった、そば

がおいしかった、あるいはアイスクリームがおいしかったと。あるいはチーズケーキがおいしかったと。しかし、これらのおいしいといったもの、このおいしいといったものとも、必ず死を境に離れなければならない。ところが、出家し、その記憶修習を一生懸命行なっていると。あそこのラーメンはどうだった、ここのそばはどうだったと。もし、ここで正しい見解を具足するならば、そのような執着、そのような味覚に対するとらわれというものは苦しみであると、しかも、それは、何々によって、どのような結果を招くということがしっかりと理解できるはずである。こういうとき、悩まないでひたすら教学をする。その教学も、同じものを三度、五度、十度、十五度と読み続けると。例えば、私の一本の説法を五回、十回、十五回と読むと。これをなすことにより、不思議と心が安定し、平安な気持ちを経験できるものである。

### ◉正しい思索とは

第二は、正しい思索ということになる。この正しい思索は四預流支の中の、まずしっかり学ぶと。その後に、それにのっとり思索するという教えがあるが、これと全く同じ。聖なる八支の道、聖なる八支の実践においての第二番目は、四預流支の第三番目ということになる。

仏陀釈迦牟尼の教えというものは面白いもので、一つの事象を縦横無尽に斬って、それを弟子達にわかりやすく説いていらっしゃる。例えば、今言ったとおり、正しい見解というのは、第二

番目のひたすら学ぶ、多学の弟子になるという意味である。第二番目の正しい思索。これは、四預流支の中の三番目、真理にのっとり考えるということである。そして、それから先の正しい言葉、正しい行為、正しい生活、正しい記憶修習、正しい精進、そして正しいサマディというのは、これはすべて真理の実践、第四番目の預流支ということになる。つまり、この四預流支は、聖なる八支の実践を含んでいるのであるということである。

私は正月のセミナーにおいて、八正道と六つの極限が同じであるということを話しました。そして、今日は、四預流支と聖なる八支の実践が同じであるということを話しているわけです。

### ◉愛をもって真実を語れ

では、この三番目の正語。これは一体何を意味するのかと。ちょっとサマナ用説法だから難しい部分に立ち入りましょう。まず、この正語は、妄語・綺語・悪口・両舌という四つの口のカルマを積まないということです。この四つの口のカルマを積まないということはどういうことかというと、喉のプラーナを左でもない、右でもない、中央の気道に導くということです。ちょっとタントラ的な表現だけどね。例えば、悪口・両舌といった怒りを含んだ言葉を連発していると、右の気道、喉の右の気道のナーディが炎症を起こします。熱優位となり、そこで詰まると。ちょうどそれは、ゴムがあり、そのゴムが熱され、そして、それがピッタリとくっ付いた形を考えた

らわかる。そこでナーディは完全に詰まってしまいます。逆に、妄語や綺語といったタマス傾向の言葉を発すると、左の気道、この左の気道のプラーナの流れがゆっくりゆっくり流れるようになり、必要なエネルギーが満たされないことになります。そして、愛をもって真実を正しく語るなら、それは中央の気道をスムーズにプラーナが流れるようになります。これが正語の意味合いです。

### ◉心に喜びを蓄えよ

では、次に正行為とは何でしょうか。この正行為とは、殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れると。今日、今子供達がね、まあ、私の子供達が無智な動きをしているけど、これはまさに、今日着いて何をやったかというと、動物を見に行って、動物を触ったと。この影響によって、説法のときに動物的な動きをしていると。これは、データの入れ替えが起きたわけだね。これと同じで、例えば殺生をすると、相手の、他の魂の苦しみのデータが入れ替わる。というのは、この欲界の苦しみの総量は一定だから、AがBに対してなした行為によって、相手が甘受したカルマの清算は、そのなしたものに移行します。これは、わかるね。同じように、偸盗、邪淫についても言えるわけです。ということはどうなるかというと、結局この殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れるという行為は、まず私達が苦しみのデータを自分の五蘊に蓄積しないことを意味してい

ます。そして、心において生き物を慈しみ、人にものを施す心を持ち、そして取引関係によるセックス、邪行を離れ、真に人を慈愛することができるならば、その心には喜びのデータの蓄積が当然始まるはずです。

### ◉七つの覚支の実践

そして、第五番目の実践、正生活ということになる。この正しい生活とは何かというと、これは日々七覚支の実践を行なうことと。つまり、ひたすら真理のデータを入れ、そしてニルヴァーナに向かってのベクトルを向けるということであると。このニルヴァーナに向かってのベクトルを向けるとはどういうことかというと、例えば修行をなしていて苦しいと考えるのではなくて、楽しいと考える。経典を読んでいて、うれしいと思うと。これはもう、みんなよく知っている、喜覚支だね。あるいは、普段からリラックスをし、修行において心身の軽快さを感じると。これは、軽安覚支だね。あるいは、今何ができるのかということを絶えず考え、その時と場所に合った真理の実践を行なうと。例えば、ワークのときはワークに集中し、例えばマントラが唱えられるときはマントラに集中し、教学できるときは教学に集中するという実践を行なう。これが、択法覚支だね。例えば、これは聖なる八支の実践の第一番目にもあるわけだけど、ひたすら一つの記憶を入れ続けると。これは、正念といわれている正記憶修習、つまりデータの入れ替えだね。

そして、どんなにつらくてもひたすら修行し続けるという精進覚支だね。

これらは、すべてサマディに導かれます。そして、いかなる状況であろうとも、頓着しない心を身につけると。それは、前回の説法であったとおり、今苦しんでいることは、過去と過去世の幻影であるということを理解し、今にとらわれず、今なさなければならない修行に没頭すると。この七つの覚支の実践を日々行なうこと。これが正生活です。

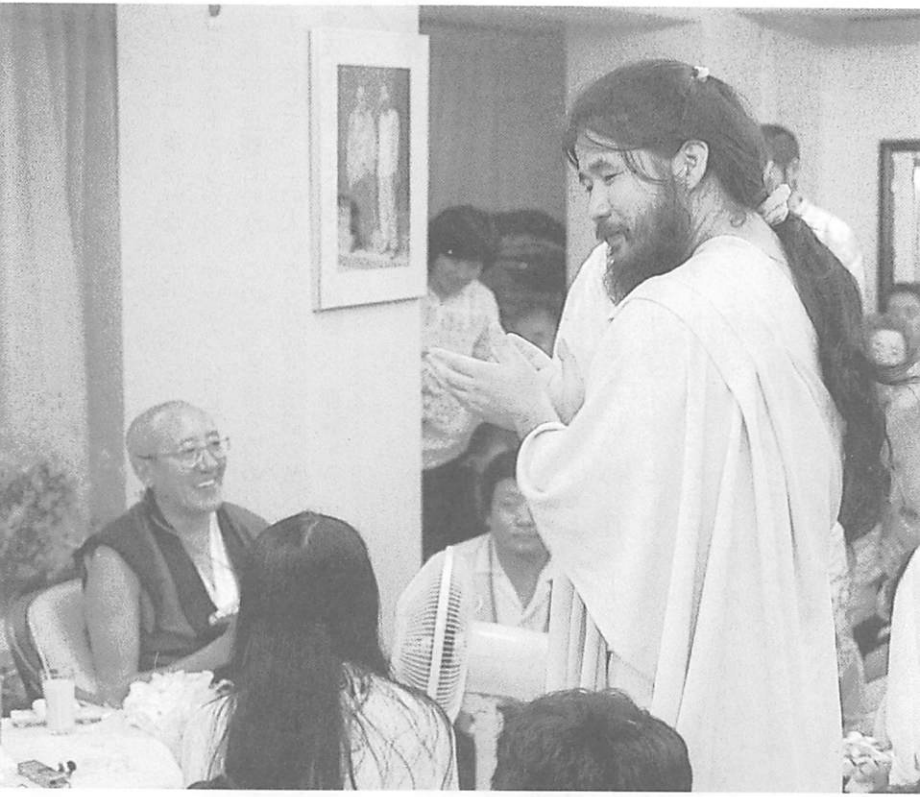
### ◉四つのチェックの修行

そして、次はチェックに入ると。チェックとは何かというと、今なしている善行、これをもっと増大したいと。どこをどうしたら増大できるんだろうかというチェックに入ると。まだ、今徳が足りないけども、未来において徳が積めるとき、その徳を達成しようと願うこと。例えば、例を挙げるならば、今ワークを実践していると。よって、ワークで徳を積もうと。どうしたら、もっと集中して徳を積めるだろうか、どうしたら、もっと多くの徳を積めるだろうかと考えること。そして、例えば、極厳修行に入ったら、思い切って二十四時間修行できるように頑張るぞと。それを日々考えること。これが二正勤です。そして、例えば、今身の行ないと心の働きはいいんだけど、口のカルマを積んでしまうという人がいたら、よし、それをやめようと。特に私は悪口が多いからやめようと。あるいは、私は必要のない言葉をよくしゃべるから、これをやめよう

と考えること。そして、それを実行すること。これが、断の一つだね。そして、未来において、例えば師になって、ね、師を見ると、ああプライドの修習をしているなと。私は、プライドの修習をしないように心がけようと。これが、随喜断といわれている、未来の悪業をシャットアウトする修行。この四つのチェック。つまり、今なしている善業を増大し、未来における善業を願望し、今なしている悪業をシャットアウトし、未来において生じるかもしれない悪業を、悪業の種をまかないようにするということ。この四つのチェックの修行を行なうこと。これが第六番目にくる、正精進といわれているものです。

### ◉すべてを経験し、理解する

そして、第七番目は、ひたすらデータの入れ替えを行なうと。しかもそれは、一つのことに絞ってデータの入れ替えを行なうと。例えば、「オーム、アー、フーム、金剛心をもってグルとシヴァ大神に帰依いたします。金剛心をもって真理に帰依いたします。金剛心をもって自己の霊性より少しでも高い人に帰依いたします」。こういうのは、まさに、この正念に入るわけだけどね、正記憶修習に入るわけだけど、これを五回、十回、千回、一万回、十万回と繰り返すと。そうすると、心の中心の部分は、そのデータが中心になってくると。これが正記憶修習であると。そして、それに基づき、サマディに導かれると。つまり、こういう七つの実践がしっかり行なわれないと、



なかなかサマディには、導かれないんだと。

では、それはなぜであろうかと。サマディに必要なのは、心の寂静と、そして光です。つまり、正観です。この寂止、正観という、この二つを得るためには、大いなる功徳と、それから煩悩の滅尽が必要です。そして、この大いなる功徳と煩悩の滅尽により、私達は、私達の内側を、そしてこの世界の構成を、そしてすべてを経験し、理解することができます。

### ◉覚者の見る世界

例えばね、例を挙げるならば、今、イラクとそれから国連軍、多国籍軍といわれている軍隊が戦争をしています。これは、一月の十七日に始まったそうだけども、まあ、一つナンセンスなことがあると。それは何かというと、もう日本軍は既に、かなりの金額をこの多国籍軍に、まあ要するに献金し、これからまた、一兆数千億円の献金をするという話だけれど、例えば、この波野村道場の用地を検察側が言うとおり計算するならば、約二百億平方メートル、この土地の値段でいったら買えるんだね。で、この二百億平方メートルといったらどういうことかというと、まあだいたい、百キロ、二百キロの、まあ土地が買えるということになると。この百キロ、二百キロといったら、おそらく四国より大きいと思います。そして、もちろん土地の値段は、今のクウェートよりも日本の方が当然高いでしょうから、世界が費しているお金をすべてクウェートに、例え

ば投資したならば、そのクウェートは十分に買える値段であると考えられます。

ところが、こういうことを考えるのは、麻原しかいないんだね。つまり、価値を転換し、そして何が正しくて、何が正しくないのかと。一体、今は、世界で何が行なわれているのかというのを考える、そういう普通の人と違った視点で見る魂というのは、おそらく私しかいないと思います。みんな、大体情報に翻弄され、そして目をつぶったまま突っ込んでいくと。これは、まさに私が真理の実践を今まで行なってきた結果得られている一つの力だと、私は考えています。

このような形で現象を冷静に分析し、見つめ、そして正しい生き方をすること。これが聖なる八支の実践です。そして、ここに出家し、集っている魂は、その実践ができる数少ない魂であると思います。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。しかし、その死というものは、コーザルに意識が到達するならば、すべて見ることができ、聞くことができ、匂うことができ、触れることができる。そして、感じることができるものです。皆さんも早くその境地へと到達してください。

# 第二話　修行——苦から楽への転化

九〇年十二月二十六日　於・阿蘇シャンバラ精舎

◉身・口・意を使った〝連想ゲーム〟

すごく涼しいね。いや、これぐらいの涼しさだと、裸だとちょっと肌寒いという感じだな。私が本栖湖で修行したときは、氷点下一六度とか一七度になってたから、まあ、これぐらいちょうどいいんじゃないか。ひょっとしたら、それぐらいまでなるかもしれないね。実は、私はこういう寒い場所を探してたんだよ。いや、というのは、今日の説法の中にもあるけども、四聖諦と関係あるんだね。四つの絶対的真理と。君達は無智だから、まあ要するに、温暖な気候を望むかもしれないけど。

オウム三唱

君達は、「修行」という言葉、これをイメージしたならば、一体どのような連想が生じるだろうか。例えば、苦しい。修行？　大変だ。修行？　何のためにあるかわからないと。あるいは、修行？

少し私の修行についてのイメージを話すことにしよう。修行、それは真の楽へ至る道である。そしてそれには十四の段階があり、その十四の段階のベースとなるものは布施であると。そして持戒と上がっていくと。そしてこの修行の最終地点は、広大無辺、絶対深遠なる心をつくり上げることであると。そしてそれこそが、本当の意味での絶対的歓喜や幸福・自由をもたらすものであると。その途上で生じるいろいろな苦しみは、修行によって生じる苦しみではなく、それは自分自身が本来内在している苦しみである。よって修行によって落とすということは、その修行のメリット、プラスそこでのカルマが落ちるわけだから、両方のメリットがあると。ところが例えばこれを君達に質問する、あるいは外道・凡夫に質問すると、一体どのような答えが返ってくるだろうか。そして、これが生起なのである。

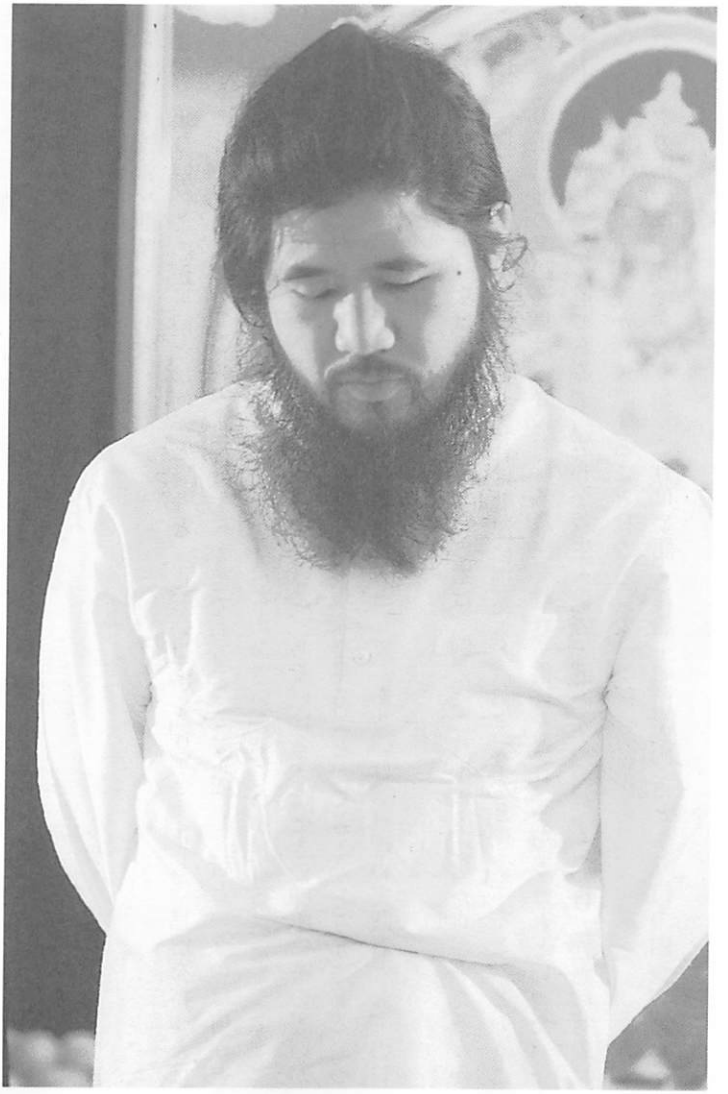
では、別のイメージゲームをしよう。例えば「本」と。君達は、何をイメージするだろうか。例えばスパイもの、マンガ、雑誌、あるいはアニメの本、あるいはグルメの本、あるいはセックスに関する本、あるいは、専門職の人は、専門職の、例えば機械の本や建築の本といったものをイメージするだろう。私の場合、本というと要するに経典、しかもその経典は解脱へ至るための経典、あるいは解脱を補助するための経典ということになる。これが生起なのである。

では、もっと別のものを連想してみよう。例えば「自由」。君達はいろんなことが我がまま勝手にできるということを連想するであろう。例えば、自由のためにはお金が必要だし、自由のた

めには、そうだね、時間が必要だし、自由のためには空間が必要であると。ところが、私にとっての自由というのは何かというと、一切の私を束縛するものから自由でありたいと。その束縛というものは外的束縛ではなく、内的束縛である。例えばどういうことかというと、目の前に食べ物があると。その食べ物を見て心が動くと。心が動くということはその食べ物に支配されてるわけである。あるいは目の前に異性がいると。異性がいることによって心が動くと。心が動くということは異性に支配されているわけである。いや正確な言い方をするならば、食べ物や異性というものを使った悪魔に支配されているわけである。そういったものから完全に自由になりたいと。これが私にとっての自由である。

ではなぜ、一つ一つの言葉において、その連想される意味合いというものが違うのであろうか。それがカルマなのである。そして、それが来世を決定するのである。そして、それが今生を決定するのである。つまり、私達の瞑想というものは、その連想ゲームを、身・口・意を使った連想ゲームを完璧に高い世界へと移行させる、完璧にベクトルを高い世界へと向かわせることが狙いなのである。

では、一つ一つ分析してみようじゃないか。その典型的な例は先程言った十四の徹底、あるいは八つの聖なる実践方法。まあ、君達は十四の徹底についてあまり詳しくないだろうから、ここで『マハーヤーナ』でも取り上げた八つの聖なる実践方法、一般には八正道といわれてるもの



を検討してみよう。

### ◉ベクトルを高い世界へ向けて

まず、正見解。この正見解とは何かというと、正しい見解を持つと。正しい見解を持つとはどういうことかというと、この世の諸行はすべて苦であると。ここでいう苦というのは何かというと、死を超越できないものであるというふうに考えなさいと。これが正見解の根本である。ということは、この正見解ということを聞いたときに、あるいは考えたときに即座にその思いが出てくるかどうかである。あるいはそういう思いで現象を見ることができるかどうかである。つまり、現世的なものの見方ではなくて、出家修行者として、あるいは、真理の実践者としての目でものを見てるかということである。

そしてそれにのっとり次は思索すると。この思索は、例えばこれは殺生に当たらないだろうか、これは偸盗に当たらないだろうか、これは邪淫に当たらないだろうかと思索すると。ということは、この正思惟の実践過程は、心における殺生を離れ、偸盗を離れ、邪淫を離れといったバックボーンを完成していく道である。当然心が殺生・偸盗・邪淫から遠離するわけだから、行為においても殺生・偸盗・邪淫から遠離することになる。

では、次の正語はどうであろうか。これは妄語・綺語・悪口・両舌という口の四つのカルマ

を離れ、心に、真実を語り、真理を語り、そして優しい言葉を語り、和合させるような言葉を語り、必要のない言葉を語らないという実践過程である。これはまさにデーヴァ界の神々、あるいは梵天界の神々の言葉である。だとするならば、これは同じように高い世界へと移行する言葉の統御をすることになる。

では、次の正しい生活、この正しい生活とは何であろうかと。これは勤精進をするということである。勤精進とは何かというと、日々の生活においてとにかく必要でないことをやめ、そして七覚支の実践を行なうと。覚支の目的はもともと仏陀に至るための道であるから、当然これも高い世界へのベクトルを表わすことになる。

では、次の正しい行為とは何であろうかと。これはまずグルに対する絶対的帰依の修行、あるいは真理に対する絶対的帰依の修行、あるいはサンガに対する絶対的帰依の修行、あるいは生き物を殺さないで慈しむと、偸盗しないで布施の実践を行なうと、そして、邪淫を離れ、人と親和するといった実践であると。ということは、これは何の世界を表わしてるかというと、当然梵天の世界を表わしてると。ということは、これもまさにベクトルを梵天界へ向けた修行法ということになる。

### ◉善法を増大させ、悪業を断じる

では、次は正二正勤二正断ということになる。これは、何かというと、今なしている善法を増大をさせ、そして今まだ実践できない善法を増大させることができるように思念すると。例えば、例を挙げるならば、これは詞の修行がある。詞というのは何かというと、あなた方が唱えている詞章のことである。例えば、その中にはマントラも含まれていると。今帰依マントラを唱えている人が、その帰依マントラを、一日例えば三千回唱えてる人が、一万回、二万回と唱えるように努力すると。これが今なしている善法を増大させるということである。そして、この今帰依マントラ、ヒナヤーナの帰依マントラをなしている人が、例えば、次の大乗の発願を二週間で終わらせるぞ、十日で終わらせるぞ、早く今の帰依マントラを終わり、次は大乗の発願の詞に入ろうと。これが善法を増大させるということである。今なしていない善法を増大させるということである。

そして、今なしている悪業、これを滅すると。これは例えば、ドンブリ飯をたらふく食って、その他にいろんなものに、食い物に心が動くと。これを例えば、少しずつでもやめると。ね。そして、十の戒め、あるいは三つの布施に対してできてない部分を検討し、できるだけできるように努力すると。これが、今なしている悪業を断ずるということである。そして、未来において生じるかもしれない悪業を断ずるとはどういうことかというと、例えばステージが高くなり慢に陥り、プライドに支配され、グルの意思がわからなくなり、結局真理から逸脱するようなそういう心の

働きが生じる、例えば先輩を見ると。先達を見た場合、その先達を恥じると。そして、それは自己の内側にあるプライドに対する教師であると見つめ、そして、そういう行為が起きないように、例えば努力すると。これが二正勤二正断である。ということは、これも当然カルマの統御となるわけだから、そして功徳が増大するわけだから高い世界へのベクトルということになる。

### ◉最高のデータの入れ替え

では、次の正記憶修習とは一体何であろうかと。これは例えば、経典を徹底的に記憶すると。そして、それを何度も何度も繰り返すと。あるいは、少し複雑な思索を何度も何度も繰り返すと。ということは、これは智慧の増大、そして思索の発達ということになるわけだから、これは他の日本仏教と違い、オウム真理教の教えでは知性の優秀性というのは、高い世界への転生の条件となっている。それは当然である。動物と例えば人間を比較したらどうであろうかと。あるいは、餓鬼のカルマを持っているアフリカの難民と今の日本人との知性を比較したらどうであろうかと。歴然としていると。つまり、この知性というものは徳の現われである。ということは、この今の人間のレベル以上の思索の力、智慧の力を有するということは、これも同じようにベクトルを戯忘天界、あるいは梵天界へと向ける道である。

そして最後の正サマディ、この正サマディとは完璧に人間を超え、神の世界を知り、そして梵

天界の世界を知り、ニルヴァーナを知り、マハー・ニルヴァーナを知るということになるから、これもまさに上方へ向かったベクトルということになる。ということは、例えばこの聖なる八支の道、これはまさに最高のデータの入れ替えということになる。

### ◉成就——その意味合い

実は、私は去年から、野球のイメージがずいぶんと出てきている。例えば、勝手に足が上がってピッチングフォームのまねをしたりとか、手首の返しがどうこうとかいうデータが出てきたりとか。まあ近頃はかなり収まってきてるけども。それは何かというと、よく考えてみると、私は野球というものを成就してるわけだね。それは小学校一年生から始まって、例えば野球を聞く、あるいは自分でやるといったようなことが約二十年間続いたと。平均三時間それに費したとして、二万時間以上の時間を要するに野球という身・口・意の行為によって瞑想してるわけである。では、一つの瞑想で、私は二万時間達成したものがあるであろうかと。それはまだないと、今生ではね。ということは、私が最も人間として生まれて成就したものは何かといったら、野球である。そしてそれがどんどんどん瞑想が深まって、深い深い潜在意識にデータとして根付いてると。

実は私が今死んだ場合、私は人間の世界か阿修羅（あしゅら）の世界へ転生することになっている。そして、私が人間の世界へ転生したら、来世は巨人軍のエースとして登場することになっている。いやそ

うなんだよ、これは。そのときの顔がどういう顔であるかまで、しっかりと私は覚えてます。まさに情けないと。阿修羅の世界へ生まれ変わったら、修行者として、そして王として君臨するようになるだろう。これが成就なんだよ。そして、私はそれを知ったとき、しまったと思った。これは、今のその野球のデータ以上に、人間界へ転生するときも、修行者として転生するためにデータの入れ替えをしなきゃなんないと。つまり、人間、転生となったとき何が生起するのかと、野球じゃしょうがないと。まあ、一つの瞑想を二万時間する必要はないから、とにかく瞑想のトータルをもっと多くの時間、例えば三万時間、四万時間、五万時間とやらなければ、これは勝てないなと考えました。

今日私が話したかったことは何かというと、ちょっとね、難しい話だけど、すべてはあなた方の内側にあるものが生起するんだと。例えば、私は今日、下はパンツとこのクルタと。上はジャケットとクルタとTシャツと。で、外を少し歩いたわけだけど、大変涼しい気持ちいい空間であった。ところが、君達は寒い寒いというデータがあると。これも同じように例えば氷点下何度に対して心がどう動くかということなんだね。つまり、自分の内側にあるデータしか生起しないんだということだ。そして、その内側のデータを苦しみから楽しみに、苦しみから楽に転化していくことが修行なんだよ。そして、それを達成することができるのは修行しかないんだよ。そして君達はその絶好のチャンスを得てるんだよ。これが今日、私が君達に話したかったことだ。

## ◉驚くべき布施の効果

最後に、布施の重要性、これについて一つお話をしましょう。実は、Tのお父さんが大ケガをなさったと。これはどういうことかというと、仙台支部の私の説法会に、まあ、あまり信のない信徒が四人来たと。その中の一人がお父さんであったと。そして、私はそのお父さんと、それからもう一人の女性にね、布施を勧めたと。で、お父さんは、その日仙台支部に干し柿を持ってきてたわけだけど、それを祭壇に上げようかどうかということを聞かれて、いや、それは私が受けようと言って、私が車の中に乗っけて、東京本部の方に運んだわけだけど、その途上、十一時頃、いきなり心臓と呼吸が、私の心臓と呼吸が停止して、バルドーに放り出されたんだね。そのバルドーが性欲のバルドーであったと。で、それから東京本部に着いてだったかな、着く前だったかな、たぶん着く前だね、自動車電話に電話があって、で、その四名が事故に遭って三人が即死と。そしてお父さんだけが重体だね。で、即、Tに電話をして、お父さんのところにウパーリと一緒に行かしたわけだけど、で、意識がまだあまりはっきりしないと。で、私は欲如意足を聞かせなさいといって、欲如意足を聞かしたわけだ。その理由というのは何かというと、どうもその死にかかってる人に欲如意足聞かせると効果があるんだね。例えば、名古屋の信徒の癌の末期の人で、もう死にかかって駄目だと言われた人に欲如意足聞かしたら、それから復活して、まあ、完全かどうかわからないけども意識はかなり戻ってるとかね。その今回のTの例もそうであると。で、

それと同時に、即お母さんがそれから百万円を布施したわけだけども、そういうことがあって、お父さんの意識が戻ってきてるんだね。

つまり何を言いたいかというと、布施というのはそれだけ効果があるんだということ。それから、修行というのはそれだけ効果があるんだということだね。わかるね。そして君達はより強烈なデータを入れてるわけだから、事故に遭っても死なないはず。ところが近頃事故があってケガをする人が出てきてるけど、その人達は修行してないんだと私は思います。わかるね。修行したら死なないし、ケガもしないはずです。いいね。

### ◉まず土台から

今日から布施・持戒の徹底を行ない、クンダリニー・ヨーガの成就をしている者はマハー・ムドラーに向かって全力で進みなさい。いいね。それからラージャ・ヨーガの者はクンダリニー・ヨーガに向かって全力で進みなさい。いいね。それからまだ成就してない者はラージャ・ヨーガに向かって全力で進みなさい。いいね。

じゃあ、戒が守れない場合は、どうしたらいいんだと。それは守る必要はないと。また、妙なこと言い出したね。そのときには、私が信徒に対して説法している八つの功徳の順番でいきなさい。それは何かというと、まずグルに対する帰依、これを実践しなさい。グルに対する帰依とは

何かというと、要するにグルの言ってることを徹底的に実践するということだ。それができたら次は真理に対する帰依。真理に対する帰依とは何かといったら、要するに教学をし、そして法施をするということだね。真理を広めるということだ。それができたら、次はサンガに対する帰依、サンガに対する帰依とは何かといったら、このサンガをできるだけ良くしようと、そして多くの成就者を出そうと、そして、布施、あるいはアドバイスその他の多くの功徳を積もうと。これがサンガに対する帰依である。この順番で進めていくと。そして次は、殺生をしないと。偸盗をしないと。ここまでくると、みんなが引っかかってる、例えば邪淫も乗り越えられる。邪淫が乗り越えられると、次は妄語が乗り越えられる。妄語が乗り越えられると、酒やタバコが乗り越えられるということになる。

ここで面白いと思うだろ。なぜ、例えば邪淫をしないと妄語が乗り越えられるかわかるか、君達は。妄語というものは、心が弱い状態で生じる嘘じゃないか、どうだ。じゃあ、性エネルギーを保全して、そして、帰依がしっかりできてればエネルギーが上昇し、エネルギッシュになるだろ、どうだ。そのときに嘘をつきたいと思うだろうか、どうだ。ということなんだよ。一つ一つはそういう流れになってるんだね。よって、できないときには土台から固めなさい。いいね。

# 第三話　実践的八正道と四無量心

九一年一月三日　於・富士山総本部

## ◉心をさいなむ幻影

人の心というものは、幻影にさいなまれている。この幻影というのは、一体どういうことかというと、自己の目的、自己の利益というものと相反する方向にベクトルの向きをつくってしまうということである。そして、そのベクトルの向きを本当の意味で自分自身のために向けること、それが八つの実践、そして四無量心である。

スタートから、いきなり抽象的な話になってしまった。もっとこれを具体的に表現したいと思う。

まず、人はだれでも幸福にありたいと考える。そして、その幸福という意味合いは、チャクラの示す煩悩の満足度で決まる。そして、その煩悩を満足させるための心の働きは、自己の利益と相反する方向へ現象を動かしてしまう。

例えば、おいしいものを食べたいと、たくさん食べたいと考える者がここにいたとしよう。この者は、初めのうちはおいしいものを食べ、そしてたくさん食べるという行為に走ったと。とこ

ろが、この味覚というものは、年齢とともに退化し、そして、そのおいしさを味わうことができなくなる。ところがもし、この魂が自分のおいしいと欲するものを布施したとしよう。すると、布施された対象の喜びの感覚がその布施した者の心に伝わり、そして布施した者の味覚は倍増し、人の味わえないようなおいしさを味わうことができるはずである。

例えばこれは、『ガティーカーラ経』というお経、これは『南伝大蔵経』の「中部経典」に入っている内容の中にもあるが、ずっとずっと以前に登場したカッサパ仏を供養したガティーカーラは、そのカッサパ仏に対して供養した功徳によって、二週間、歓喜の状態にあったといわれる。

では、量についてはどうだろうか。これも同じように量をたくさん食べるということは、ひたすら胃袋が下がり、そして下垂し、大量に食べないといられなくなる。つまり、それは、初めの段階では少しで満足した胃袋が、大量に量を放り込まないと耐えられないという状態なのである。もし、この大量の食糧の一部でも布施をするならば、その人の胃袋は死ぬまで健全な状態であり、ある一定の状態で満足を覚えることができるはずである。皆さんも知ってのとおり、この胃の下垂というのは、例えば副腎を圧迫したり、あるいは下腹部臓器を圧迫することにより、いろいろな病の原因ともなる。

### ◉自己の利益を離れよ

科学的に見ると、仏教の教えというものは、人を絶対的に幸福にする教えと言うことができる。それは、自己の利益、この自己の利益を離れることにより、本当の意味では、自己に利益が還元されるんだということの教えでもある。

例えば、性欲の例を取ってみよう。本来、男性にしろ、女性にしろ、長い性的快感を味わいたいと願望する。そして、その満足を得るために、いろいろなエロティックな本、あるいはビデオ等で情報を入れる。ところが、心はもう既にそこで頂点に達しているから、実際の交わりでは性的感覚を味わうことができない。もし、これが逆に真理の実践をし、徳を積み、そして、そういうデータのない状態で、本当に執着する異性と交わり、性的な行為を行なったならば、それは当然、現代の人の感じる何倍、何十倍といったような性的エクスタシーを感じることができるはずである。

つまり、これも、皆さんが求めている楽しみというものと、実際皆さんが行なっている実践というものとの間に、大きな隔たりがあることを表わしている。

### ◉嫌悪——悪魔の使い手

では、嫌悪はどうであろうか。本来人間というものは、人と、特に愛する人達と交わり、楽しみ、そして語らい、それを喜びと考えるはずである。しかし、嫌悪の情は、自己の心を閉鎖し、

そして、いいことにつけ、悪いことにつけ、ブロックすると。そして、この嫌悪の念が強くなると、相手の優しさ、あるいは相手のあったかさというものが伝わらなくなり、すべてが自分を痛め付けてるといったような被害妄想的な心の働きになり、結局自分自身を孤立させ、不幸にしてしまう。もし、法をしっかりと学び、人の話をよく聞き、受け入れようとするならば、そのようなことはないはずである。そして、絶えず人の良さを学ぶことにより、心は成熟するはずである。つまり、この嫌悪こそ、悪魔の使い手と言わざるを得ない。なぜならば、この嫌悪は、私達が本来他の魂から学ばなければならない多くの利益というものを阻害するからである。

ということは、食欲、あるいは性欲、あるいは嫌悪といったもの、これらはすべて、私達がこの修習(しゅじゅう)をし、実践することにより、何の利益も与えず、逆にマイナスの方向に向かうんだなということが理解できるはずである。

### ◉愛着の思わぬ欠点

次は、アナハタ・チャクラに対する愛着はどうであろうか。愛着というものは、自己と縁の深い者に対して、その者を独占し、そしてその独占する対象、この独占する対象にいろいろ近付いてくる者に対して、それを排斥したいと願う、つまり嫌悪とも絡んでくるが、そういう感情の働きを持たせる心の働きである。この愛着は、もっともっとその魂と親しくなりたい、もっと

もっとその魂を知りたい、もっともっとその魂と接したいというような心の働きが生じている。そして、それを根本として生起した心の働きが愛着である。ところが、その愛着は、先程も述べたように、その愛着する対象と他とを区別する、あるいは、その愛着する対象を独占したいと思う心の働きによって、その愛着する対象に対して逆にいろいろな圧力をかける形になる。これはちょうど舟を岸に着けたいと考えていて、竿で舟を押すようなものである。つまり、力を強く入れれば入れるほど、舟は遠のいてしまう。

本来、一つ一つの魂というものは、自由でなければならない。ということは、その自由を尊重されてこそ、本当の意味での和合というものが成立するはずである。ところが、例えば親子関係において、例えば兄弟関係において、例えば夫婦関係において、例えば友人関係において、この愛着のディフェクトというもの、欠点というものに陥りがちである。よくこれについては気を付けなきゃならない。

### ◉権力——その衣を脱ぎ捨てたとき

では、次に、権力に対する指向とはどうであろうかと。私達の権力に対する思いは限りない。なぜならば、その権力というものは、権力によって多くのものを満たしてくれる。しかし、この権力は、私達の着ている服にたとえることができる。つまり、これは、いつまでもその座に就く

ことができないということなのである。例えば、生まれ、王子として成長し、王様となり、死んでいくと。しかし、死んだときには、この王様という衣を脱ぎ捨てなきゃならない。その王様という衣を脱ぎ捨てたとき、果たしてその人が平常心でいられるかどうか。つまり、権力という乗り物を使わないでその人が幸福でいられるかどうかということ、これが最も大切なことなのである。そして、権力とは衣であるということを、権力というものは乗り物であるということを理解したならば、その権力は、すべての衆生を利する最高の衣、あるいは最高の乗り物ということになるであろう。しかし、その権力と自分自身、服と自分自身、あるいは乗り物と自分自身とを同一であると考えるならば、この人はまさに死というものを直前にし、あるいはその権力から追われたとき、その苦しみは計り知れないものになるであろう。

それはちょうど、別の表現で表わすことができる。大変な寒冷地、例えば氷点下三〇度とか、四〇度といったような、例えば北海道の北端。この真冬を想像していただきたい。ここに、大変暖房の効いた家があると。そして、その中で生活をしていると。この人は、こう考えた。「私は、北端で、マイナス三〇度、四〇度のところで、平気で生活することができる」しかし、本当にそうであろうか。この人が生活をしているのは、マイナス三〇度、四〇度という外界と違い、暖房にあったためられた、二〇度、あるいは二五度といったポカポカの空間で生活しているということになる。権力とは、この家にたとえられる。そして、本当に幸福を願うなら、この家を取り払っ

た状態、三〇度、マイナス三〇度、マイナス四〇度といった中で、暖房を使わず生活できるかどうかということなのである。

そして、そういうことを培っていくこと、これが真理であり、これが仏教なのである。

### ◉捨の精神——ひたすら今をつくり上げよ

では、徳の現象についてはどうであろうか。この徳の現象は、私達を現世において、いろいろと満足させてくれる。そして、現世的な願望というものは、すべてがかなうということになる。しかし、この徳もまた幻影なのである。なぜならば、徳を積まず、徳を使い続けると、必ずその徳は切れ、そして喜びから苦しみに転落するからである。

これはちょうど、冷暖房機にたとえることができる。ある時期、暖房を入れる。しかし、その暖房機が壊れて、次のスイッチが入るとき、それは冷房機となると。しかし、もしこの暖房機を絶えず修理し、チェックし続けるなら、長い間、その暖房の恩恵に預かることができるであろう。これが、功徳の特徴なのである。よって、この功徳の現象に対して、頓着をすべきではないのである。

そして、四つの無量心の最高の心の状態は、無頓着、捨の精神だといわれている。真理でいう捨の精神とは、こういうバックボーンをもとに説かれた教えなのである。つまり、今味わってい

る苦楽というものは、過去、あるいは過去生の私達の言葉・行為・心の働きという三つが重なり合って現象化しているにすぎないと。ということは、今味わっている喜び、あるいは苦しみというものは、今、この瞬間とは無縁なのである。つまり、これはあくまでも過去の幻影であり、現在の結果ではないのである。

よって、すべての魂を救済する大乗の仏陀になるためには、この無頓着、今なされている苦しみ、あるいは楽に対して、一切頓着せず、ひたすら今をつくり上げていくということが大切なのである。

### ◉仏教は未来志向

ここで、出てくるのが、二正勤二正断なのである。つまり、これはどういうことかというと、今、瞬間瞬間を全力で生きる、あるいは未来を全力で生きることこそ、仏教の真義だからなのだ。そうだね。だって、過去の幻影を今味わってるわけだけど、この幻影は、過去のあくまでも幻影であって、私達の未来に何の恩恵もない、そうじゃないか？ それよりも、今、瞬間瞬間を二正勤二正断の実践により、今なしている善法を増大させる、そして今まだ徳がなくてできないけど、未来において徳が備わったら、絶対にこの徳を積むぞという、徳を増大させるように意識する。そして、今なしている悪業を断ずる。そして、未来において生じるかもしれない悪業を出ないよ

うに心がけると。これは、どうですか。未来の私達の楽を決定するものだと思わないか。ということなんだよ。つまり、仏教というものは未来志向なのであると。

### ◉覚者となるための七つの土台

では、そのためには、一体どういう行ないをなせばいいのかということになってくる。これは、まず、何が真理で何が真理でないかを、ひたすらデータを入れるということから始めなければならない。この、何が真理で何が真理でないかを何度も何度も繰り返し、データを入れなければ、私達は過去世からの幻影によって、過去世からの錯綜によって、ものを正確にとらえることができなくなっている。よって、ひたすら記憶修習をすべきなのである。

そして、今何の修行をなしたら最もメリットがあるのか、これを次は選択しなければならない。例えば、初心者があまりにも難しい瞑想をなすとか、あるいは修行の進んでる者が、簡単なマントラを唱えて、自分は修行しているんだと錯覚するとかいうことは、その人の修行を挫折させたり、あるいは進まなくさせたりする要因となる。よって、この二番目の何を選択するのか、これは最も大切な仏陀へ至る道の一つということになる。

そして、三番目は、決めた修行に対して勇敢に修行を進める。そして、たゆまず修行を進める。これが必要なのである。これを勤精進、あるいは勇気をもって精進するといわれている。これが、

第三の仏陀の心を支える、仏陀の心をつくっていく修行なのである。

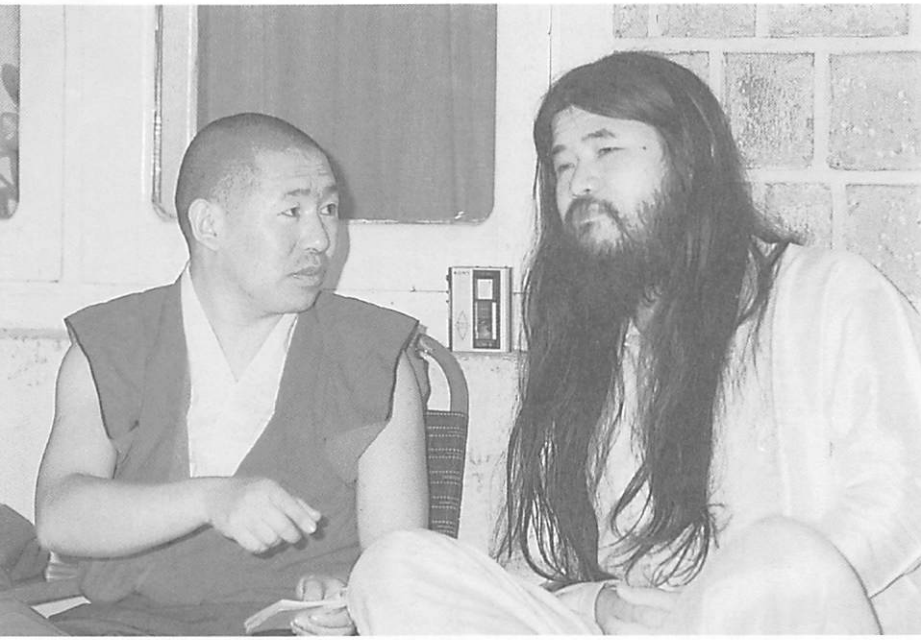
そして、第四番目は、「ああ、今日は疲れたな」と言いつつ修行するのではなく、「うれしいなあ、自分は修行してうれしいなあ」「自分は修行できることがうれしいなあ。自分は教学できることがうれしいなあ。徳を積むことがうれしいなあ」という、この修行に対して、ただひたすら喜びを持ち続ける修行、これを実践しなければならないのである。

そして、生活のリズムをしっかりとつくり、心身が軽快になるように、修行によって軽快になるように組み立てる修行。これが、第五の私達の仏陀に至るための土台を培う修行なのである。

そして、この五つを達成し、ある程度固まったならば、次はしっかりと自分の内側を見つめる。そして心を静め、心を止め、観察する。そして、どういう煩悩があり、自分はどういう世界へ転生するのか、あるいはどういう、自分自身は思考のパターンを持っているのかをしっかりと理解すると。これが第六番目の私達が仏陀になるための土台となる修行なのである。

ここで、問題になってくるのは、例えば一番目の、何が真理で何が真理でないのかということを理解できてないと、この六番目、この観察の智においても当然ズレが出てくる。

例えば、現代人は、膨大な時間を使って、マンガ・アニメ、あるいはテレビ・映画・雑誌等のデータを入れている。そして、こういうデータは、私達の知らないうちに深い意識に根付き、このデータをもとに判断をするという謬見解を培うことになる。よって、その前に、ひたすら何が



真理で何が真理ではないのかの記憶修習をなさなければ、このサマディというものが、全く無効になってしまうということなのである。

そして、先程も述べた、例えば嫌悪・性欲・食欲・愛着・権力、あるいは現世の願望成就といったようなもの、こういうものに対して一切頓着をしない、頓着しないでただひたすら修行を続けるということ、これが七番目の大乗の仏陀に至る土台なのである。

なぜかというと、先程も述べたとおり、現在という瞬間は、幻影である。これは、過去、あるいは過去世の私達のカルマが生起し、現われてる状態を表わしている。その現在の幻影にとらわれ、それにより再びまた悪業を積み、あるいはそれに溺れ、功徳を積まない状態をつくってしまうならば、その人の現在から投影された未来というものは、また不幸ということになる。よって、現在を無視しなければならないわけである。これが、正生活、正しい生活なのである。

### ◉苦を与えれば、苦が返る

では、私達の身・口・意における、まず身の行ないの統御については、何をなせばいいのであろうかと。例えば、私達が殺生をする。例えば、相手に苦痛を与える。苦痛を与えると、その苦痛のヴァイブレーションは、シャクティーパットと同じで、自分の内側に内在される。ということは、苦の総量は一定なのである。苦の総量が一定だということは、相手を苦しめたそのデータ

というものは、必ず自分に入ってくるわけである。すると例えば、小さな虫達にも当然苦しみというものはあるから、その苦しみの総量が私達に伝わってくる。もっと徳の高い大きな生き物は、その苦しみの量が多いから、その苦しみのデータというものは、私達のコーザルにしっかりと根付かされると。逆に、生き物を安らがせるということは、その生き物の喜びというものが私達の心に根付かされるから、これは私達の喜びという形で返ってくる。この理法を理解するならば、殺生を離れ、すべての魂を安らがせることの偉大さに気付くであろう。

次は、偸盗である。人の心というものは、必ず、その人の所有してるものに対して愛着している。あるいは、執着している。ということは、他の者の所有を盗むということは、その人に、その執着からくる苦しみを与えることになる。よって、偸盗をした段階で、その持ち主の苦しみが伝わってくることになる。そして、これは、逆に自分の執着しているものを奪われるという形で苦しまなければならないのである。よって、他に対して物を施し、盗まないということは、これは、だれの利益でもなく自己の利益なのである。

同じように、邪淫がまさにそれである。これには、正確に言うと二つの意味合いがある。その第一は、性エネルギーを漏らすことにより、徳の消耗をし、疲弊するということである。そして第二は、これは仏教的に、一般的にいわれている邪淫だけども、これは、他人の妻、あるいは他人の夫を寝取るということなのである。これは、先程も述べたとおり、他人の妻、あるいは他人

の夫というものは、その夫婦関係において必ず愛着し合い、あるいは独占し合おうという心の働きがある。その、独占し合おうという心の働きに対して、強烈なダメージを与えるわけだから、当然、その苦しみというものは、その対象者に向かってくる。そして、その苦しみをしょうことにより、未来において苦しまなければならないというカルマをつくるのである。

よって、正行為の原則というものは、殺生を離れ魂を慈しむ、偸盗を離れ物を施す、邪淫を離れ、そして本当に心からの友情を培うということになる。

### ◉言葉の統御をなせ

では、言葉についてはどうであろうか。まず、妄語がくる。この妄語というものは、ものを覆い隠したいと考える心の働きが増大される。この心の働きは、私達のカルマの顕現化を遅くする。つまり、一種の、そこで袋、あるいは箱を作ったような形になる。ということは、その嘘が多ければ多いほどカルマの現象は遅れることになる。カルマの現象が遅れると、カルマの理法が理解できなくなり、悪業を多く積む。そして、それによって、結局その悪業が現象化するときは、取り返しのつかないようなカルマの清算となっている。これが妄語なのである。よって、真実を語るということは決していいことではない。このいいことではないとは何かというと、何か私達にいいことが返ってくるということではなく、すべてのものの現象が、はっきりありのままに見え

るということなのである。

では、綺語はどうであろうか。この綺語というものは、心の働き即言葉という、つまりコーザル即アストラルという、この流れを変えてしまう。つまり、心にもない言葉を大量に語ることにより、アストラルに心と関係のない、いらぬものがたくさん生じることになる。ということは、心で思ったことが現象化せず、屈折を生むわけである。ということは、この綺語は、私達がものを達成していく上において最も大きな障害ということになる。

では、悪口はどうであろうか。これは、殺生と同じである。つまり、悪口を放つことにより、相手に苦しみを生起させる。そして、その苦しみのヴァイブレーションは、自分の心に返ってくるのである。

ということは、綺語を話さず、真実だけを語ると。そして、悪口を語らず、人に優しい言葉を語るということは、それだけで私達に大きな恩恵があるのである。

仏典で、悪口により地獄に落ちたという例があるが、これはまさにそれである。つまり、これは殺生と同じ――形態は違うがね――カルマの返り方をするわけである。

では、両舌はどうであろうかと。この両舌においては、必ず嫉妬心というものが、心の背景にある。そして先程も述べた、その嫉妬心の背景には、また嫌悪という心の働きがある。ということは、どんどんどんどん自分の世界を小さくしていくということになる。そうだね。嫌悪は壁

でしょ。ということは、この両舌は、人と人とを仲たがいさせ、それと同時に自分の世界を小さくしていき、最終的には自閉症になるということになる。

ところが、人と人とを和合させる、この言葉の実践をなすならば、心が豊かになり、壁が取り払われ、多くのいろんな人と交わることができ、そして、いろいろなことを学び、魂が成長するということになる。

ということは、妄語・綺語・悪口・両舌というこの行為、この言葉の行為は、これは私達を不幸に陥れるものであり、真実を語り、必要のない言葉を語らず、人に優しい言葉を語り、人と人とを和合させる言葉を語るということは、私達の心の病を取り除き、私達の心を広大にしていくということになる。そして、これを正語というのである。

### ◉教えをもとに、検討する

では、八正道の原則である、正見解、正思惟とは何であろうかと。まず、この正見解とは、仏陀の教え、グルの教え、この教えをただひたすら学ぶということである。ここで、考えてはいけないということである。なぜならば、先程も述べたとおり、私達が私達と呼んでいる思考は、小さいときから両親によって植え付けられたもの、兄弟によって植え付けられたもの、あるいは社会的環境によって植え付けられたもの、例えばマンガ・雑誌・テレビ・アニメーション・映画

等である。そして、これを私達は私達と考えている。ところが、今から二千五百年前登場した仏陀釈迦牟尼（しゃかむに）の教え、あるいはそれより以前にあったインド・ヨーガの真実の教え、あるいは二千五百年から現在に至るまでの多くの聖者方が修行して得た結果の教えといったものは、これは普遍的な教えなのである。それは、なぜかというと、「無常」、だれが見ても絶対にそうだとわかる基本的原理を背景として教えているからである。

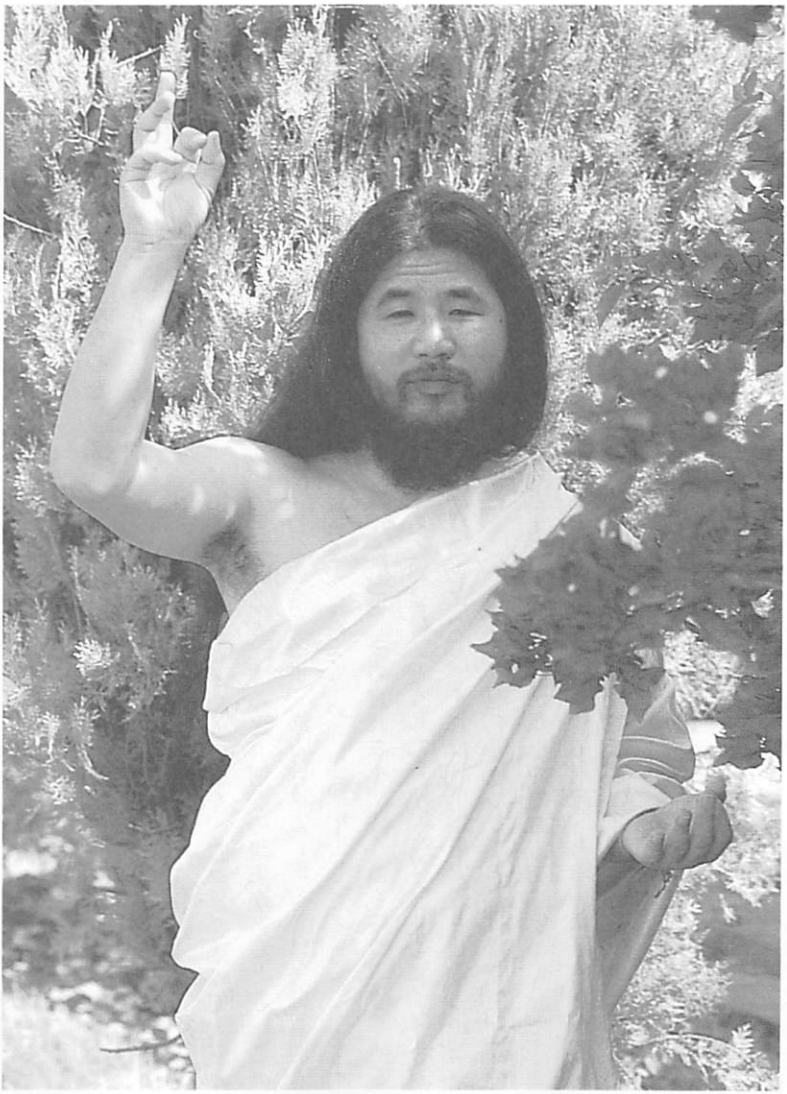
よって、まず、この正見解というものは、自分の考えを捨て、ひたすら学ぶことから努力すると。そして、例えば、『マハーヤーナ』だったら、五回くらい必ず読み、そして熟読すると。これを熟読して、初めて正見解のベースができたということになる。

次はそれに基づき、自分自身の身の行ない、口の行ない、あるいは心の働きについてチェックを入れると。これが、正思惟なのである。つまり、正見解、正思惟というものは、仏典をもとに、あるいはグルの教えをもとに、自分自身を検討していくプロセスなのである。ということは、先程の正語、あるいは正行為、正生活といったようなもの、これが仏典の基本的な教えであり、そして、その背景というもの、バックボーンというものも、皆さんは理解できたわけだから、これから正見解に立つならば、それを実践しなければならないということが理解できるはずである。

## ◉そしてサマディへ

そして、その次の正記憶修習。この正記憶修習というのは、一度、二度、三度、四度、五度ではなく、例えば自分がなさなければならない瞑想を、十万回、あるいは百万回といったレベルで、何度も何度も記憶すると。この、なぜ何度も何度も記憶するかというと、これが一定の回数になると、私達の表層意識から潜在意識に入り、そして潜在意識から超潜在意識へとデータが流れていくからである。そして、この正記憶修習をなして、初めて私達が深い意識へ到達したとき、その正記憶修習をなしたものが、乗り物となり、いいですか、乗り物となり、私達をいろいろな神秘の世界へと案内するわけである。ということは、その前に、正記憶修習のなされないような禅の瞑想というものは、私達に利益を与えないということになる。あるいは、単に勤行だけにいそしんで、つまり読経だけをしている場合は、これはその後の寂止、正観の正サマディというものがないから、これも正確に観察できないということになる。つまり、詞章、あるいはマントラの修行というものがあって、初めてその次の寂止、正観のサマディに入ることができるわけである。そして、このマントラ修行、詞章の修行だけではなく、日々の生活において、心・言葉・行為の統御をする。特に、言葉と行為の統御をすることが大切なのである。

これが、八つの聖なる実践、八正道と呼ばれるもののすべてである。



## ◉四無量心——広大で深遠な心を

では、次に四無量心、これはなぜ実践しなければならないかということになる。例えば、「ホー、湖面に映る虚像のような様々な幻影に引きずられ、輪廻の大海を浮沈する生き物達。彼らすべてが絶対自由・絶対幸福なるマハーヤーナにて安住することができるよう、四無量心込めて大乗の発願をいたします」と。このマントラを十万回唱えると。すると、何かの現象があるとき、このマントラが浮いてくると。そして、例えば、自分の妻、子供、あるいは夫、あるいは父母、あるいは友人といったものを見たとき、なんて哀れなんだろうという思いが生じてくると。まず、これが心の生起、これが慈悲の悲なのである。そして、その哀れみを、強く強く持つ、強く強く持つだけではなく、この人を本当に幸せにするためには、どうしたらいいんだろうかと考えなきゃならない。すると、おのずと結果は一つということになる。それは、真理を実践させるしかないなと。真理を実践していただくしかないなと。この人は、真理を実践してこそ、初めて今の苦しみから脱却することができるんだと。こう考える思い、これが悲なのである。

では、慈愛とは何であろうかと。この慈愛とは、例えば愛着する対象、あるいは好感を持つ対象に対して、その好感を持つ対象が、もっともっと幸福になってほしいと、本当の意味で幸福になってほしいと思う心の働きである。ということは、これも一つしかない。それは、絶対的自由・幸福・歓喜を相手に与えること、無常を超越した歓喜を相手に与えることなのである。確かに、

無常から常に至るときに、相当多くの苦しみを対象に与えることになるかもしれない。しかし、それは、ちょうど病を治すとき、手術が必要なように、あるいは注射が必要なように——多くの私達の友というものは病んでいる。よって、その病を治すとき、そこに苦しみが生じたとしても、それは、逆に喜びとして、つまり、その人の心の成熟の喜びとして、見守るべきなのである。

そして、この慈愛、そして悲の実践、これは私達の心を大きくしてくれる。そして、視野を拡大してくれることになる。

ところが、この慈愛・悲しみといったようなもの、悲といったようなものは、どちらかというと、対象が自分よりもレベルの下の者に向けられる心の働きなのである。自分より優れた者、あるいは自分と同等の者に対しては、どのようにしたらいいか。それは、称賛の瞑想。そして称賛の実践こそ、私達の心を広大にしてくれるのである。つまり、もし、対象を称賛することができるなら、心は自然とその人の良さを学ぼうとする。そうだね。ところが、対象に対して闘争本能を持ったり、嫉妬心を持ったりすると、その人の欠点を一生懸命見つけようとし、そして、それと同時に心はどんどんどんどん屈折してくる。そうだね。よって、第三番目の実践、この称賛というのは、自分と同等、あるいは自分よりも優れた者に対して行なうべき、真理の実践者の実践過程なのである。

そして、第四のパターン、これは、先程も述べた、この現実、この現象、今というものに対し

て頓着しないということなのである。この今というものは、だれも、どうすることもできないのである。つまり、それはどういうことかというと、この今というものは、過去世から、あるいは今生の過去において培った私達の善業と悪業との集積が今なのである。

### ◉六つの極限との関係は

そして、今から二千五百年前、原始仏教において、出家が称賛されたのはそこにある。つまり、出家というものは今の苦しみから逃れることができる。そして、ひたすら善法を増大させることができる。善業を増大させることができる。初めのうちは、逃れていてもカルマの返りにより、少しずつ少しずつ苦しみが現象化する。しかし、それがある段階になると、善業しか積んでないから、あるいは善法しか実践してないから、その苦しみがなくなったとき、その魂の五蘊、つまり肉体・感覚・イメージ・意志・意識というものは、善の集積、功徳の集積になるのである。そして、その段階でサマディに入り、そして高い世界をすべて認識し、この人間界がいかに低い世界であるかを認識し、この人間界に対する愛着を捨て、ニルヴァーナ、あるいはマハー・ニルヴァーナへと入っていくのである。

これが、実践的八正道、そして四無量心のすべてである。

ということは、この八正道、あるいは四無量心というものは、六つの極限と何ら変わらないこ

とになる。そうだね。これを六つの極限に当てはめるならばどうなるかというと、まず、三つの布施、財施・法施・安心施という三つの布施によって、功徳を積む。そうだね。次に、持戒を守ることによって、言葉・心・行為の統御をする。そうだね。そして、三番目の忍辱、ね、耐え忍ぶ修行によって、無頓着の心を培っていく。そうだね。四番目の精進の実践によって、今の善業よりもっともっと大きな善業を形成し、そして悪業を止滅する。そうだね。そして五番目の瞑想のステージ、サマディのステージによって、その培ってきた私達の五蘊をじっくり観察し、そして私達の悪業の部分、あるいは善業の部分をチェックし、そして悪業の部分はまたひたすら落とすと。そうだね。そして、最後、智慧、六神通に到達すると。そうだね。

ということは、八正道、あるいは六つの極限、これは全く同じなのである。これが、私の悟り得た八正道であり、私の悟り得た六つの極限であり、私の悟り得た四無量心である。

私は解脱し、人間を超えた

# 八正道体験談集

## ❖ ウッパラヴァンナー ❖

私は、オウム真理教に入信し、そして出家し、麻原尊師の説いていらっしゃる真理の法に基づいて、すべての現象を見つめ、考える実践をしてきました。その法とは、生ずるものは必ず滅する——つまり、私達は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられないという事実、あるいは、なしたことが返ってくるというカルマの理論、苦は存在し、苦は生起するものであり、苦は滅尽できるものであり、その滅尽に至る道（方法）があるという四つの絶対的真理、などのことです。

現世にいた頃の私は、カルマの理論を知るよしもなく、世の中の矛盾に取り組もうとしては挫折し、絶望的な心の空虚感にしばしば襲われていました。それによって、前向きに生きることがだんだんと苦痛となり、消極的な人生を選び始め、自分自身の心を奥深くしまい込んでいったのです。しかし、オウムに巡り合い、尊師の真理の法に目覚め、今まで抱いていた疑問が、霧が晴れるように解消し、心が快晴のようにすがすがしく広がったのです。カルマにおいて、すべては

平等であり、努力は必ず報われるのだとわかりました。すべての生類がお互いを慈しみ合い、高め合う、あきらめていた理想の環境が実現できるかもしれないと知りました。そのときの歓びは、今も忘れられません。それからの私は、尊師の真理の法に沿って物事を見、思索するという正見解、正思惟の実践をするようになったのです。

また、正語の徹底により、それまですぐに喉が腫れ、熱が生じていたのがなくなり、嘘からくる心の緊張から解放されました。さらに、自己のことのみを考えることよりも、他を思いやるという心に変化していったのです。これは、私にとって大変うれしいことでした。

この正語の実践に加えて、殺生をせず、生き物を慈しむ、貪ることなく施すことなどの正しい行為の実践により、心はどんどん重く暗い煩悩から離れ、現世の瞬間的な喜びを追い求めることよりも、尊師の説いていらっしゃる絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界、マハー・ニルヴァーナへと心は向いていきました。正生活である出家生活が送れることの貴重さをしみじみと感じ、尊師に対して常に深い感謝の念を感じるようになりました。

その結果、私の潜在意識、あるいは超潜在意識に根付いている煩悩に対して、次第に抵抗力を強め、尊師の偉大なる導きによって、一九八七年にはラージャ・ヨーガ、一九八八年にはクンダリニー・ヨーガ、一九九〇年にはマハー・ムドラーの成就を授かり、煩悩の本質を見、超えることができたのです。このマハー・ムドラーの修行において、私は、真理のデータである経典、あ

るいは尊師の説法を日々繰り返し修習することにより、雑念から解き放たれ、寂静の境地に達し、集中力を増しました。そして、正しいサマディに導かれ、大いなる空の体験をし、輪廻のからくりを知って、尊師の世界観、教えが真理であることを確信したのです。

普通、私達は、この人間界と動物界のみしか見ることはできません。しかし、私は、尊師の指導される正しい瞑想修行によって、地獄界、餓鬼界など経典に記されているような様々な世界を旅することができました。尊師の説かれる世界観が真実であると確信した理由には、これらの実体験が大きな要素となっているようです。皆さんにも、その真実の世界を少しでも知っていただくために、修行中の瞑想体験の一部をここに書き記したいと思います。

欲六界の最下位にある地獄。ここは、苦痛のみの世界です。生き物を殺すことを喜びとしたり、脅かして遊んだり、恐怖心を抱かせることに心を費やしている魂は、この地獄に赴きます。

そこは、自分よりも大きな獄卒がいて、鈍い黄金の鎧をまとい、両手には大きな鋭い刃の付いたサーベルと三叉戟を持っています。そして、自分は身体が固定され、全く動けない状態になり、その獄卒が自分に少しずつ近付いてくるのです。当然、自分を殺しにやってくるということがわかっていますから、その少しずつ近付いてくるときの恐怖は、頭がおかしくなる寸前、つまり発狂寸前にまで高まり、その状態の中でサーベル、三叉戟によって身体をバラバラに刻まれるのです。その後、また身体は復活し、固定され、再び獄卒が近付いてくる間、極限の恐怖に襲わ

れ続け、殺されるというパターンを、その魂が他に対して与えた恐怖の総量に達するまで、終わることなく繰り返されます。

次に、貪りの心が強いとき、私達は黄色い光に包まれ、満たされることを知らない貪欲な心によって形成された世界に行きます。その世界の住人は、ただおなかを満たすことのみに集中しており、それによって目が飛び出て、口は大きく裂けています。身体は赤茶け、おなかが前に大きく張り出ており、その他の部分は骨と皮のみのガリガリの身体です。たとえるならば、アフリカで飢えに苦しんでいる人達の様子が、テレビなどで紹介されますが、ちょうどその中にいる子供の目がもっともっと大きくて飛び出し、口が耳まで裂け、手足の皮はしわができ、しなびている状態に似ています。彼らは、食べ物が少しでもあると、我こそはというすごい勢いで、その少々のおにぎり等を奪い合うのです。しかし、その食物を得たとしても、食べたいという気持ちが強過ぎて、喉に通っても通った気持ちも生ずることはなく、次の瞬間にはさらに強い貪りの欲が心を支配し、満たされることのない苦しみに身を置かなくてはならないのです。これが餓鬼と称される欲六界の下から二番目の世界の様子です。

また、善業を積み、持戒を守り、功徳に満たされた時、天界の白い光が現われます。その光に入った私は、戯忘天に行きました。そこでは、女性は一人残らず美しく、赤や黄など彩りの鮮やかな衣装を身に着け、和やかに過ごしているのです。私が行ったところは、デパートのような建

物があり、その一階ごとに様々なものが置いてあるのですが、人間界のデパートとはかなり様子が違います。例えば、そこにある風景画に注目すると、その風景が広がり、その世界を楽しむことができたり、単なる置き物としか見えないものでも、それに目を向けると、大きくなって動き出したりするのです。遊園地をもっとダイナミックにしたようなところでした。そこには女性のみならず男性もいましたが、やはり美しく、そこに集っているすべての人々は、それぞれが心ゆくまで楽しんでいるのです。

心は、神聖天へと傾き、神聖天にあこがれ、集中した私は、黄金と白銀の光のうねりが透明光をまといながら立ち昇っているのを見つけました。そして、その光の中へと入っていったとき、その世界には、ギリシャ神話の神々を思わせるような長い巻毛、髭の豊かな人物がいて、白い衣を足元までまとい、ゆったりとした物腰で私を迎えてくれました。そこには、数多くの書籍が並んでいて、私はそこから欲六界に関する本を貸していただいたのですが、その本には、それぞれの世界を構成する様々な心の働きが記されていました。驚いたことには、その一つ一つの心の働きに、聞いたこともないような名前がつけられており、心が一つの形ある物として表現されているようでした。その方々は、大変静かで、かといって冷たいヴァイブレーションはなく、とても聡明な印象を受けました（この神聖衆天への旅は時間にすればたった二十分のことでしたが、得たものが多く、いつの日か再び赴きたいと思っています）。

そして、戯忘天を超え、神聖天を超え、大いなる空に没入したとき、心は寂静の中にあり、輝くばかりの透明光に包まれます。その満ち足りた空間の中で憩うとき、私の心は歓喜を得て、偉大なるグル、シヴァ大神に心から奉仕したいと思うのです。

私のこれらの瞑想体験は、決して特別なものではありません。麻原尊師の説かれる教えに基づいて修行すれば、だれでも体験できることなのです。私は、一人でも多くの魂がこの絶対なる真理に出会い、真実の体験をし、本当の幸福を得てほしいと思います。

「すべての魂がマハー・ニルヴァーナに入るまで」という偉大なるグルの救済が終わるまで、僕としてお仕えできることを祈って——。

ヴァジラ・ナマ・マハーグル・アサハラ・シヴァ・サティアン

（九一年四月現在　二十五歳）

## ❖プンナ・マンターニプッタ❖

私は、五年前、偉大なる真理勝者、麻原尊師に巡り合い、尊師のもとへ弟子入りした。出家制度確立に伴い出家し、偉大なるグルに信と帰依を培い、功徳を積む場と真理を実践する場を与えていただいた。八正道を行ずることのできる環境を得ることができたのである。

このことによって、私は、偉大なるグルの真理の法を学ぶ機会に恵まれた。尊師の法は尽きることのない宝の山のようなものであり、この法の修習によって、正しい見解を少しずつ具足することができた。そして、次に、その法にのっとり思索するという正思惟の実践ができるようになった。三番目の正語において、妄語・軽薄語・悪口・両舌という四つの口のカルマの果報を知ることによって、賛嘆、愛語を語るようになり、時に無言の行において心を静め、口を開けばグルの偉大さを、真理の法の話をするようになった。そして、サマナ生活において、煩悩的生活から少しずつ離れ、正生活の実践に入らせていただくことができた。正記憶修習においては、

サマナ生活そのものが、日々けがれたデータと真理のデータの入れ替えであったと言えると思う。

これらの実践を行なった結果、最終的にマハー・ムドラーの修行において、徹底的にデータの入れ替えを行ない、グルのお力によって——そう、グルのお力以外の何物でもない、偉大なるグルの愛と力によって私はサマディに導かれた。

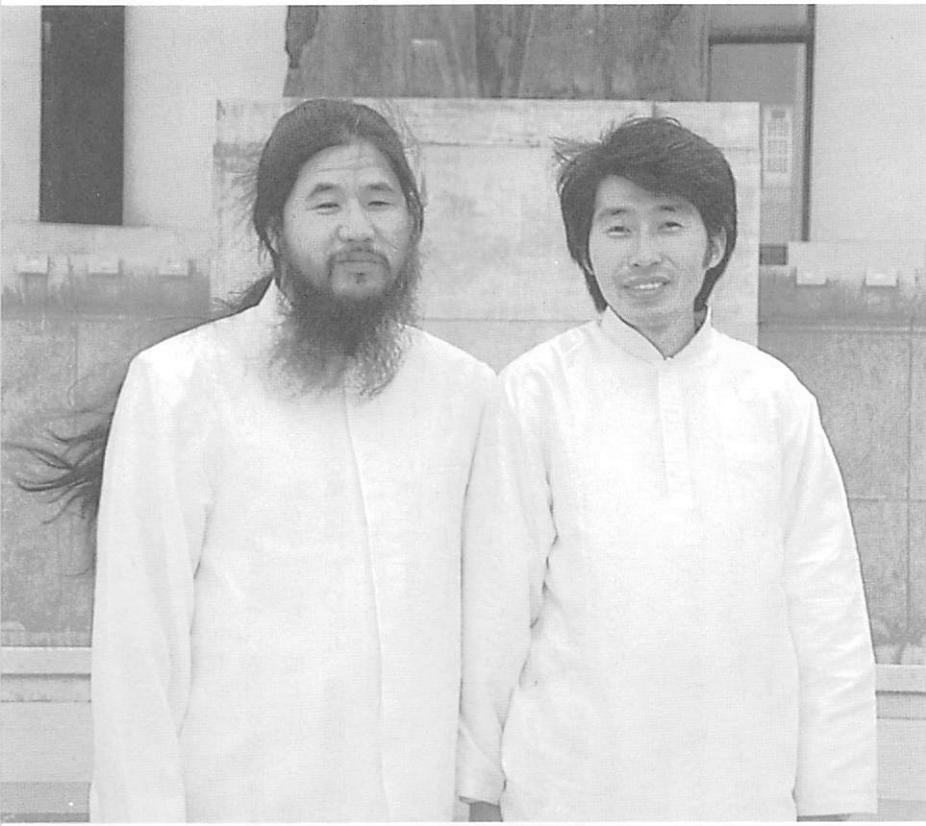
サマディ——それは素晴らしい体験である。このサマディにおいて、煩悩が崩壊した瞬間を少し書き記そうと思う。

マハー・ムドラーの修行における瞑想中、煩悩が次から次へと浮いてきた。それは、まさに煩悩という「もの」であった。「もの」としか言いようがない。何か「形のある物のようなもの」と表現した方が正確かもしれない。それが、浮いた瞬間、綜制(そうせい)を加えずとも勝手にバラバラになって落ちていった。一番引っかかっていたものに対してはもちろん綜制を加えたが、これもズバーッと面白いように落ちていった。

執着が、嫌悪が、無智が、そしてプライドが、権力欲が、慢が、うたかたの泡のように、浮いては消えていった。

そして、いつしか、私の心は静止した。目をつぶっても周りは輝いていた。外的情報に一切心が乱されず、静止したままである。

オール　イズ　ストップ。ストップ。



その状態がキープされたのだった。

この煩悩が落ちた体験の後、私は不動心を得た。例えば、プライドについてお話しすると、プライドが出てもおかしくないような外的環境の中にいて、止まっている自分を認識することができるのだ。心が外的情報に流されないのである。心が動かないから、他と比較し、普通だったら自分より劣っている者に対して優越感を生じるような場面においても、優越感を感じない。自分より優れた人に対しても、比較して卑屈にならない。自己と同等の者に対しても、闘争心を持つことなく、同じ魂のレベルで、カルマの分析をするばかりである。

そして、このように心が動かなくなった分だけ、冷静な判断力、カルマについての分析力が身についた。また、修行レベルが上がるにつれ、神通力もそれなりについてきた。一例を挙げるなら、『般若心経』に説かれている「色即是空」の状態がある。心で思ったことが現象化するということだ。肯定的なこと、否定的なこと、双方ともそうである。願望成就の非常に強力なものと思っていただければ、わかりやすいだろう。私は、この力をグルの意思、つまり苦悩する魂の救済のために向けようと日々心がけている。

マハー・ムドラーの成就——この素晴らしい境地。これは言うまでもなく偉大なるグルから与えられたものである。そのグルの意思を実践するために、私はこの成就後、それまで以上に全力で頑張ろうと心を新たにした。

人は、だれもが苦悩し、だれもが真の愛を求め、愛に飢えている。自由を求め、幸福を求め、歓喜を求めている。しかし、そう願っていても、ままならず、何もなす術がない。「私の愛は、私の自由は、私の幸福は、そして私の歓喜はどこに存在しているのだろうか?」と、皆心の中で叫んでいる。そして、外的なものに欲求を向けている。しかし、それは不幸を生むだけだ。すべては、自己の内的な空間にのみ存在しているのである。

私達は、自己が幸福になるように心のベクトルを向けず、欲望にとらわれることで、自分で自分の首を締めてしまっている。欲が欲を生み、加速度的に大きくなっていく。そして、カルマがカルマを呼び、いつしか本質を見失ってしまうのである。

グルとの出会いは、そしてオウム真理教での真理の実践は、そして出家とは、これにブレーキをかけるようなものだ。グルに対して信と帰依を培うこと、布施をなし、戒を守り……、在家においては六波羅蜜の実践をすること。これが唯一、私達がカルマから解放される道であり、八正道は出家を勝ち取った者が実践できる制動の道である。

オウムにおける真理の実践は、初めはあまりブレーキが効かないかもしれないが、いつしか強力な制動力となって、煩悩を、そして六道のカルマを破壊し尽くすほどになるのだ。

六道の苦しみは、想像を絶する。無始の過去から輪廻を繰り返してきた膨大な時を思うとき、六道の悲しみが、たとえようもない輪廻の悲しみが押し寄せてくる。

――私は、マハー・ムドラーの激しい修行中、よくこう思っていた。修行が明けて出たら、絶対頑張るぞと。六道で苦しむ魂を絶対救うんだと――。それは、取りも直さずかつての自分自身なのだから。

輪廻の大海を浮き沈みするかつての私を救うために、さらにステージを上げ、全力で真理の実践をしたいと思う。

偉大なるグルよ、まだまだ未熟なる魂であるがゆえに、どうぞ最終解脱へ至るまで、永遠にお導きくださいませ。

救済とは、
この世で最も美しい魂の叫び。
救済とは、
この世で最も美しい心の動き。
最も美しい愛の表現。

そして、救済――それこそがグルの意思。

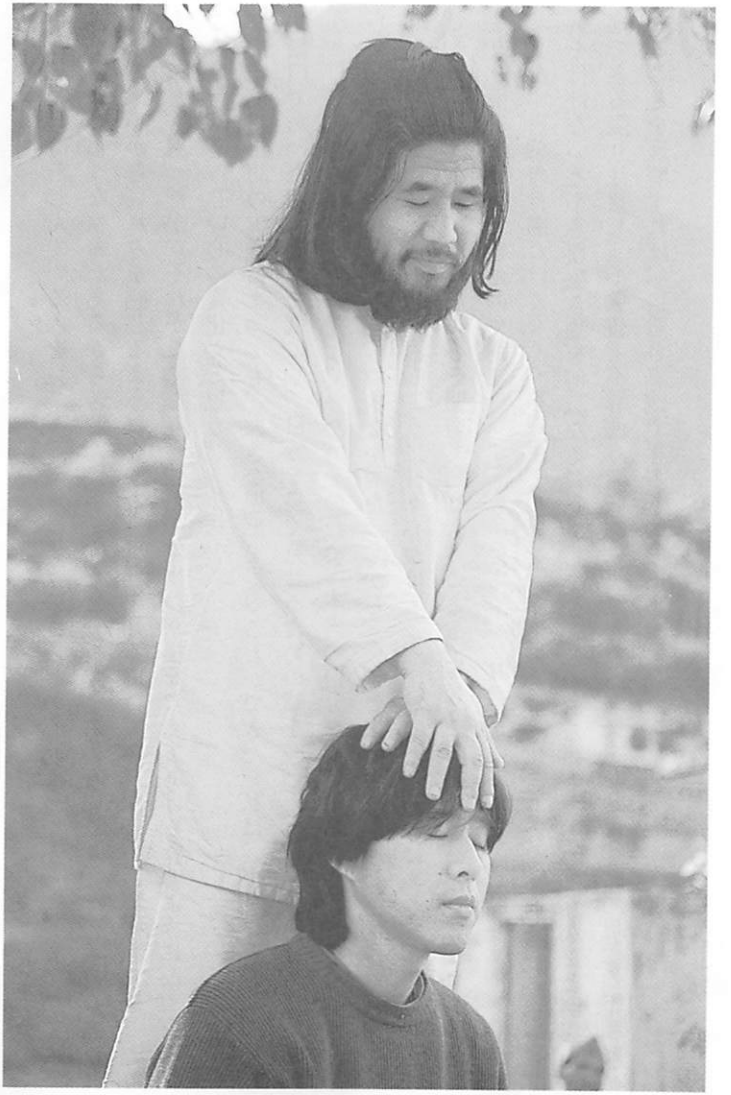
六道の悲しみを超えて——。

（九一年四月現在　三十八歳）

## ❖ アパーヤージャハ ❖

私は、尊師の説法が好きだ。私達を本当に苦しみから解放する真理の道を説き示してくれる。尊師の説法を聴く度に、新たなる発見があり、新しい感動がある。真理の法によって心の奥底が揺さぶられ、心は歓喜する。私は入信して以来、できる限り毎日説法を聴き、繰り返し教学して真理のデータを吸収した。一時的な喜びを求めることにより結局は苦しみに導かれる現世的なものの見方を離れ、すべては無常であること、執着は苦の原因であることを学んだ。

真理の法を多く学ぶことにより、真理にのっとって考えることができるようになった。自己の行為がどういう結果を生むのか検討できるようになり、周りの出来事についても真理に基づき考えることができるようになった。例えば、人から悪口雑言を浴びせられても、これは自己が過去になしたカルマが返っているんだ、自己のカルマを落としてもらっているんだと考えることができるようになり、怒りの心が生じず、どんな状況でも心が安定し、平安でいられるようになった。



また、例えば苦しんでいる人を見て、この人はこういう貪りの心があったから苦しんでいるんだとか、このような執着があるから苦しんでいるんだと分析できるようになり、そのような人々に対して、心から哀れみを感じるようになった。真理を知る前は、エゴが強い人に嫌悪を感じたりすることもあったが、それがなくなり、彼らの本当の幸福を考えてあげられるようになったのだ。これは、素晴らしい心の変化だと思う。

加えて、正語の実践によっても、大きな恩恵を得ることができた。私は、小さいときから比較的無口であったが、周りを気にし、自分を良く見せるための嘘をついたり、自分を認めてもらおうとして必要のない言葉を発していた。そのため、本当の自分を表現することができなかったし、心を開いて人と語り合うこともできなかった。しかし、真理と出会い、真理を学ぶようになって、だれに対しても真理を正しく語るように日々心がけるようになった。それによって、自分を表現できるようになり、もちろん心を開いて語り合うこともできるようになり、本当に信頼し合える法友を得ることができたのである。

また、言葉の統御だけでなく、不殺生、不偸盗、不邪淫の戒も実践した。不殺生については、気を付けないと小さな生き物を何気なく殺してしまうことがあるので、そのようなことがないようできる限り注意し、不偸盗、不邪淫も徹底的に実践した（悪業をなせば、結局自己の不利益になることを理解すれば、自然と実践できるものである）。

そして、日々の生活においては、今自分ができるワークにできる限り集中し、一生懸命行ない、功徳を積めるときには可能な限り功徳を積み、そして修行ができるときにはできる限り集中して修行を行なった。自分に与えられた役割、今自分がやるべきことを日々全力でなすように心がけ、また、小さな悪業を恐れ、どんな状況でも悪業を積まないぞと思い、今なしている功徳はまだまだ小さく、もっともっと功徳を積みたい、多くの功徳を積みたいと願って、二正断（にしょうだん）二正勤（にしょうごん）の実践をなしてきた。

これらの実践を日々行なった結果、出家して約一年後、私はついに正しいサマディに導かれた。尊師の温かい愛と、多くの先輩方の励ましによって、三つ目のヨーガであるマハー・ムドラーの成就をさせていただくことができたのだ。

一九九〇年の六月末から、約二週間のマハー・ムドラーの極厳修行（きょくげん）をさせてもらったが、そのときはまだマハー・ムドラーの成就に至らなかった。しかし、さらに徹底的に功徳を積み、そして真理のデータを記憶修習（きおくしゅじゅう）し、また、拘置所の中でカルマを落としてもらって、その年の十一月にマハー・ムドラーの成就をし、欲望を超えることができたのである（このとき、私のカルマを落としてくれた検事さんや拘置所の方々には、大変感謝している。この功徳によって、いつか真理に導かれてほしいと思う）。

煩悩から解放された自由な境地、輝くばかりの光に包まれた素晴らしい内的体験は、他の何もの

にも替え難い。できるだけ多くの人が真理の実践によって、素晴らしい体験をして、苦しみを滅していただきたいと思う。そして、本当の喜びを分かち合いたい。私自身も、より一層高い境地、安定した境地に達するため、これからも全力を尽くしたいと思う。

（九一年四月現在　三十一歳）

# マハーヤーナ・スートラ

## 大乗ヨーガ経典

## 麻原彰晃 著

### 解脱——魂は光を超えて飛翔する

◎仏教、ヨーガに共通する真実の宇宙観
◎預流向からマハーヤーナまで
——初めて明かされる大乗ヨーガの全ステージ
◎解脱とは何か
——そのすべてがここに証明される

◎五蘊、および四正断
——現代に甦った仏陀釈迦牟尼の法
◎すべての疑問に答える質疑応答編
◎修行法の正しさを証明する、
四名の解脱者の体験談

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ)
定価3090円(送料300円)

**ついに真理を手に入れた!**

塩田英二郎さん
(大阪府 公務員)

何千年にわたって多くの人々が求め続けてきた「真理」。それがこんなに簡単に手に入る現代人は何と幸せなのだろう。『マハーヤーナ・スートラ』には、実際に解脱を体験した者でしか書き得ない迫力と真実味がある。

**不思議と希望がわいてくる**

岩崎美智子さん
(滋賀県 英語塾講師)

この『マハーヤーナ・スートラ』を何回も読み直すと、不思議と解脱というものが身近に思えてきます。私のような凡夫でも、完全に苦から脱却できるかもしれない、そんな希望がわいてくるのがこの本の素晴らしさです。

**宇宙のすべてが説き尽くされている**

岡田弘幸さん
(群馬県 工員)

遠い過去から、人々の魂を導いてきた聖なる流れ。かの仏陀釈迦牟尼も、他の偉大なる聖者達も、皆その一本の流れに沿って進み、真理の大海へと人々を誘い続けたのだ。その遠大なる真理の全貌が今ここに明らかにされた。

**遥かなる世界に戻るための地図**

小林之生さん
(東京都 会社員)

欲望や煩悩に惑わされ、遥かな高い世界からこの苦しみの現象界に落ちてきた私達の魂が、再び絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界に戻っていくための地図となるのがこの「マハーヤーナ・スートラ」である。

**魂の故郷へと至る道標**

磯田 薫さん
(神奈川県 会社員)

もう雑多な書物はいらない。私達はただこの偉大な本にのっとって真理の階段を一歩一歩確実に昇っていけばいいのだ。そこには、私達の魂の故郷、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界、マハーヤーナがあるのだ。

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。
オウム出版 〒154東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325

# 絶対幸福の鍵を解く

# 生死を超える

改訂版

現実生活の苦悩から修行を志し、ついに解脱するに至った麻原彰晃尊師の貴重な体験をもとに、釈迦牟尼の「縁起の法」が、実はクンダリニー・ヨーガのプロセスそのものであったことを説き明かした名著「生死を超える」。

八十六年十二月発売以来、宗教、精神世界に興味を持つ読者に絶大な支持を受け、解脱を目指す修行者にとって、手放すことのできない〝バイブル〟となっております。新たに八人の体験談をまじえて贈る全面改訂版。

麻原彰晃

◎誰にも書けなかった知られざる世界が今ここに！
◎真実を求めるあなた、人生の悩み、苦しみを乗り越えたいあなたに贈るヨーガ、仏教の真髄！
◎修行者二十一人の豊富な体験談も満載！

麻原彰晃著／B6判／定価1854円（本体1800円）

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料300円）

●オウム出版 ●〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03(3439)6043/郵便振替：東京2-109325

# あなたの持っている本当の力

〈本書内容より〉

●その一「天耳通」

九〇年七月

「助けてくれー！」

瞑想中の私の耳に突如として聞こえてきた悲痛な叫び。芦川君の声だ。間違いない。一瞬ある種の不安が私の胸をよぎる。

私はすぐさま天耳界の神々にお伺いを立てた。

「芦川君の身に何か起こったのだろうか？」

時をおかずして神々の声が響く。

「救え、救え、救うんだ！　まさに時期、これ以上家においておくと危険だ。救い出せ。」

「――それは、監禁されているということか？」

「そうだ。」

神々は答える。

「場所は家で間違いないか？」

「間違いない。」

「薬物は使われているのだろうか？」

「使われている。」

「ということは、薬物が使われていて、家の中で監禁状態にあるんだな。」

「そのとおりだ。あと一週間が限界だ。」

「これ以上家においておくと、彼の精神が破壊されてしまう。何としてでも救い出せ。」

そうだったのか。監禁されていたのか。ちょうどそのとき、内弟子の一人であるジーヴァカ師が私のもとにやってきた。そして切り出したのである。

「尊師、芦川君のことなんですけども――」

……

# 神秘をころなく公開！

近日発売！

瞑想家待望の書

# 超越神力 PART 1

ちょう　えつ　じん　りき

人の魂に宿っている不思議な力
――それを発現させるものを修行という。
多くの弟子達が獲得した神通力の紹介を交えて
麻原尊師の力が今明らかになる。
尊師のあのカリスマ性はどこからくるのか!?
激しいオウム・バッシングと宗教弾圧の中、
なぜに人々が麻原彰晃を、オウム真理教を求め続けるのか。
あなたはその答えを本書に見いだすことができるだろう。
そして、心のベクトルを変え、神の道を選択するなら、
あなたにも尊師の弟子と同様、
神秘的な力と心の平安がもたらされよう。
これは人生を変え得る一冊である。

麻原彰晃のあますと

仏陀の限りない叡智がここに甦る！

# 原始仏典講義 一

麻原彰晃

どんなに待ち望んだことだろう、この日を！
そして真理の復活を！
けがれきった現代にもたらされた
この灯明は、
私達に安らぎの世界を示すだろう
どんな学者も修行者も解き明かせなかった
仏陀釈迦牟尼の真理の法を、
あの麻原彰晃が鋭く解説！

最終解脱者麻原尊師が解き明かす仏陀釈迦牟尼の真実

【第一巻】

◎特　徴◎

- 『マハーヤーナ』未収録の『梵網経』第三誦品を詳述！
- 現代語訳をさらにわかりやすく全面改訂
- 仏陀釈迦牟尼の教義の根幹をなす二つの経典を完全版で一挙掲載！

原始仏典講義・第一巻
◆神通、宇宙観、そして瞑想プロセス
雑阿含経・五蘊相応、梵網経、
神足相応、沙門果経

以下続刊!!

A5判・312ページ・定価2500円（本体2427円）ご注文は書店にてお願いいたします。
直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料300円）
オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043　郵便振替　東京2-109325

終末への足音が聞こえる——
もう何もかも手遅れなのだろうか

# 滅亡の日

## 麻原彰晃

### 『黙示録大預言』の秘密のベールを剝ぐ

聖書の奥儀中の奥儀といわれ、その難解さゆえ、多くの論議の的となってきた『ヨハネの黙示録』。人類のターニング・ポイントを迎えて、日本は、世界はどこへ行こうとしているのか。最終解脱者・麻原彰晃尊師が『黙示録』を徹底解読し、二千年前、ヨハネが見たものを今明らかにする。獣の数字666とは？ハルマゲドンはいつか？『黙示録』に示された戦慄の近未来は、もうそこまで来ている！私達に残された道はあるのか……？

B6判／1854円

---

## 滅亡から虚空へ（続・滅亡の日）

『滅亡の日』で明らかにされた恐るべき終末。その大破局の後に来る衝撃の世界とは？　生き残る者と滅び去る者の明暗。初めて明かされる虚空期の真実。着々と進む滅亡のシナリオを知ったあなたは、今、運命の選択を迫られる！

B6判／1900円

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料各300円）
オウム出版　〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL：03(3439)6043　郵便振替：東京2-109325

◉待望の改訂版発売!◉

# 超能力 秘密のカリキュラム

癌・エイズだって、怖くない!!

麻原彰晃著

健康編

改訂版

ヒマラヤの奥地に眠るクリヤ・ヨーガの秘法を公開して大反響を呼んだ名著が、改訂版となって再登場!アレルギー性鼻炎から癌・エイズまで、西洋医学の限界を破る治療法を病名別に詳しく紹介した本書は、初版発売以来、病苦に悩む多くの人々を苦しみから解放してきました。あらゆる病を治すだけではなく、超健康体・超能力をもたらし、霊性を飛躍的にアップさせる秘技を満載。新たに体験談も加わって、より充実した内容に。

B6判/定価1100円
(本体1068円)

## 喜びの声もいっぱい!

◆娘のアトピー性皮膚炎が、なんと数カ月で完治しました。
(満生輝世子さん　福岡県)

◆医者にも見放された、しつこい水虫・たむしもみるみる綺麗に!
(垂井明美さん　大阪府)

◆淋病が、ガージャ・カラニーで治った!
(北村道一さん　東京都)

◆たった1カ月で、9キロの減量・禁煙に成功!
(上埜利一さん　富山県)

◆眠れないほどのリューマチの痛みが、完全に治りました。
(田中和利さん　北海道)

◆子宮筋腫まで良くなりました。(吉田恵子さん　静岡県)

◆隅にも行けないほどの自律神経失調症が治るとともに、酒・タバコとも縁が切れた。　(小林正樹さん　北海道)

◆ムチ打ちの痛みが、わずか2日間でなくなりました。
(西沢浜子さん　静岡県)

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL.03(3439)6043　郵便振替:東京2-109325

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『マハーヤーナ・スートラ PART 2』読者係」までお送りください。

また、オウム真理教に興味を持たれた方は、下記の資料請求券を添付したハガキ、あるいは電話にて全国のオウム真理教道場までお問い合わせください。詳しい案内書をお送りいたします。

〒418-02　静岡県富士宮市人穴381-1
オウム真理教「『マハーヤーナ・スートラ PART 2』読者係」

**◆各道場のご案内◆**

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-02　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

マハーヤーナ・スートラ PART2
キリトリ線
資料請求券

『マハーヤーナ・スートラ PART 2』

一九九一年五月十五日　初版発行

定価　二一〇〇円（本体二〇三九円）

著者　麻原彰晃

発行者　松本知子
　　石井久子

編集　オウム出版編集部

発行所　株式会社オウム

東京都世田谷区世田谷二一八一十七

郵便番号　一五四

電話　〇三（三四三九）六〇四三

振替　東京二一一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

©Shoko Asahara 1991
ISBN4 - 900497 - 55 - X　P2100E

# マハーヤーナ・スートラ

PART2

麻原彰晃 著

ISBN4-900497-55-X C0014 P2100E 定価2100円(本体2039円)